

# 孤城落日

月島捷樹

始まりは声――

アニスの神官・カーンの言葉は全土を巡る。

それは虚言か真実か。

諸国は惑うも沈黙し、諸国は惑いて動き出す。

言葉通り、アニスの滅びが始まる。

始まりを告げる皇子が降り立つ。

終わりを告げる皇子が降り立つ。

全てはこの時始まった。

全ての終わりが目覚める大地、フルクレリアに全ての精霊が揃う時――――

アニスの王サイモンは内なる魔瘴の暴走に目覚め、レイナの王ゴドウィンとその手にかけて。駆けつけた騎士達を悉く退けて、光の塔へ向かったサイモンは神官の手によって浄化されるが、抵抗したサイモンを相手に神官もまた重傷を負う。

一方、事態を把握していた赤騎士アリスは、北と東の仕官を纏め上げて南へ向かわせ、自身は東から中央を跨いで西へ向かう。

西から南下し、故郷ヴァリアント王国へ向かう黒騎士カタルシアは、その途中で喫緊の知らせを受け、急遽南塔への進路変更を余儀無くされる。

王国全土を覆い尽くしていた結界は、光塔が神官を失った事で消失。

抑制されてきた力を取り戻した魔族達は、その姿を隠す事なく蔓延り始め、国内は混乱を極めた。

その混乱に乗じて、要人が次々と暗殺される中、国外からの侵入者も何かを企てていた。

中央を経由して西に向かった赤騎士アリスは、時雨城で侵入者の剣士を撃ち破り、奪われた宝具を取り戻してフェネル王国へ向かった。

一時的に南塔へ赴いていた黒騎士カタルシアは、北や東から逃れてきた仕官達と合流し、二手に分かれて出国を始める……

大国の落日に、諸国は何を想って風を読む――

動く者、動かざる者、夫々の思惑がフルクレリアの旋律を奏で始める。

時を同じくして南の果てに、天の魔女が目覚めます。

北のアニスと南のウィンディア。

挟まれて走る戦慄は、全土を巻き込む兆しの黎明。

目覚めと眠りに翻弄された、古代・精霊戦争の中期。

————フルクレリアが赤く染まる。

「こいつらを殺さずにとってのは無理が有るぜ！」

「同感だ。正直、我々が生き延びる事で精一杯だ。彼らを生かす事など考えていては戦えない」

「民間人どもはどうだ。国境に着いたのか」

「まだだ。私の目とアメシスタ様、ビエラ殿の導法で守っているが、とても前に進める状況では無い」

「爺さんは何やってんだよ！」

「囲まれているんだ。お前達よりも分が悪い」

「ここは私が引き受けよう。ジェフリー、ジョルカエフ殿の支援を」

「……………マジかよ。無茶だ！」

「私が反応炉で援護しよう。魔導を使えるほどの余裕は無いが、何とかして見せよう」

「ちっ……死ぬなよ」

先陣を務めるジョルカエフ殿の援護にナイトレイ元帥が赴き、守衛隊や宮廷騎士達も志気が上がったようだ。

ガビエル殿の剣技は力こそ元帥には及ばないが、敏捷性に長けて居られる。回避する能力に優れている彼の剣技には相応の集中力が必要となるであろう。ケルドとミティに闇魔導を印加して心の安定を促すだけで充分か。

彼の剣技から迷いと恐れを消してしまう事は、同時に容赦なく魔族を殺めてしまう事にも成った。彼らとて正気では無い。望んで自我を失った訳でも無いだろう。しかし、私達も死にたくは無い。

一降り掛かる火の粉は、払わねばこちらもまた屍となる

ナイトレイ元帥が先陣の援護に出て、我々は漸くマジーク国境門に辿り着いた。

アニスの現状を見たマジークの国境守備隊が怖じ気付いている。亡命の申請は受諾されているが、門を開けようとし無い。

ナイトレイ元帥、ガビエル殿、ジョルカエフ殿を筆頭に、宮廷騎士達にも奮起してもらって時間を稼いでもらい、私はアメシスタ様とビエラ殿に協力を要請し、国境門付近に聖浄結界を布く事にした。

光塔の聖浄格とまでは往かないだろうが、幾らか魔族を退けられるであろう。

「良いですか。燐石に直接導法を添加して下さい。式融合は私が司ります」

赤法聖導法と魔導氷法を闇魔導術で合成する。燐石融合を試みるのは当然初めてだ。今ほどミストラルの論文を読んでいて良かったと思う事は無い。惜しむらくはフェルナンドの論文をあまり読めなかった事か。

式融合は成功したが、突入反導を巧く抑え込む事が出来なかった。

しかし結界の召喚には成功し、何とかマジークの守備隊を説得する事は出来た。

民間人をマジークへ入国させ、続いて守衛隊も続々と入国してゆく。

三人はレイナ宮廷騎士達を先に向かわせて残り、ビエラ殿、アメシスタ様も入国された。

「後はあなた達だけだ」

私がそう叫んだ時だった。

一やはり完全には召喚出来なかったか！

結界が部分的に崩壊し始めた。

「結界が持たない！ 早くこちらへ！」

「急げ、爺い！」

ガビエル殿と元帥は戻ってきたが、ジョルカエフ殿は戻ってこない。

マジークの守備隊が私たちが門の中へ案内する。

しかしまだジョルカエフ殿が――――

「若人に栄えある未来を」

一馬鹿な！

「おおい、何してやがる！」

「ジョルカエフ殿！」

彼はアニスに残り、アニス側から門を閉めた。直後、我々三人の前にマジーク側の門が下ろされる。

私は頭が真っ白になった。

ジョルカエフ殿を残して門を閉めた守備隊を、二人が抗議している。

いや、マジーク国の守備隊として、判断は間違っていない。彼らは彼らの仕事をしたんだ。

私は立っている事も出来ず、膝を突き、地に手を突いた。

一私のせいだ……

私が突入反導を巧く抑え込めなかったからだ。あれがしっかり出来ていれば、合成結界はあんな斑で歪な召喚には成らなかった筈だ。

私の力が足りなかったばかりに、出す必要の無い犠牲を出してしまった！

アルマドラマジーク王国。国境門を抜けた先はパルファンという場所らしい。その地を預かる騎士団の将軍が私たちを出迎えた。

将軍と言うには年若い少女で、まるで部下が親のようにも見える。

「申し訳有りませんが、暫くこの地で休まれた後、避難民の皆様は西の果てに有るトゥワランスへ向かって頂きます。そちらの方が穏やかで過ごしやすいでしょうし、何より人も居りませんので、他所者と煙たがられる事も御座いますまい。仕官以上の方々はどうぞ私と共にアルマへ上洛願います」

聞けばトゥワランスとは、何も無い辺境の国境地域で、違法入国を取り締まる場所であるせ

いか、余り居心地は良くないようだ。この辺りの諸国に詳しいガビエル殿とアメシスタ様が、そう口を揃える。

民間人はレイナの守衛隊に守られて移動していった。

この国は確かに魔族が居ない。しかし、同時に精霊も居ない為、私たちは随分疲れたものだった。

西塔に配属された時、マティスの民が言っていた事を思い出す。

『この国に来たら、もう祖国に戻りたいなんて思えないなあ。だってそうだろう？ この国ほど快適に暮らせる場所なんて草々無いぜ。俺はこの国に居られるって言うなら何だってするぜ。だからよ、俺に出来る事が有ったら何でも言ってくれよ、お館様よお』

一なるほど確かに不便極まりない

話に聞く、昔のアニスのような、そんな印象を受けた。

民の服装や住居の造り、兵士の装いから王都に至るまでの景観……全てにおいて前時代的だった。

騎士団の長を務める少女に至っては、この国の娘では無いのか、まるで異質そのものだ。長く伸ばした髪は纏め上げもせず後ろで縛り、やたらと無駄に大きな袖の服装は両肩が裂けていて、まるで貧民のようだが、どうして。中々上質な気風を感じる。しかし植物を編み込んだだけの、靴とも呼べぬあの履物は一体何だ……気品は感じられるが、身形はどこか見窄らしい娘であった。

「恐らくオースの者でしょう。彼女が気になりますか、ランス殿」

「あ、ああ。彼女だけは周りの人たちと服装が違うから……騎士団長の服装なのではないですか」

「あの服装は中部地方のトキワ、ライセイ、オースに見られる特徴的なもので、マジーのものではないですよ。そういえばアニスにはあまり中部地域の民は居りませんね。私とメガリア出身のファーディナンド様だけではないですか」

「ガビエル殿も中部の出自なのですか」

「ええ、エクサリオです。ただエクサリオもメガリアも中部地域の中では西の端ですからね。トキワとは文化がとても違います」

「ふーん。俺から見ればみんな変だがな」

そう言って後ろから元帥が話に入ってきた。この二人はファーディナンド殿の弟子だからか、非常に仲が良い。

「お前はアニス人じゃないか」

「アニスはアニスでも、俺の生まれたストームランドはフルクレストにあるんだよ。本土とは全然違うぜ」

「フルクレスト？ フルクレストの民は青い髪では無いのか」

「そう言われれば……確かに」

「あのなあ。青いのはホワイトランドだけだ。あの辺りは緑色が多いんだ。俺の髪が赤いのはアニスからの移民の家系だからだ。ストームランドに生まれた俺から見れば、フルクレリアのお前らは妙に窮屈だ。戒律だの規則だのってな。ま、それよりも本土は暗くて嫌になる」

そう言われて見上げれば、この国は雲が無くて明るいものだと気付かされる。風は少々強く、しかし良い香りのする国だった。

王都アルマに着いた私はその人の多さに驚いた。それは萎縮さえしてしまうほどに。

「活気がありますね」

「ああ、久しぶりだ」

そう言うのはガビエル殿とアメシスタ様。

「必要以上に人が居過ぎだろう。なんかここまで多いと逆に圧迫感を感じるぜ」

そんな元帥に同意したい。

マージに入国して以来、ずっと黙り込んだままのビエラ殿にも少しは安堵する様子が伺える。

ビエラ殿にとってジョルカエフ殿は共にアニスに入国した幼馴染。目の前で彼を失った衝撃は誰よりも大きかった筈だ。しかしジョルカエフ殿を救えなかった事で自責の念に駆られていた私に、誰よりも早く手を差し伸べてくれたのもビエラ殿だった。パルファンからアルマまでの道中、彼はずっとジョルカエフ殿を悼んでいた。彼の周りには精霊達が沢山集まっている。彼の悲しみに多くの精霊が引き寄せられている。

国が違えば精霊も違う。この国の精霊は地精が多い。哀れみと慈しみと愛の精霊は人の感情に敏感だと言うが、改めてそれを実感するものだ。

「暫くの間、こちらで待機をお願い致します」

騎士団の女がそう言って私たちを置き去りにした。

「駐屯所か。あの騎士団が王都で滞在する為の場所なのだろうな」

「しかしあの騎士団、女ばかりだったな」

「ああ、良い女ばかりだ。思わず声をかけたくなる」

「ジェフリー……」

「分かってるよ。他国の騎士を口説くなんて真似はしねえ。だが同じ女ばかりでも、レジスの女に比べれば手頃だと思わねえか？」

「手頃って……」

「はっはっは、確かに。伊達に権力を持った女達よりも淑やかに見える。ただ、逆を言えばこの国の騎士がそれだけ田舎臭いとも言える」

「アメシスタ様――」

「田舎者で悪かったな。話に聴く通り、アニスは傲慢な奴ばかりだ」

現れたのは先ほどまで私たちを先導していた騎士団の女では無かった。大きな剣を持った、やはり少女だった。

「何だとお！」

「よせ、ジェフリー」

―この国は子供の騎士が多いのか

「ほう。今度はホンフォンか。この国は中部諸国のコレクターか？ ……久しぶりだな、ミンユエ」

「はぁ？ なんだお前、知り合いなのか」

「ミンユエって、ホンフォンの……まさか！」

「パルス殿下がなぜアニスに――今はフェイスユエ・ユイを名乗っている。悪いが身分は隠している。弁えて欲しい」

「解りました。失礼をお許し下さい」

「カルマ王はそれを存じて居られるのか、フェイス殿」

「リユーヌの方々も知っている。だが、それ以外の者は知らない」

「そうか。私の方はアニスに辿り着いたらこの様だ。サイモンに騙されて雇われ領主をやっていた所だ」

話しぶりからしてホンフォンの貴族……恐らく皇太子？ いや、皇太子がなぜ他国の騎士に成り下がるような真似をするのか。しかし皇族なのだろう事は解る。アメシスタ様もセイレーンの皇族だ。彼がこれほど親しげに、権威を剥き出しに話しかける姿を見たのは初めてだ。

ホンフォンも歴史の長い国だが、ヴァリアントに次ぐ歴史を持つセイレーンほどでは無い。アメシスタ様はヴァリアント王家以外には決して謙らない事でも有名な方だ。

「ユイ様、と申されましたか。何故こちらに？」

「余興だ。暇だったからどんな顔ぶれの猛者共が集まっているのかと思えば……こんなものか。アニスには屈強の騎士が居ると聞いたが、それ程でも無さそうだな」

「言ってくれるじゃねーか小娘え」

「お、おい、止せジェフリー」

「ナイトレイ、侮らない方が良く。彼女はフィスト様やレイナ候と同じくらい強い」

「え……」

「ああ。アメシスタ様の言う通りだ。フィスト様に次ぐ至高剣士がマージに居るとは聞いていた。成程どうして。納得致しました」

「その二人は居ないのか、パルス殿下……と、お呼びしても差し支えなかつたろうか」

「構わん。今はアニスの雇われ者。気にするな。私は素性を隠してはいない」

「レイナ侯爵はフェネルへ向かわれました。フィスト様は、今は行方が知れません……失敬。私はアニス王国で西塔を預かるローズランスと申します。ここに来る前までは東でアリス様と共に居りました。今はそのアリス様の命を以て是に御座います」

「そうか、ご苦労だった。残念だ。赤の武神と手合わせでも出来ればと思ったのに」

ルマジーク王国・筆頭騎士。雇われの身でありながら王宮守護の要であるらしい。ホンフォンの人族とは思えない大振りの剣を携える彼女は、若くして世に名を知らしめるあのアリス様よりも幼い。未だ叉角も生え揃っていない。

果たして彼女が本当に強いのかどうか。

私には先ほどの騎士団長を務めていた少女の方が強そうに見えた。

ユイと名乗る彼女の目には迷いと焦りが見える。しかしあの騎士団長にはそれが全く無い。穏やかで物静かな、一見頼りなさそうにも見える彼女の心は乱れが無く、その隙の無さには恐怖さえ感じた。

ユイ殿には恐怖を感じない。



それから数日を過ごした頃、随分王都が騒がしくなった。戦争が始まるのだと言う。

ファナティス様は無事にヴァリアントへ戻られたようだ。

ガビエル、ナイトレイ以下レイナ宮廷騎士達は待機を命じられ、アニス出身者の官位である私と、政務官のピエラ殿、そしてセイレーン皇族であるアメシスタ様の三人だけがオーヴへの入城を許可された。

私たち三人を城内に案内するのは山賊のような男達だった。

—こんな粗野な男達が王城に出入りするような国なのか

裸同然で貧相な男達の手には斧や大剣が握られている。私たちは黙って彼らに従ったが、これではまるで囚人のような扱いだ。アメシスタ様も赤良様に不快を顔に出して居られる。

「ご苦労だった。ここからは俺がお連れする。お前達は下がって休んでいる」

「へ、へい。では、これで……」

大きな扉を前に、品の無い男達は戻っていった。

扉の前には小綺麗な身形の少年が立っている。騎士団長の少女と同じく赤紫の髪をした少年の身形もまた、男達同様に上半身は裸同然だったが、身に纏う装飾や衣類、そしてその立ち振る舞いは王侯貴族を思わせる。長い髪はしっかりと纏められており、体格からして大剣や大斧を振るう騎士なのであろうと伺い知れる。

促されて城内を進み、謁見の間であろう広い部屋の前まで来ると、少年は「俺もここまでだ」と言い残して去っていった。

部屋の中は薄いカーテンが何重にも掛かっている事は何も見えない。

「てっきり謁見の間にでも通されるのかと思ったが、まさかこんな場所とはな」

アメシスタ様の怒りが籠った口調はそう小さく呟いた。

中に何人かの気配を感じる。呼ばれるまでここで待てと——そう言う意味では無いのか？ アメシスタ様が一人で歩を進められ、カーテンを乱暴に捲った。

「いつまで待たせる積もりか！ 我らを囚人のように扱った後はこんな場所か」

「あ、アメシスタ様、どうか落ち着いて下さい」

こうなってはアメシスタ様に付いて行った方が早いだらう。少々強引に、アメシスタ様を引き止める振りをして私とピエラ殿も中に入らせてもらった。

「これはこれは失礼を。何せ思わぬ事態、思わぬ来訪者でございました。お招きしたわけではありませんがね」

「止さぬかベルナティス」

貴族風の男が三人。奥に席を取っているのは……マジーク王か。

「随分見ぬ内に御立派になりましたな、殿下」

「ふふ、御立派な飼犬になったと聞き及びますがね」

「ほっほっほ、上手い事を仰りますな、シルベートル様」

「止めぬかお前達」

「マジークは随分無礼な飼犬を飼育しているようだな。流石はラフレシールの犬と言った所か。眷族でも無い一般人がよくも権力者として大きな顔が出来るものだ」

「はっはっはっは、威勢が良いな。嫌いじゃないぜ、そういうのは」

「我らリュヌを愚弄するか！魔女の子孫が」

「こんなものに同列扱いではマジークが草臥れた国と言われても無理は無いな」

「言いたい事はそれだけかな」

「ふん、これくらいの皮肉は受け容れられよ。それなりの不快を賜ったのだからな！」

「セイレーン殿下の貴方には我々も特に話す事は無い。貴方は国に返るなり、好きにされるが良い。問題は、アニス国民の扱いについてだ」

ヴァリアントへ戻られたファナティス様がヴァリウス王への報告で救命・救援要請をされた。

ヴァリアントでは事の真相を探る目的で二個中隊の派兵を予定しており、それをマジークにも求められたと言う。南ではセイレーンとウィリンドによるウィンディアの休戦協定が締結され、両国共にこの度の救援に応じる姿勢をみせているらしい。

我々アニスの避難民は、民間人以外、戦える者、官職に就く者はヴァリアントへの集結が命じられ、ヴァリアントにて黒騎士ファナティスを筆頭に隊を整えるよう命じられた。

「さて。そこで殿下に一つ確認しておきたい事が御座います」

マジーク王が静かにアメシスタ様を見てそう切り出した。

「貴方を縛りつけていたアニス王は死んだ。あなたはこれからどうなされるお積もりか」

「死んだかどうかはこれから調査するのだろうか？ それが終わるまでは静観させてもらう」

「では、まだアニスの者としてヴァリアントへ赴かれるのか」

「確認は取れていないのだろう。私も下手に動く事は得策では無いだろうな」

「イニス閣下が目覚められたのですよ」

「会った事も無い先祖が何だと言うのか。それに……今は顔向け出来る状況では無い」

「分かりました。事はセイレーンにも伝えておきますが、差し支えは？」

「ない。好きにするが良い」

オーヴを後にした私たちが駐屯所に戻ると、先ほどの少年が騎士団の少女と共にそこにいた。

「やれやれ、中部の王族はマージの支配下にでも成ったのか？ なぜお前達がマージの一兵卒などしている」

アメシスタ様がそう仰ると、二人は彼の前で膝を突いた

「さ、先ほどは気付きもせず、誠に申し訳御座いません」

「いや、俺は気付いてはいたんですが、でもまさか、本物とは思わず、ただ他人の空似かと……」

「シャーラ！」

「なんだよ、ちゃんと膝は突いてる」

まだあどけなさを残す子供だ。どこの国の王族かは知らないが、この国は他国の王族を何人も懐に抱えて何を考えて居られるのか。

「ふん、構うな。立て。今は私もアニスの雇われ。お前達もカルマに唆されたのか」

「い、いえ！滅相も御座いません。わた、私たちは……」

「俺達は自分の意思で国を出ました。修業の旅です。そして、実力で傭兵としてこの国に雇われたのです。だから俺達はどこの誰だとか、何様とかじゃありません」

「わたくしも、素性は隠してはおりませんが、できれば、あまり知られたくないです……でも、父上や母上にはちゃんとお許しを頂いて居ります」

—この娘は後継者では無いのか

王族の子息が他国に兵として雇われる……そんな事があり得るのか。国としての尊厳は無いのか。仮に同盟国であったとしても、兵として扱う事などしないだろう。

マジーク王カルマ。何を考えている——懐の読めない方だ。

「じゃ、俺もそう言う事で」

「シャーラは頂いて無いじゃない！」

「うっ、良いじゃね—か別に。俺は斧で生きて行くんだ！」

「まあ、お前達がそれなら納得はしてやろう。しかし、ミン……フェイス、だったか。あれはどう説明する」

「ああ、フェイスユエも同じです」

「あ、あの、流石に彼女だけは素性を隠しています。私たちは隠していません。それ以上は、どうか……」

「ふむ。まあ良いだろう。それで、シャーラと言ったかな。お前は隠していないのか」

「ああ、これはフェイスユエの真似で、俺もかっこいい名前がいいなと……それだけです」

「あ、それは、本当です」

三人とも身形はまるで違う。同じ国の出自では無いのだろう。そしてあの大剣を携えた子供だけが素性を隠している。まさかとは思いますが、他国の後継者を王宮に召し抱えるなど……しかしガビエル殿のあの話しぶりや態度を思い出しても、この二人とは少し格が違う事は解る。

「三人とも要職に就いているのか？」

「あ、はい。私は西方のパルファンを任されて居ります。魔導騎士団の司令官を命じられました。名に偽りは無く、キリエ・ケイです」

「俺はアプラでシャーラ・シアフォンって名乗ってます。山賊共のヘッドをしています。元々やつらの縄張りを国が侵してたみたいで、俺がその二つの和議を持ったら、なんか奴らに懐かれちまって……「御頭」って呼ばれるようになって。ベルナディス様や国王様にお許しを貰ったんで、今はアプラで奴らを軍隊として纏め上げている所です」

「どっちが姓でどっちが名なんだ、その名前は」

「どっちもです！ みんなはシャーラとか、御頭と呼んでくれます」

「ほら、やっぱり皆困っているわ」

「うっせーっつーの」

「私はシアフェン・チーでも良い名前だと思うわ」

「だめだ！ フルクレリア最強のマchetteファイターはシャーラ・シアフォン様だ！」

—やはりマchette使いか

体格は南のフィナン殿によく似て居られる。彼もアニスでは筆頭位の四元帥候補と言われた屈強なマジェットナイトだ。残念ながらシャーラという少年はフィナン殿ほど強くはないだろう。だがまだまだ若い。何れはフィナン殿を超えられる日も来るかも知れない。

その後も何やら色々と話されていたが、主に王族同士の話のようで、内容は私にはよく分らないものだった。

この二人の子供がマジークから選ばれた先遣隊を務める事になる。

仮にも他国から預かっているのであろう王族の子息を先遣に任ずるとは……これではまるで人質扱いにも等しい。マジーク王は中部諸国に対してそれ程の影響力を持っているのか。

マジークと言う国は穏健な国だと聞いていた。

軍事力はルーンのベルナディス侯爵以下、連隊が二、三有ると言う程度。

政務官でも無い私が考える事では無いのかも知れないが、この国は明らかに他を圧倒するだけの軍事力を隠しているに違いない。

マジーク先遣隊はケイ司令を筆頭とする魔導騎士団と、シャーラ隊長を筆頭とする戦士隊がそれぞれ小隊を出し、総勢一〇〇名程度の複合編成で出陣。国境門からレイナを北上してピューリティを目指すと言う。

私たちが南塔から国境をくぐり抜けた時、戦える者は守衛隊を含めて三〇〇は下らなかった。それでもジョルカエフ殿を失ったのだ。

この編成である魔族の群れに飛び込むなど有り得ない。南塔まで何人が辿り着けるのか。そして何人が生きて戻って来られるのか。

—マジーク王は他国の王子や姫君を見殺しにする御積もりか！

まだ戦場を知らない子供たちだ。

「やはり私たちはヴァリアントでは無く、あなた方と共に在るべきでは無いのか」

私は「放っておけ」と仰るアメシスタ様を遮ってでも、それは提案するべきだと——居ても立っても居られなかった。

しかし彼らは自信に溢れ「我らを愚弄するのか」と言う。

騎士では無い私にはその言葉の意味が解らなかった。

ナイトレイ殿は私を制止して「そう言うものだ」と言う。

ガビエル殿も、ピエラ殿も、私には同意して下さらなかった。

しかし、しかし——もうこれ以上、ジョルカエフ殿のような犠牲は出したくない！

「戦とはそう言うものだ」

「身の程を知らなければ戦など出来ない」

「お前は騎士を理解するべきだ」

皆が口々にそう言う。それは半ば呆れるように……

何を理解しろと言うのか。

命以外の何を大切にしろと言うのか。

目の前で助けられる命があって、それを助けもせずに放っておく事のどこに美德があると言うのか。

理解などしたくもなかった。

それは私が田舎者だからなのか。私が魔導師だからなのか。私がアニス人だからなのか。

アメシスタ様は「今の内に慣れておけ」と言う。

ビエラ殿は「人としては良い葛藤だ」と言う。

ナイトレイ殿は「世間知らずだ」と言い、ガビエル殿もそれに頷いていた。

私たちはレイナの宮廷騎士団とパルファンで別れ、ヴァリアントへ向かった。先行してトゥワランスへ向かった民間人が暴動を起こしているとの報告が入ったからだ。

チェゼレーアやレジスの民は選民思想が強く、差別意識もあって辺境での暮らしには満足していないのだと言う。

一命があるだけでも良いとは思わないものか

共に向かった守衛隊ではそれを抑える事が難しく、事態の沈静化を図ってレイナ宮廷騎士達を向かわせる事になった。

第三大公家であるレイナの宮廷騎士とは言え、どこまでそれらを宥められるかは未知数だ。しかし、少なくともレイナやファウラーの宮廷騎士は男爵や子爵の地位を有している。何の権威も無い守衛隊よりは、民も言うことを聞くだらう。

伯爵以上の民間人はアニスを出ていないはずだ。

結局私たち五人だけでヴァリアントを目指す事になってしまった。

「そうだ、我々はこれからの芽を育てよう」

そう言っておったな。

そしてその意思を曲げる事なく、良い散り際を迎えたな、ヨアン――

私たちは共に故郷を同じくするニヴァールの田舎者。

共にヴァレ・リュミエールを目指し、共に黒雪城でお仕えする事を夢見て、そして叶えてきた

。

いつかこの国で一番の騎士になるんだと豪語して、本当にその言葉通り、お前は五本の矢に選ばれ居った。あれには流石に参ったものだ。

そんな私も、いつも大怪我をして返ってくるお前を治療している内に、すっかり名医と呼ばれるようにはなったがな.....いくら名医と持ち上げられても、肝心な時に一番大切な命を救えないで何が名医か。

お互い、弟子を持ち、多くの後続を育ててきたつもりだが、昇り詰めても尚、目指すものが有った。

――――アニス王国だ。

アニス王国は完全実力主義。実力さえ伴えば、例えどんな悪人であっても要職に就けると言う

。

当然ながら、どんな悪人も更生してしまうほど、過酷な国であるとも知られている。

だが、話に聞くその厳しさが、私たちには魅惑的に映ったのだ。

そう言ってアニス王国に入国し、消息を絶った騎士や導師は数知れない。

招かれもせず、自らアニス王国へ入国する者は、自力で王都アニジアまで入国しなければならないのが原則。

アニジアに至る諸侯国では、凶暴な魔族達が徘徊していると言う。

無論、アニスの騎士達もそれらの排除に出回って言うだろうが、我ら入国者に対しては特別に扱う事もしないだろう。

そんな事は百も承知の積もりだった。

それは我々の予想を遙かに超えた現実だった。

マジーから入国した我々を待ちかまえていたのは、魔族の群れだった。

しかし魔族といってもこんな桁外れに強い者だとは思っていなかった。

ヨアンは私の護衛に専念し、私も傷ついたヨアンを癒す事に専念した。

王都アニジアに辿り着けば、出迎えに現れた精霊剣士に救われたが、既にヨアンは片腕を失い、私も片耳を失っていた。

これでは仕官するのも難しいか.....そんな絶望に呑まれていた。

「おお、調度良い所に来た。お前、財務は分かるか」

——なぜ私が財務官なのだ

それは王陛下への謁見直後に突然決められて終わった。

私は医者だ.....それがどうして財務.....

「ニヴァールのガルドゥル・ル・エンプルール、ヨアン・ジョルカエフか。噂には聞いて居る。このほどその座を弟子に譲って退役したと聞いていたが.....使えんな。しかも片腕を失っておるでは無いか」

「そこを何とか、ご厚情を賜りたく.....」

「ならばチェゼレーアが貰い受けよう。調度ミスティアの霧塔に外からの風を入れたい所だった」

王への請願は聞き入れられなかったが、その後ろでチェゼレーア公爵がヨアンを拾って下さった。

私は政務官として中央へ残り、ヨアンは極東地域に配属される事になった。

「ピエラ殿、外交長官が予算の見直しを求めています.....」

「またか、あの小娘めが」

「ピエラ殿、おやめください。相手は女王陛下ですよ」

なんで私が貴族共に混じって政治の面倒を見なくてはならんのか.....しかもあの外交長官、やたらと資金を欲しがらる。

財務の面から見て、この国は裕福な国では無い事が判る。

人口が少な過ぎる上、その半数が貴族では無いか。

これでは国も回りますまい。

ただし、多くの貴族は下級に属する者たちで、主に上級貴族の従事官などが多く、国によっては騎士団員が貴族の称号を得ている場合もある。

貴族全てが高給取りという訳でも無いが、庶民はほぼ文無しだ。

この国には娯楽が無い。

民は貴族の為に街を整え、国土を作り上げている。

貴族はそれに対し、民の生活を守り、生活の安全を第一の優先とする。

民はそんな貴族の為に街を作り、生活基盤を整える事を、まるで娯楽のように行うのだ。

だからなのかは知らないが、この国の建造物にまともなモノが無い。

外見からは全く見当もつかない内部構造は、一度入った者を捕らえ、まるで逃がさないと言っても言わんばかりに惑わせる。

こんな庶民達の労働に対する対価を財務で補っていたら、確かに国は破綻してしまうだろう。

この国の財務の流れの多くは貿易等の外交に多くを割かれる。

しかし、もう少し外貨を稼がねば.....出ていくばかりでは国庫も閑散として寂しい。

「外貨ならしっかり稼げているだろう。ただし、少々それを着服している奴らが居るかもしれんがな」

「何で稼いで居られると言うのですか、この国は」

「奴隷だよ」

「ど、奴隷！？ それは国際法では認められておりませんぞ、シェゼレイア公。まさか、黙認されて御出でなのか」

「物が魔族だからな。国際法では人族の捕虜、奴隷の国家間における取り引きは禁じられている。しかしそれが魔族ならどうか——それを定めた法律が無い」

「いや、しかし.....」

「分かっている。件に関してはその内粛正させてもらう積もりだ。法律が無いとは言え、密輸に変わりはないからな。今暫く財務は我慢しておけ」

国が慌ただしく人事異動を行う中———シェゼレイア公め、中々面白いものを創設してくれるのでは無いか。

——東方魔導院と西方聖導院

いいですぞ。

私はこの施設の為なら散財しますぞ！ と言うのは言い過ぎだが、しかし素晴らしい試みだ。ニヴァールにも導術、導法の研究所は有ったが、この施設は後続の育成も視野に入れている。聖導院の総帥となるのは異人の.....随分若い聖導師だが、これまたどうして良い人物ではないか。

論文を中心とした理論派で、聖導や魔導の概念を越えて、導術や導法を学び、研鑽し、そして発展させる。

私も度々顔を覗かせてもらっていた。

久々に聖導法師としての自分を取り戻したかのようで、私は時折中央へ戻る事を忘れて夢中になっていた。

「今度、その医療術で是非、教鞭を握りませんか」

ミストラルにそう言われた時、頭が突き抜けるような喜びと幸せに痺れた。

『これからの芽を育てよう』

いつかヨアンが言っていた言葉を思い出す。

そんなヨアンにもバラデュール以来の弟子が出来たようで、やはり自分たちが今までに培ってきた多くの経験を後続の若い衆に伝えて行けるのは至福のようだ。

こちらも聖導法師が余り居ない事もあって、聖導法の後続育成は私に任せられる事も多くなってきた。

これまでに無いほどの充実した日々だった。



それが突如として暗転した。

何事かとも分からぬ内に、言われるが儘、成すがまま、気が付けば亡命をしているではないか

。

私は一体何をしているのだろうか。

なあ、ヨアン。

私はこれからどうすれば良いだろうか。

いつもお前が傍にいたなあ。

私はこの状況で、アニスに留まって何をすれば良いものなのだろうか。

ニヴァールには戻れない。

———私はどうすれば良いだろうか

「ファーディナンド殿、貴方の力を貸して欲しい。他は全軍を以て民間人を守りながら、このまま南下してマジークを目指せ」

少数精鋭。

自由騎士勲章を持つ騎士が二人。これで充分だ。

ここから西へ北上してヴァリアント国境まで戻るには、マージ国境へ行く道程と比較して三倍以上は有る。この距離で民間人を連れて行くのは難しい。

民間人を守る騎士は麗峰城下守衛隊が二七〇前後、レイナの宮廷騎士が四〇前後。加えて師団長級の騎士、導師が五名。この状況下を生き残るには充分だろう。

全ては私がヴァリアントに向かわなければ始まらない。

本陣より先に出発した私たちを待ちかまえていたかのように、魔族達が私たちに向かってくる。

本来、東に多く西に少ないと言われる魔族達の生息分布だが、どうした事か、こんな時に限って今まで見た事も無い程の大群がこの西側に押し寄せている。

彼らは私たちを見つけると、一目散に向かってくる。それはまるで吸い寄せられているかのように。

私たちは何もしてない。

私たちは極力気配を覚られないよう、細心の注意を払っているつもりだが、それでもこの様だ……

ランスからは「極力殺めないように」と言われたが、そうも言っては居られない。

— 私たちもここで死ぬわけには往かない

まるで狂喜乱舞か。

この魔族達は理性を失っている。怒れる様子や怯える様子がまるでない。それは最早大型青族の群れよりも性質が悪い。彼らは身の危険を回避する事も無く、一心不乱に私たちに襲いかかってくる。その様は既に尋常では無い。当然話など通じる相手では無かった。

これが魔族が邪足る所以なのだろうか。

— しかし何故こんな事に……

— 一体何が起きているのか。それを考えている暇は無い。

体力を温存しながら後翼疾走で地上からヴァリアント国境を目指す。空を行けば魔導の的になる。魔族の使う魔導の水準を侮る積もりは無い。

しかしどうして突然魔族がこんな凶暴に湧いてくるのか。王の乱心と何か関わりが有るのだろうか。

深く考えている暇は無い。

殿下がこんな場所で、こんな状況でお戻りに成られたらどうしろと言うのか。

胸に埋め込まれたフェルナンドの燐石はあれから落ち着きを取り戻し、焼けるような熱さを感じる事はあれ以来無い――だが、こんな時に戻ってこられても困る。刹那が惜しい。

出来る事なら安全なヴァリエントに着いてからであって欲しいものだ。

チェゼレーア公の話しぶりからしても事態は喫緊であろう。間もなく殿下がお戻りに成られる。

こんな状況では迎え入れる事など不可能だ。

魔族達は私たちと同じように西に向かっている。

私たちが追うかのように。

初めはそう思っていた。

しかし考えて見れば私たちが追われる理由は無い。

東に多く西に少ない魔族が西に向かっている理由が何なのかは知らない。

逃げてくるような様子には見えない。

彼らは明らかに意図を持って西に向かっている。そしてそれは明らかに私たちの向かう場所とは違う目的を持った行動だった。

南塔から北西に移動し、森を迂回して南下するとヴァリエント国境門がある。

私たちが南下し始めた時、彼らはそのまま北上して行った。その一部は私たちが追いかけてきたが、それも追いつけないと分かったと、歩を止めて去って行ったのだ。

そして私たちは囲まれた。

東から私たちが追いかけて来る者達に加えて、南から北上する魔族達が私たちの行く手を遮り始めたのだ。その数は南下すればするほどに増してゆく。

――命一つ……体一つになってでもヴァリエントを目指さなければ成らない

背中を突き合わせて立ち止まり、遂にはその場から先へは進めなくなった。

頂いた燐石もそれ程多くは残っていない。しかしこの期に及んで惜しんでいる場合では無かった。

天上に鑿めた燐芥に聖導を直接印加する天乗環、一六芒雷華――使うの初めてだった。ミストラルの論文とレイナ候の実演から見様見真似で使って見たものだったが、これほど大規模に召喚されるとは思っていなかった――私は過ちを犯した。

十六芒雷華は辺り一帯を吹き飛ばし、負の因子を抑え込む浄来召喚は魔族達に対して大いに効果した。しかし私自身もまた召喚した導術を操り切れなかった。

この時ファーディナンドは片足を失っていた。それは明らかな私の失敗だ。

「主翼のみで後翼疾翔すれば未だ行ける。問題ない。行きましょう、ファナティス様。今の内に……」

時間も体力も余り残されていない。

それでも私たちは一刻も早くヴァリアントを目指さなければ成らない。

そんな状況下で魔族を退けつつ進むのは無理にも程がある。

漸く国境門が視界に入り始めた頃、振り向けば虚ろな顔で地を這うファーディナンドがはるか後方に居る。その手にはもう剣すら握れていない。

疲れ切った体で片足を失い、主翼で後翼疾翔をし続けるなど自由騎士でなければ不可能な事だ。

私は彼を背負ってでも国境門まで行こうと思った。

——私のミスだ！

ここまで来てこいつを見捨てて帰還する事など出来ない。「構うな」「置いて行け」そういうファーディナンドに言葉を返す気力など無かった。

私も既に後翼は使えない。

アニスでは中の上。他国では筆頭騎士になれると言われる我々が二人いてもこの様だ。心底恐ろしい。

それ以上に自分自身の不甲斐なさに情けなく、悔しいという思いだけが胸の底から湧いてくるようだった。

——私の力はこんなものか！！

「ガビエルと、ナイトレイを……………」

それが最期に聞いた言葉だった。

私はファーディナンドを背負ったまま国境門を抜けた。

偉大なるメガリアの剣聖、エミールファーディナンドに祝福あれ————

こんな場所で弔う事を許せよ、ファーディナンド。

剣を失っていたファーディナンドの墓標には私の剣を捧げた。

私がもう少し考えて燐石を用いれば良かったのかも知れない。

ファーディナンドの死は私の失敗によるものだ。

「急ぐ気持ちは解りますが、もう少し落ち着かれよファナティス殿」

ああ、お前の言う通りだ。

私は焦っていた。

フェルナンドの燐石が非常事態を報せるものであったのだろう事も、あのチェゼレーア公の態度から見ても、状況として時間は残されてないのだと覺らされた。

ヴァリアントへ向かう私にリンス殿下の燐石を遣わされたのは恐らく戴冠が目的の筈。

殿下のご帰還をあの荒れたアニス国内で迎えるわけには往かなかった。

しかし焦りは禁物。

騎士の家に生まれ、騎士として育ち、騎士の頂点に立ってきた。

そんな事は周りにも諄いほど言い聞かせてきた事だ。

表面上で隠していたとは言え、ファーディナンドも私と同じ自由騎士。

隠し通せる相手ではなかったと言うわけだ。

凶星を吐かれて無気になっても居ただろうか。

気持ちばかりが前に行き、自分の後翼疾走が遅いとさえ感じていたのも確かだ。

それが無駄に体力を消耗したのかも知れない。

「お前はずっとそんな私を見透かしていたのだな……」

私を後ろでずっと援護し続けてくれていた。

そんなお前に私は取り返しの付かない事をしてしまった。

苦言の一つも口に為ず、黙って只ひたすらに私に付いて来てくれた。

そんな私がどの面を下げてガビエルやナイトレイに会えと言うのか……

アニスと言う国はつくづく己の未熟を思い知らせてくれる。

この国で有頂天になっていた私の自信をレイナ侯に砕かれて以来、己の未熟の程を未だ計り知れないでいる。

『自分が未熟だっていう自意識の無いお前には負ける気がしない』

私に会って始めて口を利いたレイナ侯の言葉が今でも私の胸に突き刺さっている。

私は未だにどこかで慢心しているのだろうか。

悔しかった。

その悔しさを払拭出来ないでいる今もまた、未熟であるが故なのだ気付かされては、そんな自分を認めたくない私がいた。

この世のどこに私以上の剣士が居るか。

この世のどこに剣術を気圧聖導に絡めて扱える者が私以外に居るのか。

私は世界の盟主・ヴァリアントの筆頭騎士。

それは世界の筆頭騎士と言う事だ。

そんな自信は塵芥となって消えた。

辿り着いた隣国アニスは私の想像を絶する国だった。

宗主国よりも強い国など在って良いのか！

宗主国の貴族がどうして属国のようなアニスの貴族に虐げられなければ成らないのか。

力こそ権威とはよく言ったものだ。

中央に集った顔ぶれは師団長級を超えた実力者の群れ。

私やファーディナンド程度なら数え切れないほど居た。

他国から来たものの多くはその国で随一と謳われる屈強な騎士ばかりだ。

それが埋もれるのだ、アニスと言う国では。

私も埋もれた一人に過ぎない。

生まれながらの生粋のアニス人には畏怖を超えて恐怖した。

サイモンダイヤアニス、ゴドウィンダイヤレイナ、コリーンファウラー、アリスレイナ、フェリーレイナ、ヘンリーファウラー、アシュリーファウラー、ヴァーゼルマティス……ラザー口

を追放されたイザックフィンも。

彼らは化け物だと言いか言いが無い。

騎士としては弱い部類だと言われるソニックラザーロやファマティス、メリッサレジスでさえ、ヴァリエントでは将軍になれるだろう。

アニス貴族の騎士はフルクレリアの常識で計り知れる者では無い。

それに加えて青の剣聖・フィストまでいる。

生粋のアニス人では無いが、魔導師にフェルナンドアルベルダ、聖導師にティスカーン、リリーナチェゼレーア、そしてミストラル。

力の無い私に権威など微塵も自覚出来なかった。

悔しいと言う思いはいつしか恐ろしいと言う感情に変わり、気が付けば私はそんな恐怖に支配された傀儡に成り果てている。

いつしかそんな恐怖に縋り、いつしかそんな恐怖を心地よくも受け容れている自分がいた。

私はアニスと言う恐怖に従う只の剣士に成り下がっていた。

アニスから国境門を越えた先のギヴィナで、先に国境を越えて待機していたシンクレアと合流した。

「こちらが殿下にお仕えするファウラー様です」

ファウラーと言っても分家のファウラーでその名をランドンと言う。

年齢的には殿下と同じくらいだろう。

ファウラー家らしい気品は感じられるが、宗家ほどの強さは微塵も感じない子供だった。

側近では無い、ただ殿下の世話をするだけの侍従だ。

これで充分なのだろう。

政務官はマージにビエラ、フェネルにキャンベルとメッツェルダーがカプラー率いる公安騎士団と共に向かっている。

逃れ易いとはいえ、せめてフェネルのカプラーと騎士団はこちらに欲しい所であった。

リンス殿下が帰還されるこちらではなく、ルシファリア殿下が帰還されるフェネル側に多くを割いているのは、魔族が西に向かっていた事とも何か関連があるのだろうか。

「残念ながら知り預かる所では有りません」

シンクレアに話をしても予想通りの答えだった。

所詮はピューリティの従事長官。

政務官とは言っても会議に出席するほどの人物では無い。

期待するだけ無駄か。

国境を越えた翌日、イエスパーが一人で私を訪れてギヴィナへやって来た。

一刻の猶予も惜しい。

王への謁見を望んだが、残念ながらそれは適わなかった。

「王は今、大切な来賓から話を聞いて居られるとの事で、代りに私がこの場を設けた」

イエスパーと共にファナティスへ戻る事なくヴァレリアへ上洛した私が通されたのはガーデンだった。

ヴァリアントの四大師団、クアドラフォースが会議を行うクアドラガーデン。

ここに来るのも二四年ぶりだ。

アニスに影響されたか、その顔ぶれは私の知る者達では無く、いずれも未熟で若い面々に様変わりしていた。

ヴィナスの御曹司レイ、ファナティスのイエスパー、そしてジーン殿下。

「水師団のカーンは別件で国を離れているそうだ」

「あいつはいつもいねーな」

エーレンの水師団には、あのティスカーンの弟、ラルスカーンが就いているそうだ。残念ながら面識は無い。

用が有るのは王であって師団長では無い。

私は殿下と二人の席を所望し、二人きりになった所で話を始めた。

「どうやら王が今話を聞いていると言うのも、その辺りの事のようにだった」

「王は一体誰と会談なされて御出でなのか」

「分からない。私も母上から聞き及んでいるだけで、王へのお目通りは適わなかった」

――相変わらず頼りない王子様だ

これまでの報告と、アニスへの救援要請、避難民の受け入れ要請を伝えて席を立った。

「カタルシア」

去り際、神妙な面持ちで殿下が私を呼び止めた。

「リヒター公がアニスへ招かれて以来、戻られていないんだ。君の話から推測しても件に前後する」

「そんな話は聞き及んでいないが……何用で赴かれたのか」

「分からない。ただ彼の事だ。心配はしていないが、もしアニスに戻って会う事があれば、一度国に戻られよと伝えてくれ」

「御意」

戻る事が有れば、と言われながらヴァレリアでの待機をお命じになる。

どうやら王は私を駒に使うつもりらしい。

言ってしまうえば私は間者。王にとっても都合が良からう。

――王は既に私を見限っている

ガーデンを離れようとした時だった。

互いに席を立ち、互いに背を向けて立ち去ろうとした時、それは突然の事だった。

「ううう……うがああああ！！」

「どうしたカタルシア！」

胸に埋め込まれた反応炉が急速に熱を帯び、なんとも名状しがたいストレスと激痛が私の全身を襲った。

額の眼が熱い。

角の芯が痛い。

胸が痛い——熱い！

流れ込んでくる何かが私の全身を緩く、しかしそれは硬く拘束する。

私の意思で体を動かしている自意識が在りながら、それは恰も私自身で動かしていないかのような錯覚を覚えた。

————来る！

そう感じた瞬間、私の胸の反応炉は目の前に大きな聖導陣を召喚し、それは二人の男をその場に零した。

朦朧とする意識の中で、目の前にこぼれ落ちた男の一人が誰であるのかは判った。

「ィザ……ク、フィナン……」

もう一人は誰だ。

傍にいたジーン殿下が大声で人を呼ぶ。

今私が意識を断つ事は出来ない。

まるで水でも浴びたかのように、体中の汗が私の体を濡らし、それはまるで涙のように体中から零れ落ちていた。

瞬きすら苦痛だと思えるほどの疲労が私を襲う。

呼吸すらまともに出来ない。

口を開けても息を吸う事が難しく、息を吐く事が難しく、開き切った口がただ唾液を垂れ流し、震え続ける私の両腕が体を支え切れずに倒れ込む。

そこまでは覚えている。

ほんの少しの間だったらしい。

地に伏せて気を失った私が目を覚ましたのは、ガーデンで叫ぶジーン殿下の声に駆けつけたイエスパーの胸の中だった。

体中が痺れて力が入らなかった。

「おい、こいつ誰だよ！どこから湧いて出てきやがった」

「わからない。カタルシアが急に苦しみ出した後、突然彼女がこの二人を召喚したんだ」

「姉上は一体何を為さったのですか」

二人しか居ない……………そんな馬鹿な

聖導師が私を癒そうと現れた。

「私は、良い。あの二人を、フィナン殿の治療を……」

帰ってきたフィナン殿は片腕を失っていた。

傷はまだ新しく塞がり切っていない。

もう一人は見覚えが無い。

彼がリンス様なのか。

二人共気を失っているようだ。

「カタルシア、この二人は何者だ。アニスの者か」

「恐らくサイモン王の御子様……リンス殿下であろうかと。腕が無いのはフィナン……アニスの



騎士だ。詳しくは彼に聞かなければ何も分らない。なぜ……なぜ、フィナン殿だけが戻られたのか。共に居た……筈の、フェルナンドと……ファウラー様……が、な……ぜ……」

何故帰ってこなかったのか。

何故フィナン殿だけが帰ってきたのか。

残念ながらそれを知る術は無い。

全てはフィナンが目を覚ましてからだろう。

あれから気を失って半日ほど経った頃、私は目を覚ました。

二人はヴァレリア城下の癒術館へ運ばれたらしい。

二人は未だ眠りから醒めていないようだ。

私はイエスパーに連れられてウィンドガーデンにいた。

「君の知っている事を話してもらおうぞ、カタルシア」

目を覚ました事を知ったジーン殿下が私を訪れてきた。

凡そ百年前、私がまだアニスに入国する前の話だった。

アニス王サイモンの双子の御子が突如として姿を消した。

そして三年前、その行方が判明し、搜索手段が整ったとして夫々に三人の使者が遣わされた。

先ほど戻ってきたのはリンス殿下の搜索に当られた騎士の一人、アイザックフィナン。

彼は魔導師フェルナンドアルベルダとその護衛、アシュリーファウラーの補佐として選ばれた

。

戻って来るにはフェルナンドの力が必要で、彼だけが戻って来るのならともかく、彼が戻らず護衛のフィナンだけが戻って来るのはおかしい。

フェルナンドとアシュリーはリンス様をフィナンに託し、亜時空へ残った事になる。

「死んだのでは無いのか、その二人は」

「術式はフェルナンドにしか開く事も閉ざす事も出来ない。術式が閉じたと言う事はフェルナンドは生きている筈だ」

「ファウラー殿が死亡し、フェルナンドとやらも閉じる事が精一杯で、共に戻れる余裕が無かったのではないのか。現に、戻ってきたフィナンという騎士も片腕を失っている。混乱の最中に術式を展開したのであろうな」

「そうかも知れません……」

あの時のチェゼレーア公を思い出せばそれも頷ける。

フェルナンドからの緊急信号は、何かの混乱に巻き込まれて後を失ったからだったのかも知れない。

全てはフィナン殿が目覚めてからだ。

奉迎の先で一体何があったのか。

それを今知っているのは生き残って帰ってきたフィナン殿唯一人。

翌日再び殿下に呼び出され、王への謁見を許される事となった。

「ティス...カーン！」

そこに在ったのはアニスの最高聖導師、ティスカーン亡骸だった。

王が会談していた相手はカーンだった。

カーンが一体何をどこまで王に伝えたのか。

それを聞く事は出来なかった。

私にはイエスパールと共に直ちに陣を出陣せよとの命が下された。

現存するアニスの騎士は、赤騎士レイナを筆頭にフェネルで陣を整え、ヴァリアント、マージに避難した騎士は、リンス殿下を筆頭にヴァリアントで陣を整えるよう命じられた。

リンス殿下の目覚めを待ってからの出陣を願い出たが「事は一刻を争う」と一蹴された。

何をそんなに急ぐ必要があるのか。

マージに逃れたアメシスタ様以下、騎士達が今どこでどう成されて居られるのか。

それすらも確認出来ぬまま、ギヴィナに残るシンクレアに後を任せ、風師団数十名を連れた小隊の副隊長として再びアニス国境門を越える事となった。

「目的を言え。王都で何をしている。なぜ、どうして国を裏切ったあ！」

「焦るな。時期に分かるだろう。だが今のままでは何を説明しても理解は出来まい。裏切ったわけではないが、まあそう受け止められても止む無しか。私の行動にエーレンは関係ない。だがエーレンが裏切ったと見なしたければそうすれば良い」

「国に残してきたお前の妻と子供に危害が及ぶかも知れぬぞ。それでも良いと言うのかお前は」

「はっはっは、相変わらずだな君は。そんな優しい君を妻にしたかったと今でも思うよ。もちろん君の事だ。昔の馴染で私の家族を守ってくれるよう手を尽くしてくれると信じている」

「もちろんそのつもりだ。私はお前のそう言う所が好きでは無かった！」

「今でも愛している.....ケイト」

「戯れ言もいい加減にしろ！」

「一段落がついたらまた会おう。それまでの間、出来ればもう会いたくはないが、他の誰かに殺されて死んでしまうのなら今ここで葬ってやっても良い。だが私たちは何も君らを殺したくてここにいるわけじゃない。だから君らさえ来なければ私たちも何もしない。いや尤も、今は私の方から手を出してしまったか——これが最初で最後だと断言しよう。弟子とかつての恋人に最後の忠告をしに来ただけだ。本当はここは私の持ち場じゃない。たまたま君らが二人一緒にいたから、私にここを譲って貰ったんだ。ある意味運が良かった。彼は私よりも強く、情けや容赦など一切しないだろうからな。お前たちが殺される所は出来れば見たくは無い。悪い事は言わん、撤退せよ。そして事が終息するまでヴァリアントで待機して居給え。もう来るなよ」

「事情が判らなければ来るしかないだろう。事情を言え」

「何も聞かずに退いてはくれないのか」

「くっ……」

「ファナティス様。どうか、ここは――」

「部下たちは賢明な事だな。次に来るならそんな足手纏いなど連れて来ぬ事だ」

私たちは撤退した。

ヴァリアント・ファナティス隊は風師団長イエスパーファナティスを筆頭に風師団中心で編成される。

同じくヴィナス隊もレイヴィナスを筆頭に火師団で構成され、彼らはアニスのフルクレスト領土、ストームランドの調査に向かった。

難攻不落のアニスは北を断崖に、東は荒れ狂う海、西と東は高く聳える国境の壁によって守られている。

入国するには北西のフェネル、南西のヴァリアント、南のマージ国境門を越えるか、国境の壁が無い東や北を上空から渡るしかない。

深い森林に囲まれたアニスの極東や断崖に守られた北方の上空を渡る馬鹿は居ない。

ストームランドへ赴いたヴィナスの表向きの目的は実態調査と成っているが、真の目的は東からの攻め手を探るものであろう。

唯一東から海路を使って入国する事が出来る拠点がフォレジレント・ストームランド間に存在する。

ヴィナス隊はそれが可能であるかどうかを探る事が目的なのであろう事は想像に易い。

私たちファナティス隊は王都へ赴き、アニス王の生存確認を第一の目的とされた。

大陸最高の先見を疑うとは実に愚かしい。王は王都で行方を眩ましてはいない。

それは私も報告した筈だ。「王はファウラーを東に向かった」それが私の知る最後の伝達だった。

王の死はヴァレリア王宮でヴァリウス王に聞くまで私も知らなかった。

もしアニス王サイモンの生死を確認する目的であるならば、複数の国、複数の隊が、別行動で進軍し、王が向かった東以外から王都までを目指すと言うのも腑に落ちない。

最悪、私たちは捨て駒として放り込まれたと見なすべきだろう。

――ヴァリウスはこの機にアニスを制圧するつもりか

それも全てはリンス様がお目覚めに成られてからの事。

果たしてリンス様をどうするつもりか。

ウィンディアやマージの手前、表立って行動は起こさないだろう。

「随分報告と違うじゃないか」

アニスに戻って見ると、ヴァリアントへ来た時とは違って、そこにはあの時あれだけ居た魔族達の姿が忽然と消えていた。

辿れば確かに、あの時に殺してきた魔族達の骸は残っている。

しかしあの時のように常軌を逸した魔族達が大群で押し寄せてくるような事は無かった。

見物でもするかのように、私とファーディナンドが倒してきた魔族の骸を眺めては感嘆の声を漏らす。

今ここで魔族達が大群で襲いかかってきたなら、私とイエスパー以外の何人が生き残れるものだろうか。

もはや隊など足枷以外の何物でなかった。

「西塔だ」

のりくりりとマティスを北上して行くと、一つの建造物が見えてくる。「あれは何だ」と訪ねられたので応えたまでだが、アニスの建造物の異様な造形に驚くのも無理は無い。

不在となった他国の城砦を調べて回りたいのは当然か。

隊長であるイエスパーの指示で西塔を訪れる事になった。

――！？

どうやらこの国は無人では無いようだ。

無人の国だと思えるほど、今のアニスには人が無い。

しかしどうやら王都・中央塔は生きていて、西方聖導院の塔城伝達網も機能したままであるようだ。

「これからどうするつもりだ、隊長」

西塔の燐石が王都と時雨に騎士の存在を感知している。中央塔にも誰かがいる。

今ここでんびりしている訳には往かない。

「姉上はどうお考えだ。土地勘があるだろう。意見を聞きたいな」

「今は任務中だ。貴方は隊長で、私は貴方の部下である事を忘れなさいませ」

「う……悪かった。しかし、このまま王都に進んでも問題は無いだろうか。聞いた話とは違う。入国するまでは皆、気を張ってはいたが、こうも静かだと弛んでしまう」

「状況が余りにも違い過ぎる。私にも何が起きているのかは分からない。ただ、嫌な予感がする。王都よりも先に北の時雨の様子を見ておきたい」

「時雨？ マティスの城か。あそこは西から赤騎士の部隊が王都までに通り掛かるだろう。それとも、西の部隊は皆、北の断崖に向かうとお考えなのか」

「西はそこまで進軍しないだろう」

「どういう事だ」

「今回の出陣にレイナ候は出陣されないか、されたとしても黒塔までに留まるだろう。今は王都に向かうよりも、現状を把握する方が先だ」

「それは任務では無い。それよりもフェネルの隊が進軍してこないとはどういう意味だ」

「私も出来ればこれ以上の進軍は避けたい」

「もう少し分かるように説明してくれないか」

時雨にいるのはマティスの王族では無い。

そして王都に居るのもアニスの仕官や王陛下ではない。

なぜならば、燐石がその存在を不明としているからだ。

「あれだけ居た魔族がたった数日で居なくなるとは思えない。いや、そもそもこの西まで、あれ

だけの魔族が出回るなど、これまで無かった事だ。力の強い魔族は東の果てにいる。滅多にこの西には来なかった。そして今度は何事も無かったかのような静穏。青族も緑族も、その存在を潜めている程に」

「あれだけって言われてもなあ……」

「精霊が少な過ぎるのだ、この国にしては。ヴァリアントやマージに比べれば変わらないかも知れないが、この国には本来もっと精霊がいる筈なんだ……疲れてしょうがない」

「ああ、だからこうして休息も兼ねてここにいる」

――違う！

塔城伝達網はその城砦に居る全てのアニス仕官を認識する。

バイダがそれを識別し、そこに誰が居るのかを照会するものだ。

しかし今、時雨と王都と中央塔に居る者にはそのバイダの識別が無い。

どこの誰がそこに居るのかも分からない状況で、向こうからは私がこの西塔にいる事だけが解ってしまっている。

私がここに長く留まる事は隊にとって非常に拙い。

「なぜ王都では無く時雨が気になるんだ」

のんびりとはして居られない。

「付いて来い、イエスパー」

西方聖導院を封じなければ……今の私に出来るのはこれが最も最善の策であろう。

「まさかこんな構造だとは思わなかった」

「外から見てこんな構造だろうと思えるものを建造する事に何の意味が有る」

「そりゃあそうだけどさ。アニスの城はみんなこんな感じなのか」

「それを聞いてどうする」

「いや、どうするって……」

「お前はこの国に侵略でもしに来たのか」

「そうじゃないけどさ、ただちょっと気になっただけだ」

「他国の事情だ。気にするのも心の内だけに留めておけ」

「姉上だって元々はヴァリアントの騎士だろうが」

「今の私はアニスの騎士だ。ヴァリウスもそう思っているだろう」

「王を疑っているのか」

「お前達も私達を疑っているのだろう」

「姉上――何を企んで居られる」

「どういう意味だ」

「アニス王が死んだと言うのは嘘なのだろう。そして各国から騎士を集めて、畏にかけて戦力を……」

「浅はかな推察だな。神誓官の言葉を疑ってそれ以外の何を信じているのかは知らないが、ではどうしてヴァリウスはレイをストームランドに派兵したのか。考えた事は無いか、イエスパー」

「それとこの話の何の関係があるんだ」

「ストームランドを抑えれば、守りの薄い極東アニスを容易く攻められる。言うなれば極東アニスはレジスとチェゼレーアの盾。王都アニジアを護る北のファウラー、西のマティス、南のレイナは武勲に名高いが、南東のチェゼレーア、東のレジスは騎士の家系では無い。極東アニスを崩す事が出来れば、一気に王都への進軍の道が開ける――そう考えたのでは無いか」

「我々が、ヴァリアントがアニスを侵略しようとしているとでも言いたいのか」

「脈絡の無い話でもないだろう。ウィンディアとマジークも参戦した。その決断の早さを考えると、強ち出鱈目とも言えまい」

「馬鹿な」

「王都に誰かがいる。アニスの者では無い。どこの誰が何の目的で王都に居るのか。それも分らないまま進軍するのは危険過ぎる」

「マジークやウィンディアの隊が既に王都に入っているのかも知れないじゃないか」

「それは考え難い。先ず西のウィンディアはレイナ候が進軍を許すとは思えない。マジークの隊が仮にヴァーナディスの騎士団であったとしても、南のレイナ国境門を越えて王都に着くには早過ぎる。恐らく竜騎士団では無いだろう」

「だが、それが何であるのかを調べる事も我々の任務では無いか」

「ティスカーンが死亡を伝えたのは王陛下だけじゃない。フィスト様の死も伝えられた」

「青の剣聖は王と闘って共に倒れたのでは無いか」

「そんな報告を誰から受けた」

「いや、てっきり私はそうだと...」

「白紋筆頭のソニックは大した騎士では無い。特にこんな場所ではな。しかし青のフィスト様は精霊剣士。大陸最高の剣聖と謳われるフィスト様を一体誰が殺したと言うのか。アニスの騎士ならばそれを聞いて迂闊に飛び込もうなどとは思えない」

「では、どうしろと言うのか」

「ヴァリウスの命令では王都アニジアの調査、並びに王城ピューリティの実態調査と王陛下の亡骸を回収せよとの事だ。死に行けと言われたも同然の命令を我等は下されたのだ」

「そんな、考え過ぎだ。王がそのような.....」

「王妃様とヴォイス様の行方が知れぬ。王妃様をお守りする筈のフィスト様が亡くなられ、光塔主も不在。魔族を戒める結界は消えてしまっている。魔族がアニスより外へ出て行くだろう。そんな時に国を手薄にするなど、気が狂っているとしか思えない。光塔でカーンに何があったのか。調査すべきは王都ではなく、チェゼレーアの光塔のはずだ」

西塔と西方聖導院は地下で繋がっている。

ここから聖導院へはミストラルとランス、マティスしか入る事は許されていない。

――解除されている？

私より先に誰かが解除したのか、それともリリーナ様か。

西塔の中枢、聖導院へと続く主幹室へは難なく入る事が出来た。

「どうにかなりそうだ」

「何をやる気なんだ」

「この城砦を封じる。これ以上他国の者にこれを知らしめるわけにも往くまい」

「これは一体何だ」

「イエスパー……………お前は先ほどここには休息する為に来たと言ったが、ここに我々がいる事は全て見抜かれている」

伝達網に映し出される物は何も無い。

恐らく伝達網の中枢である光塔が機能していないからであろう。

光塔主カーンは死んだ。

彼女の力なくして伝達網は機能しないとは聞いている。

魔導院と聖導院がその代行を務められるよう、燐石の研究が盛んに行われていた事も知っている。

この西塔に入った時、燐石が私たちに反応を示した。

伝達網は生きている。

ティスが不在の光塔が機能しているとは考え難い。

これを動かしているのは聖導院だと考えて概ね間違いは無いだろう。

こちらから他の塔城の様子を伺い知る事は出来ない。

これを扱えるのは塔城の主のみ。

バイダを持たない者には扱う事が出来ない。

「黒紋筆頭、カタルシア・ファナティスである。現在西塔に参じ、勝手ながら開かせてもらっている。ヴァリアントの一個小隊と共に居る。城砦は荒らさぬよう命じてある。現状は特に荒れた形跡などはなかった。マティスの要人が何名か粛正されているが、私の知り預かる所ではないので放置している。民たちは見当たらない。魔族も今のところこの付近には現れていない。隊はこれより王都へ向かう積もりらしい。私は今ヴァリアント小隊の指揮下にある。不本意ではあるがそれに従う。時雨に立ち寄る積もりだったが、隊には従わねば成らん。現状は以上である」

「これは時空聖導法か……次元聖導法か。今、一体何を為たんだ」

「全ての塔がこれに繋がっている。平常時ならば交信も出来る。ただ今ので解った事がある。本来なら光塔によってコントロールされて全ての塔が映し出されて交信が行える筈だが、それが機能せず記録を残す事しか出来ない状態だ。光塔が完全に機能していない。ティスが自分で切断しない限りこうはならない筈だ」

「今のは普通の使い方ではないのか」

「今はただ伝言を残しただけに過ぎない。西塔から繋がるのは光塔と中央塔を除く全ての塔だが、随時繋ぎ続ける事は出来ていない。その制御は光塔にあり、光塔主のみがその制御を行える」

「たった一人でこれを制御出来るのか……こんな大規模な聖導法をどうやって――」

「非常時であればこそ機能する伝言システムだが、果たしてこれを照会してくれる者が居るかどうか。アリスが黒塔に入って聞いてくれれば良いが」

「レイナ候はこれを使う為に黒塔に留まるというわけか」

「それだけじゃない。アニスの塔城にはそれぞれの役割がある。伝言を残せるのはこの西を含めて7つの塔のみ。西の外れにある黒塔に伝言を残す能はない。照会は出来るがな。黒塔には殆ど

何の機能もない代りにアニス国内の貴重品を管理する能力がある。どこに何が封じられ、どこに何が置かれているのか。正直、塔主だった私でも意味が解らないモノも多かったが、レイナ候ならば概ねそれを把握出来ている筈だ。やりたい事もあるだろう。アリスがいつ来ても良いように整えておいた」

「それじゃあまるでレイナ候がフェネルへ駐在しているのが予め決まっていた事のように聞こえるぞ」

「その通りだ。私はヴァリアントの騎士。官位元帥・外交官代行としてヴァリアントへ向かう。アリスは公安の全権代理人、赤騎士として国民を守る義務がある。それ以上にもやるべき事があった。結果としてフェネルの方へ向かうのであれば、それに近い黒塔にも立ち寄るだろう。フェネルには予め難民受け入れの要請を済ませておいていた。アリスがもし私の計らいに気付いてくれば、フェネルへ逃げ込むだろう事は織り込み済みだったさ」

「アニス王が崩御される事も、織り込み済みだったのか？」

少し喋り過ぎたか。

念の為イエスパーの口は封じておこう。

「その通りだ———我々がクーデターを起こしているわけでは無い。飽くまでも報告通り、ただ人魔と化した王陛下が崩御されただけだ。王がお亡くなりになり成られる事は解っていた。そして人魔である事も。人魔に覚醒したものは即刻死罪。人魔が自滅するのを黙って待っていた——ただそれだけだ」

「しかし、国家元首を失えば国は国では無くなる」

「リンス様をご帰還成されたでは無いか」

「ではこの騒ぎは王子を戴冠させ、王を交代させる事がアニスの狙いだと言うのか」

私も初めはただそれだけの事だと思っていた。

だがどうやらそうでは無い。

「何か別の事が起きている。ただの王権委譲だけの話では終わらないのだろう。残念ながら、私の知っている事はそれくらいだ」

西方聖導院は封鎖する事が出来た。

しかし依然として純正や時雨には誰かがいる。

そして中央塔にも。

チェゼレーアの玲瓏、レジスの黎明と東塔、東方魔導院、レイナの麗峰と南塔、ファウラーの深雪と北塔には誰もいない。

西塔から分かるのはそれくらいで、極東とフリーデル、キーオンは感知しない。

マジークの小隊は南塔には寄らず直接北上しているのだろうか。

レイナ候は必ず黒塔に立ち寄る筈だ。そこから時雨に向かわれなければ良いが.....

中央と純正の存在が気になる。

フィスト様がお亡くなりになり成られたのがもし殺害であるのなら、そんな相手とは今対峙したくは無い。

王都を目指すかどうかは二の次、今は一刻も早くここを離れるべきだ。



「久しぶりだなカタルシア」

小隊を纏め、私たちが西塔を後にしようとした時だった。

そこに現れたのは行方不明だと言われたエーレン大公リヒターだった。

私の目に狂いがなければ、彼の背中の方には王城ピューリティがある。

王都からここに来た事は推測に易い。

不用意にも近付こうとするイエスパーはそれに気付いていない。

「私はお前達との再会を喜びたくてここに来たんだ」

「ふざけるな。なぜお前が王都から来た。王都で何をしていた！」

「姉上、何を……」

「下がれイエスパー！　そこから先はルームの射程内だ！」

昔からいつも本性を表に出さない男だ。

何を考えているのか解らない。

私の尋問を悉く躲してくれる。

この状況にイエスパーは全く勘付いていなかった。

――無警戒にも程があるぞ、この馬鹿者が

イエスパーがほんの僅か、ルームの射程に入った一瞬だった。

「イエスパー！！」

無警戒のイエスパーはリヒターの不意打ちに大きく弾き飛ばされた。

辛うじて生きてはいるが重症だ。師団の志気はこの一撃で消沈した。

「退け、ヴァリアントの民よ！　これ以上の犠牲は私も出したくは無い。今すぐアニスから撤退せよ。然ればこの場はこれで終わりとする」

西塔に長居し過ぎた私の失態だ。

恐らく彼らはアニスの伝達網の事を知っている。

お目覚めに成られたリンス様から蔽罰を下された私は、それから暫くの戦線離脱を余儀無くされた。

「何をするんですか！」

「気でも迷われましたか、レイナ候！」

騎士団と共に逃れてきた民間人に紛れてフェネルへと渡った伯爵以下の貴族を集め、即刻その場で処刑した。主にフリーデル、キーオン、マティス貴族が多かったが、疑いの無いファウラーを含めて構わず一振りの下に焼き払った。

理由は無い。

故にキャンベルとメッツェルダーからは非難された。

ウィンディアの出身である二人の政務官と、予め抱え込んでいた騎士団には手を出していない。

貴族や仕官ではない民間人数十名はそのまま。面倒くさいから放って置く。ここで野垂れ死のうが、この先フェネルに流れるか、どうしようと知った事じゃない。民間人の面倒を見ている余裕などは無い。

「件に関しては王都帰還の後、二九代の下で厳粛に裁きますよ」

二八代王サイモンは死んだ。ハーフ様より賜った燐石がそれを伝えてくれた。

カタルシアがヴァリアントに着いたのだろう。ヴァリアントの急使が遠路はるばるブラッディヴァレイへとやって来た。リンス様のご帰還成された。気を失って居られるようで未だ目覚めて居られないようだ。

翌日、休戦協定を経て遣わされたウィンディアの二個小隊が俺の監視役としてやってきた。これは予想外だった。

避難と亡命の為にフェネル王国から借りたブラッディヴァレイを陣地とし、俺がこの陣の指揮官を任命されたようだ。

俺はアニス王国レイナ大公家が公子。

赤の元帥として公安の全権代理を任されているが、ヴァリアントのヴァリウスに忠誠を誓った覚えは無い。宗主国だか何だか知らないが、俺はアニス王家以外に仕える騎士では無い。

アニス唯一の騎士団は騎士団長カプラーの下、辛うじて小隊を組める程度には残存している。

ここから小隊を出せと言うのならカプラーが戻ればいい。

一俺には与えられた使命がある

仕えるべく君主が不在のまま、安全では無い場所に俺が居るべきでは無い。

王家、チェゼレーア家、レジス家はここにいない。それに次ぐレイナ家も当主である父上や母上は逃れてきていない。今ここにいるアニスの貴族はコールを除けば俺だけだった。奴は例外中の例外だろう。

「今アニスの全てを委ねられるのは貴方をおいて他にはいない。全ての決定権がお有りなのを自覚して御出でなのか」

命令がなければ動けないのか。ウィリンドの女将軍がやたらと喧しい。

「だから俺は残ると言っているんだ。死にたきゃ勝手に死にに行け。止めはしない」

「貴方はアニスでも屈指の強騎士だと聞いている。この期に及んで怖じ気付かれているとは思わないが、元帥であるのなら我らが軍勢を率先されるべきではないのか」

ウィリンドもセイレーンも、若手の先遣隊を送ってきている。正直、俺から見れば民間人と大差ない。

「お前達は誇れる武勲が欲しいだけなのだろう。欲しけりゃ勝手に暴れてこい。生きてここに帰って来れたなら、正にそれがお前達の武勲になるだろう」

ヴァリアントは既に二手に分けて小隊をアニスに入国させたと言っていた。マジークも二個小隊の準備が出来ているらしい。

だから？

こちら小隊を突入させると……喧しいもんだ。

実情を何も知らない他国の王の戯れ言にいちいち付き合っては居られない。

「ウィンディアのお前達に俺が命令する事は何も無い。お前達はお前達の王に従って行動すれば良い。俺もまた俺の主に従わねばならん」

「今はその主たる立場を代理しているのが貴方では無いか！」

「だーかーらー、死にたきゃ死ねって言ってるだろう」

「我々を愚弄するにも程があるぞ！」

「分際を弁えてモノを言えよ。お前を連れて行くくらいなら民間人を連れて行った方がマシなくらい————お前は弱い」

「なんだと！」

「落ち着かれよ、インフォン殿」

「はなせ！」

「カプラー」

「はい」

「お前が指揮を執れ。騎士団は共々連れて行かず、お前を筆頭にこの二人を連れて三人でアニスに入れ」

「三人でだと！？」

「騎士団を連れて行かないとはどういう意味ですか」

「黒塔までで良い。フリーデルには入らずそのまま引き返して生還しろ」

「しかし、ヴァリアントの指令では……」

「ここにヴァリウスの騎士はいない。構うな」

そこまで話して思い出した事がある。

ヴォルテージは黒塔に預けたままだった。

ここに来る途中、黒塔の入り口が解放されている事に気付いた。概ね馬鹿共が私財を持って逃

げようとしたのだろう。沈めた船は簡単に海の底へと消えた。

一蛻けの殻となった宝石箱には立ち寄る必要があるか……

「聞いているのか、レイナ侯爵！」

喧しいな……

「よし！じゃあ俺も行こう。ただし――俺の命令には従ってもらうぞ」

セイレーンの竜騎士の首に剣を突きつけて睨んだ。

一睨みつけただけでこの様か

三人は何も言わずにその条件を呑んだ。

出陣は俺とカプラー、それにウィンディアの隊長二人を連れた合計四名。副隊長以下は待機を命じた。

「役に立たない足手纏いは三人で充分だ」

陣をメッツェルダーとキャンベルに任せ、そのままその足で即座に出発した。「何事にも準備があるだろう」と喚き散らす「準備は生き延びる執念だけで良い」それ以外に必要なものは何も無い。常にその準備が出来ていなければ騎士など務まらない。

一不意を突かれて殺されて「準備が出来ていない」と言い残すのか

一挙手一投足、一言一句全てが民間人のする事だ。

こんな連中を連れて戦場に赴かなければならないと思えば誰だって嫌にもなるさ。

南で大きな音と共に稲光が見える。王都のレイナ国境線あたりだろうか。マジークの隊が戦闘をしているようだが、マジークにあれほどの雷霆を扱う騎士がいただろうか。様子見程度の派兵でヴィエラが出てくるとは思えない。相手にあれだけの導術使いがいると言う事か。

「始まっているな……腕が鳴る」

「こちらものんびりとはしてられないな」

口々にそう言うが、この二人はあの雷霆使いの足下にも及ばないだろう。恐れ戦くのならば良い方か。身の程を知らない奴の気持ちは本当に理解出来ない。

あんな戦闘をいきなり繰り広げるのは御免だ。あれが相手じゃ俺も剣と甲冑は必要だろうな。

「敵は一体何者なんでしょうか」

「さあな。敵なのかですら解らない内は不用意に戦うべきじゃないだろう。他国の者は戦果が欲しいだけ。だから相手は全て敵。下手すりゃ俺達だってこいつらに槍を向けられるかも知れないな」

そもそも調査目的の出陣で戦いが起こる方がおかしい。根本的にヴァリアントの指令は単なる我が国に対する侵略以外の何物でも無い。それが分っていてこの場に足を踏み入れているのだとすれば、俺達がいつ、このウィンディアの騎士二人に対して襲いかかるのか。そう考えていてもらわなければ困る。

一この二人は戦場をまるで解っていない

「私たちが雑兵扱いするのもいい加減にしろ！」

「アニス国内じゃお前は雑兵にも及ばない。魔族に襲われて死ぬ事の無いよう、騎士ならば自分の命は自分で守れよ」

予め立ち寄る事は言っておいたはずだが、他国の城砦に黙って入れてもらえるとでも思っていたのか、入り口で待機を命じると無気になって怒りを顕にした。

何が悲しくて国家の内情をわざわざ晒すような行動を執らねば成らないのか。元首を失った国とは言え滅びたわけでは無い。遺跡発掘にでも来ている気分なのだろうか。

残念ながら塔城伝達網は生きている。人族不在であっても機能するのがこの国だ。まだこの国は死んじゃいない。

カプラーにウィンディアの二人を任せ、俺は一人で宝石箱に入った。

中は見事に荒らし回されたもので……カタルシアの激怒する様子が想像に易い。傍でそれを見るのも一興ではある。

カタルシアは柱の中に物を隠していた。封じられた柱はカタルシアと俺のバイダで解除出来る。ここまで俺に「立ち寄ってくれ」と言わんばかりだと、当然カタルシアのバイダの封印は解除されているわけだ。

一ん？

「ほう……こんなものまであったか」

我が主の機嫌を取るには良いかも知れないな。

あれで実は宝飾好きだと言うのだから、実は自分の為に隠しておいた物なのかも知れないが、元々は国のものだ。カタルシアも文句は言わないだろう。

管理室に立ち寄ると緊急伝言が残されている事に気付いた。ヴァリアント隊の動向と西の現状を伝えるカタルシアのものだった。どうやらカタルシアはヴァリアントの隊と同行して王都に向かうつもりらしい。

一リンス様のご帰還成されたと言うのにあいつはその側を離れたのか

ヴァリウスの命令か、それとも自主的な行動か。

いや、カタルシアはそんな軽率な女じゃない。恐らくヴァリウスがカタルシアを煙たがったのだろう。ヴァリウスはこの機を好機と考える筈だ。混乱に乗じてファナティスとヴァイナスを絶やすつもりか。何を為ても無駄だと言う事に気付かないとは哀れな王様だ。

今は王都に行くべきじゃない。おそらくヴァリアントのリヒターはイシュメル様と共にいるはず。出会さなければ良いけどな。あの男は結構強い。カタルシアの敵う相手じゃない。それに西塔からだと中央塔を通る事になる。

一中央塔付近で感じたあれが凶と出なければ良いが……

「待たせたな。うん、三人とも無事で何よりだ」

「何を為さって御出でだったのですか」

「ああ、ちょっと荷物を預けていたからな。取りに来たまでだ。さ、用が済んだらとっとと帰ろうぜ」

「しかし、ヴァリアントからの指令では『王都の現状を報告せよ』と……」

「そんなもん適当に言っときゃ良いだろう。さ、帰るぞ」

「こんな所までわざわざ遠征に来て、なんの成果も挙げられずにおめおめと国に帰れと言うのか！」

我慢も限界に達したのか、わなわなと震えながらそう叫ぶ。

南の空であれだけ派手な戦闘をしていたらそう思いもするのだろう。今は静まり返っている所を見ると、あの雷霆はやはりマジークの使い手では無いな。恐らく敗れたのだろう。

「私たちは私たちの意思でこれより先に進ませて頂く。我らは貴方の部下では無い！」

そう言ってウィンディアのお二人は空を飛んで行かれた。

フリーデルの鳳にも誰かがいる。位置的に相手は陣を布いている可能性がある。

何が悲しくてわざわざ待ち構えられている所に飛び込んで行くのか。

いつまでもあの辺りをウロウロとはしていないだろうが、仮にリヒターだったとして、奴ら二人じゃ結果も見えている。他国の騎士だ、放っておいても問題では無いか。

一と、思ったんだけど……

「これでは指揮官が部下を見殺しに置いて逃げて来ました、という状況だなアリス」

気が進まない。

なかがわくんに荷物を預け、渋々カプラーと共に後を追う事にした。

「これ以上上空を移動するのは危険だ。いくら蒼風と言えども用心するに越した事は無い。降りるぞカプラー」

キーオンを越えてフリーデル公国に入った辺りで地上に降りた。

弱い上に飛行も遅い。

後から追いかけてきた俺とカプラーの視界にくっきりとあの二人を確認する事が出来る。

「見てみるカプラー。まるで撃ち落として下さいと言っている様にしか見えないだろう——俺から見ればお前もあんなものだ。ここからでもあいつらを討てるぞ」

「恐れ入ります。我が実力の無さを客観して恐ろしく思う所存です」

「それじゃあフュリーの命が幾らあっても足りない」

「な、何を——」

「お前のせいでフュリーが死んだら……塵に吹き去らしてやるよ。おぼえとけ」

「……御意」

悠々と空に浮かぶ竜と鳥の下、鳳に聖導らしき導法を感じる。ここまで伝わってくる辺りからしてその力の強さは解る。既に俺達二人も認識出来ているはずだ。

一やれやれ……導法の圏内に入っている事が認知出来ないのか？

「馬鹿め、あいつら死ぬぞ」

カプラーと共に後翼疾走で鳳を目指す最中、本当にあっけなく二人は撃ち落とされた。

その光景が余りにも間抜け過ぎて吹き出して笑うしかなかった。

「あっはっはっはっはっは、ウィンディアの騎士とは随分間抜けなものだな。面白過ぎて笑いが止まらない。はっはっはっはっは」

「何者だ！」

青い髪の子導師の一撃で撃ち落とされた二人は辛うじて生きているようだが、竜騎士の竜は騎

士を護って死んだか。騎士の方も放って置けばその内死ぬだろう。着地もろくに出来ないのに竜騎士になんてなるからだ。ウィリンドの女騎士も鳥を失っているが、怪我はそれ程無いようで、今更になって戦闘態勢に入っている。

『来るなら相手をする。退くなら追いはしない』

一伝心？

「そうか。喉が潰れているのか。貴公は誰だ、ここで一体何をしている」

カプラーがそう言いながら女と共に槍を構えた。行けと指示した覚えは無い。色気づいたのだとしたら後で叩いておこう。

青い髪。聖導。そしてあれは、反応炉……

深く外套を纏ったその首にあるのはミストラルと同じ首輪。

どこからどう見てもこいつはナイリス人に間違いないだろう。魔導使いならイマール人だ。

外套の中から小さな聖導陣を複数同時に召喚しているのは間違いなく反応炉使い。

落ち着き払った物腰と言い、竜と鳥を一撃で殺すだけの正確な命中率と威力、それでいて騎士は殺さない程度の加減も出来る。この男はミストラルと同等水準の聖導師だと言う事は一目で判る。

一はずなのに、気付かないんだよな

黙って見守る事にした。

カプラーがの女騎士と共に槍を構えて突撃し、当たり前のように往なされては吹き飛んでいる

。

「こんな時こそ貴方の出番では無いのか、レイナ候！」

女が振り向いてそう言うが、聞いて呆れる。自分で挑んだ戦いに、負けると分れば他人のせいか。

「相手の力量も覚れない馬鹿に貸してやる力なんか無えよ。俺は止めた筈だ。喜び勇んで死に行ったのはどこのどいつだよ。全く世話の焼ける。死にたくなければ退け！退けば見逃してくれるそうだからな」

自分よりも強い奴にわざわざ挑んで負けに行くなんてのは喧嘩でする事だ。命を懸けてする事じゃない。そんな事も判らずに騎士とは……ウィンディアってのは随分お気楽な島なんだな。

そして物の見事に二人揃って吹き飛ばされる。

判り切った結末を前に、どうしてわざわざそれを確かめに行こうとするのか。確かめるまでも無く、お前達ではあの男には勝てない事は明らかじゃないか。

一やばい

笑えてくる。

あまりにも馬鹿過ぎて、笑いが堪え切れない。

見ろ、あの男も笑っている。

一その気持ち、よく解りますとも

これ以上立ち向かえば殺されるか。

竜騎士も、女騎士も、カプラーも、揃いも揃って地に伏せている。

「撤退するぞカプラー。命令だ。蒼風、カプラーを連れて戻れ。お前達も、そろそろ俺の命令には従ってもらうぞ」

蒼風がカプラーを連れて行くのを確認し、俺は馬鹿二人を担いで去ろうとした。

『赤の武神……戦わないのか』

手応えが無さ過ぎて逆にストレスでも溜めたか。

「お前に負ける気はしない。お前と戦わなければ成らない理由が微塵も無いんだよ。でも、お前が俺を見逃してくれないって言うのなら、見逃されたい俺はお前を殺すしかないな」

反応炉だけで俺を抑え込むような聖導陣を構築してきた。だがハーフ様ほどの聖導ではなかった。それは軽く消し飛ばす事が出来た。ついでに肩の反応炉も消してやろうかと思ったが、その思惑は見抜かれていたようで、避けられてしまった。

『なるほど強い。退くが良い。私も貴方と……赤の武神、レイナ侯爵とだけは戦うなと仰せ遣ってはいた。私が敵う相手では無い事は承知の上だった。今後二度と会わない事を願う』

伝心を残して消えるように男はいなくなった。

一ながわくも連れて来れば良かった

流石に二人を担いで後翼疾翔するのは疲れる。

「国に戻って報告しろ。こんな使い物にならない民間人を寄越すな。戦場で俺を監視したければ騎士を寄越せ。足手纏いだ、もうこの場にお前達のいる場所は無い」

ウィンディアの二個小隊を陣から追い出した。

セイレーンの将軍、インフォンは治療も間に合わず死亡が確認された。

ウィンドの女騎士、シュネルは何も言わず撤退を受け容れた。その顔は屈辱に歪んでいたが、今更だ。彼女は槍よりも炎を学んだ方が良い騎士になると思う。

「私に、槍を捨てろと言うのか」

「短槍よりも大鎌の方が似合うと言ったんだよ。改めて炎で鳥を探すと良い。あの鳥はお前には相性が悪かった」

俺も剣より聖導の方が合っていた。勿論、剣も学ぶが、聖導をもっと学べばそれを剣技に活かせると知った。俺の戦い方は母上から学んだものだが、母上も聖導を絡めた剣を使っていた。

俺は母上の剣技を捨てる気は無い。

だが、それでも個人の素質を無視して強くなろうと努力しても強くはなれない。母上は気圧聖導だったが、俺は炎熱聖導に長けていると知った。

ディメンジョンは地精の剣。俺とは相性が悪い。司丸をコントロールするには正直邪魔だった。だがその相性の悪さを逆手に取って手加減は出来る。実力を発揮出来ない事は都合が良かった。

。

武器や術法の相性はしっかりと考えた方が良い。それが戦術となる。

「実戦経験の無さもあるだろうけど、何も学んでいない事が何よりの問題だ。考えも無しに飛び込んでいては、ただそこに骸の山を築くだけで何の戦果も挙げられない。力を付けるより頭を使



う事を学べばもっと強くなれる。お前の素質はカプラー以上に良い」

泣き喚いて俺に何度も「覚えている！」と言った。ウィリンドのシュネルと言えば名門貴族。どうぞ令嬢の初陣と言った所なんだろう。アニスで言えばマティスのファに近い感じだろうか。残念ながら覚えるほどの女じゃない。

ルシファリア様の燐石は未だ音沙汰が無い。

リンス様はお目覚めに成られたのだろうか。

ルシファリア様のご帰還を待つべきか、今すぐにでもリンス様を訪れるべきか。  
一俺、こう言う事考えるのが嫌いなんだよね……

――殺す

――――殺してやる！

我が身が滅びても良い。

私がどうなろうと構わない。

この命、尽きるまで……

この体が塵と化すまで……

私の渾を刃に変えて――――殺してやる！！

フルクレリア大陸の中部地方の真ん中。

央州帝国に私は生まれた。

北に紅鳳、西に明華、北東に太漢、南東に大峰、南は唄う海峡に囲まれた、決して大きくは無い国だ。

私はその国の皇帝、佳瑠鏡の娘として生まれた。

父上様は五代目の皇帝で、兄上様が六代目。

私は皇女として、父上様、母上様、そして兄上様をお支えする為に生まれた。

――はずだった。

不徳な娘をどうかお許し下さい。

父上様も母上様も兄上様も、皆、私に優しくして下さい。

私が不徳を犯したら、厳しくお叱り下さる。

私はこの国が大好きだ。

火と光の精霊に愛されたとても美しい国。

天照の輝き、大河の揺らぎ、山々の煌めきと海風の唄。

全てが私たちを包み、全てが私たちを愛してくれる。

光り輝く国、央州。

私はこの国も、この国で共に暮らす民も、全てを愛している。

とても幸せだった。

ええ、本当に……

夏風と出会ったのは、私が六〇歳になるかならないかの頃だったと思う。

太漢を訪れて、大統領閣下の館へ案内された日の事だった。

「あなたの方がお姉さんなのよ、しっかりしなさい」

そう言われて一生懸命「お姉さん」になろうと努力したけれど、上手くいなくて夏風には嫌われた。

「あいつ、いちいち偉そうだから嫌いだ！」

傷ついたわ……あの言葉には。

次に太漢を訪れた時、私が九三歳の時だった。夏風は五七歳。

初めて会った時の明月もまだ四五歳で、年齢は夏風と近い。私は一人だけ少しお姉さんだった

。

「こいつか、偉そうな中央の女と言うのは」

夏風と共に私の所へ来た明月の第一声がそれだった。困惑したわ。

中央は伝統的な抜刀術の国。その剣技の源流は紅鳳にある。

紅鳳の皇女である明月は同じ剣士である私に何度も剣の勝負を挑んできた。

他国のお姫さまに手荒い真似は出来ない。

私はお姉さんだから、まだ幼いこの子に怪我をさせるわけにもいかない。

未だ子供なのに「真面目に相手しろお！」「お前も剣を抜けえ！」「それでも剣士か」と叫びながら、大人用の太刀を振り回してくる。

避けられないものではなかった。

けれども子供が刃のある剣をただの勝負事で振り回すなんて、私には理解出来なかった。

終いには泣いて私に飛びかかって来ては、何度も何度も「この卑怯者！」と言われた。

国に帰って私は泣いた。どうして良いのか解らなかった。

兄上様は「剣を向けられた勝負なら剣で負かせば良い」と言う。けれどもあんな小さな子供に刃を向けるなんて、私には出来なかった。

「私は卑怯者なのでしょうか」

泣いて訊ねる私に母上様は「優しすぎる」と言われた。そしてそれは「剣士にとって致命的」「自分の命も守れない、絶対的な弱さ」だと仰せになられた。

それから数年後、明月は私に御前試合を申し込んできた。

それは中央の宮廷で、父上様、母上様、兄上様、紅鳳の皇帝、信李様の見守られる中、私と明月の真剣勝負を演じると言うものだった。もちろん、試合用の刃の無い刀での申し出だった。

これを断っては中央の名折れ。それでも私は気が進まなかった。

剣は指南役の駆暁と、兄上様、母上様からも学んでいる。けれども、私はこんな御前試合を申し込まれるような実力が自分にあるとは思っていなかった。私の剣技は兄上様にも母上様にも遠く及ばないから……

始まって見ればそれは一方的なものだった。やはり私は困惑した。

明月の剣は見切れないほど速くはない。しかし一振り一振りが女の子とは思えない力強さだった。

「どうした！ 央州の剣は相手の剣を避けたり受け流したりする事しか出来ないのか！ 央州の剣技とはそんなものか！」

彼女は防具を付けてない。私は胴丸と小手を付けていると言うのに。

でもそれが紅鳳の剣士の身形だと言う。

「お前に剣を教えた奴は大した奴じゃないんだな！」

「そ、そんな事はありません。とても素晴らしい方です」

「じゃあ央州の剣はそんな逃げ腰の剣だと言う事か。戦いから逃げるのが央州の兵か」

私が侮辱されるだけならば良かった。

それは国と、駆暁と兄上様、母上様、そして父上様までを侮辱する言葉だった。

許せなかった。

それを彼女に言わせてしまった、私の不甲斐なさに悔しくて泣いていた。

気が付いた時、私は駆暁と兄上様に止められていた。

「気をお確かに為さいませ、霧衣様」

「駆暁に謝れ！ 兄上様に謝れ！ 我が国に、我が民にい！」

「もういい、落ち着くんだ霧衣」

生まれて初めて、人が憎いと思った。

明月は私が一撃で場外へ吹き飛ばしてしまったそうだ。私にはその一撃の記憶は無かった。

以来、明月が左利きなのは私がある時右腕を折ってしまったからだ、後から本人に告白された。

あれ以来、明月の口数は減ったようにも思う。夏風のような自信に溢れた物言いでは無くなってしまった。

そしてあれ以来、私は自分の行動の一つ一つが国を背負い、支えているものであると意識するようになった。私が不甲斐無いと国を貶めてしまうのだと知った。

私は央州が大好きだ。この美しい国を愛している。

でも、ただそれだけでは駄目なんだ。

私はもっと強くならなければいけない。もっと強くなって、威厳のある剣士にならないと……民たちが誇れるような、そんな剣士にならないといけない。

明月と夏風に付いて来たのは、そう思ったからだ。

「相手を侮る奴は弱い。昔の私のように」

マージの騎士になって明月がよく口にする言葉だった。

国を出て以来、気の許せる相手は明月と夏風だけ。

「でも、皆私が頼りないって思っているわ。私も明月みたいにしっかりした剣士なら、皆も安心するのかなって……」

パルファンの司令官に就いて以来、騎兵隊の兵達とは信頼関係が築けていなかった。それは私の弱さに対する不信感である事は解っている。「騎士団は他国の姫を護る為の護衛団ではない」

そんな愚痴をよく耳にする。

「お前はそれで良い。私や夏風はお前みたいになれない。本当の強さはお前のような優しさだと、昔母上が言っていた」

「私は母上に、この優しさが絶対的な弱さだって言われたわ……うふふ、何だかこれじゃあどっちが正しいのか判らない」

「人には誰しも良い所と悪い所があると聞いた。お前の優しい所は、その両方なんだろう。自分の身を自分で守る事が出来ればそれで良い。戦士なら誰だってそう思う。実際、戦になれば自分の身を守る事で精一杯だ。他人なんて構ってられない」

「でも、それじゃあ……」

「ふん……だからお前は強いんだ。お前は自分よりも他人も守ろうとする。それは自分を守れる事が前提の上でだ。お前が司令官になったのは、お前が央州の姫だからじゃない」

私にはその言葉の意味がよく分らなかった。

明月は「無駄な悩みだ」と言う。「このままで良い」と言う。

「そりゃあ連中の気持ちが痛いほどよく分るぜ」

夏風はそう言った。

「上に立つ奴が頼りないと下にいる奴は不安になる。それは全体の志気を下げる」

私には夏風のような、人を惹きつける力が無い。山賊だった戦士隊は夏風を愛している。その気持ちは私にも解る。夏風に「ついて来い！」と言われたら、喜んでついて行きたくなるし、何よりもそこに安心があった。

私には明月や夏風のような「ついて来い！」が言えなかった。

山賊たちは「お頭の為ならいつだって死ぬる」と言う。エレナはそれが羨ましいのだと言った

。「騎士たれば誰でもそう思います。君主の為に命を捧げると宣誓したのです。民を護る為、国を護る為、延いては国の栄華の為。その為に自分の命を捧げられるのなら本望です」

私にはそれが全く理解出来ない。

それでは皆、栄誉の為に死に急いで終い兼ねない。

生き恥を晒せと言うわけじゃない。けれども、命を粗末にするべきじゃないとも思う。

国の為、民の為、君主の為こそを思えば、少しでも長くその責務を全うしたいと……なぜそう思えないのだろう。

「死んでしまっただけはその責任を果たせない。命を無駄にする事は許さない」

皆の顔が下を向いた。

私には命を投げ出す事を勇気だと信じ込んでいる皆の気持ちが理解出来ない。

それは死を拒んでいる。

それは死ぬ事を恐れている。

それでは心に迷いが生まれる。その迷いが隙を作る。

私には死ぬ事でその責任を放棄してしまう事への言い訳にしか聞こえなかった。

騎士とは民の安寧を護る為の剣であり盾である。王とは民の安寧を築く者の事だ。皆が安心し

て暮らしたい。だからこそ自らの国を作り、王を挙げる。その国が滅びる事の無いよう、王を支え、民と国を護るのが騎士の務め。騎士の死に様に美学は要らない。その生き様にこそ誇る事の出来る歴史が生まれる。死んでは何も誇れない。

――騎士は国の歴史の人柱などでは無い

死んで本望――いつしか私の嫌いな言葉になっていた。

「この場は我々に任せ、キリエ様もどうかこの場はお退き下さい」

「断る。貴女達を戦地に向かわせておいて、私一人が後ろで見ている事など出来ない」

トゥワランス国境警備でエーレンから逃げてきた賊がマージ領内に進入したとの知らせを受け、我々騎兵隊は出撃した。

エーレンからは「手に余るようならば始末してくれても構わない」との通達を受けている。

手に余るようならば――とはどういう意味か。それはマージを侮っての言葉であろうか。騎士達はその通達の文言に憤り、血気盛んに出陣する。

見えたそれは竜騎士の群れ。

皆の足は止まり、威勢の良かった口は沈黙した。見えただけで逃げ出す者も居た。

パルファン魔導騎兵隊は翔騎士である副官のエレナ以外、その殆どが霊獣に従う喚騎士だった。一目に数えて凡一八騎の竜が飛び交うトゥワランス国境は逃げ惑う人々に混乱し、上空ではそれを罵る賊達の高笑いが響き渡る。

竜騎士は対地上戦の覇者と言われる。対空戦を強いられる我々に勝ち目が無い事は明らかだった。

戦意の無い者、対空戦経験の無い者は後退させ、エレナを筆頭に戦える者だけを前線に連れて行った。

地上での対空中戦防衛の準備が整い、その指揮をエレナに任せると、エレナは私に退けと言う。

大将が陣の後方で指揮を執る戦のし方も無い訳では無い。しかしそれとは状況が違う。

恐らくエレナは私がああ竜騎士に太刀打ち出来ないものと判断したのだろう。

見縊られて憤っている状況では無い。

だが明らかに今この状況下で戦えるのは私しかいない。副官のエレナでさえ迫り来る竜騎士に竦み切ってたじろいでいる。

ああ竜騎士達はそんな彼女たちを弄んでいるだけだ。

「エレナ、皆はお前の指示には良く従う。私の事は良い。お前はここで皆を護ってあげて。彼らは私が何とかするから」

「何を仰いますか！」

「大丈夫だから」

私を止めようとするエレナを力づくで振り払い、私は賊達の許へ昇って行った。

私は空中戦が得意だから――と言う事は誰も知らないようだ。

「もうこれ以上暴れるの辞めて下さい。このまま引き返してエーレンに帰って下されば、私たちも追いはしません。ですからどうか……」

私のお願いは聞き入れる所か、私の言葉を聞きも為ずに言葉の途中で槍を突き立ててきた。

それでも出来る限り交渉で済ませたかった。

空中で突き立てられる槍は避けるに易い。私は交渉を続けた。

「なるべく双方共に、これ以上の被害を出さず終わらせたいの。だから大人しく帰って下さい！」

「指令！この者達に問答は通じません。どうかお退き下さい。ここは我らにお任せを！」

「どうして出てきたの！？ 貴女達は下で待って居てって言ったじゃない！」

エレナ達ではこの竜騎士には勝てない。幾らエレナが空対空で強い翔騎士でも、他はそうでは無い。騎士達の志気を支えられるのはエレナだけなのに……

「うひょおおー、良い女じゃねーか！」

竜騎士の一人が、エレナの後ろにいたフラヴィに飛びかかって行った。

フラヴィは恐れ戦いて動いていない。

「んあ……ぎゃああ！ 俺の、俺の腕があ！」

「動けないなら退いて。私が何とかするから」

「司令……一体、今なにを……」

「貴様！ 小娘だと思って黙っていれば！」

後ろから三騎――

私にとって竜騎士の動きは恐ろしいものでも、速いと思えるものでもなかった。槍を持つ手が必要ならば彼らも戦えはしないだろう。彼らの動きは見切れないものでは無い。

「後翼だけでしか滞空出来ない子は下がって！ 空中戦で背翼を使えない騎士は戦えないわ！」

私がそう叫ぶと、我に返ったように皆は退き始めた。

「逃がすかよ！」

「はっ、しまった！」

「へへへ……どうする。動くなよ小娘。動くところの女の腹に穴が開くぜ」

エレナが背後をとられ、騎鳥から零れた所を捕らえられた――頭にきた。

私はその男の背後をとってその腕を斬り落とし、エレナを地上へ放り投げた。

竜騎士達は一斉に後退した騎兵隊の騎士達に向かって行く。

こうなってはもう多少の被害は止むを得ない。竜騎士達の竜を止めるしかない。でも、出来れば殺したくは無かった。

竜の翼を傷つけるだけ。それでも向かうならば角を奪った。

――二騎……一三……一四……

「ひいい！ お願い、たすけて」

「ファビエンヌ！」

間に合わなかった。そんな自分が悔しかった。

「……………っやあ！！」

ファビエンヌを捕らえた竜騎士を真横から一刀両断した。

殺すしかなかった。

出来れば一人も殺したくは無かった。

それが出来なかったのは私の力不足——腹立たしかった。

その場が深く沈黙している。

それ程までの惨殺だった。

体よく相手の動きを封じる様な余裕が無かった。

そんな無様な私を嘲けるかのようなこの沈黙は……屈辱でしかなかった。

しかし同時にこの状況は、大声を出すだけでこの事態を收拾出来る。私情に嘖まれてこの機を逸するわけには往かない。

「今一度問う！ エーレンに帰る者は追わない。ここに残る者は即時捕らえます。選ばれよ！」

エーレンに逃げる者、その場で投降する者、別れたが国境での混乱は収束した。

両断した騎士の血に塗れて座り込むファビエンヌに怪我は無いようだ。無事を確認すると私に縋り付いて泣いた。

「無事で良かった。もう無理は為さないで。戦えない状況で退くのは罪じゃないから。皆も無事ね。怪我人はいない？ では民間人で負傷者が居れば救護に当て下さい」

状況に混乱は無く、皆も平常に戻った様子を見て、私はエレナを呼んだ。

「お見事でした、キリエ様。あの竜騎士をたった一撃で葬り去るとは。実に華麗な剣捌きで御座いま——」

喜ぶように興奮して言い寄ってきたエレナを打った。

困惑したような顔で私を見る。

「貴女の判断は皆を危険に晒した。どうして判らないの。無理な戦いを強いた積もりは無いわ。勝てる見込みも無いのにどうして空に来たの。私は貴女の力でなら対空防衛が可能だと判断したから地上に残したの。貴女も含めて皆、あの竜騎士を恐れていた。だから貴女達を連れて行かなかった。恐れは隙を生み、隙は最悪命を失う。皆こんな所で死ぬ為に騎士になったんじゃないのよ。私たちは皆の命を背負っているの。相手が自分より強ければ撤退しなさい！ 撤退する勇気がなければ騎士はその責任を果たせないわ！」

「も、申し訳御座いません」

「あれくらいの竜騎士を殺すだけなら私一人でも出来た。でもね、忘れないで。相手を殺す事だけが戦じゃない。戦うだけが戦じゃない。それで死んでも誰も報われない。何も生まれない。人を悲しませるような戦はしないで」

敗者の無い戦が出来れば、私は騎士としてそれほど本望な事は無いだろうと思う。

——勝てない



勝てないの。彼には全く勝てる気がしない。  
戦意は無い。けれども、隙が全く無い。  
私はこんな戦士には出会った事が無い。  
全身で彼の強さに恐怖している自分が理解できる。

国王の乱心で国家存亡の危機に陥った隣国を救うべく、現状の把握を目的とした先遣隊の派兵が決まった。二個小隊の出陣で、私と沙羅がマージ先遣隊の隊長に抜擢された。

二個小隊なのに別行動にはならず、共に「王都を目指してその状況を報告せよ」という指令を受けた。

沙羅は組織されて間も無い戦士隊から、腕利きの戦い慣れた手練を十数名。

パルファンの魔導騎兵隊からは私と副隊長以下、喚騎士と魔導師を各十二名選抜した。

小隊にしては規模が小さく、二個小隊合わせて一個小隊のような人数だ。敢えて騎兵隊の人数は多めに選抜した。

国境門を抜けた先は狂乱した魔族が徘徊していると報告されていたが、いざ入国して見れば、そんな報告も嘘かのように静まり返っていた。

皆はそんな状況に楽観するが、私は寧ろ恐ろしかった。

何事も無い事は何よりだ。でも、この静けさは異常過ぎる。

一命の音を感じない

無音とは生命の息吹を感じるもので、全くの静寂ではない。

精霊の存在は感じるが、そこに力を感じない。

私にはこの静寂が、まるで何かに怯えて息を潜めているかの様な、そんな気さえする。

この胸騒ぎが思い過ごしであれば良い――そう思っていた矢先だった。

空から降りてきた彼は恐怖の塊だった。

私の頭には即座に撤退の二文字が浮かんだ。

なるべく戦わず、撤退させて頂けるのなら撤退させて頂いた方が良い。

しかし任務としてただ退くわけには往かない。

彼はこれ以上の進軍を許さないと言う。しかしその理由を訊ねても応えは得られなかった。

それでは退くに退けない。

「剣を抜け、霧衣」

出来ない。

私が剣を抜けば皆が私に呼応してしまう。それだけは出来ない。

どうすれば良い。

どうすれば皆を救える……戦っては駄目だ。

私たちが退かない事に嫌気した彼は遂に戦意を顕にした。

何も無い所から電光と共に剣を出現させた時、その威圧の凄まじさに漸く皆も気付いたようだ

恐怖に心を支配されてはいけない。

選り抜かれた者達だけあって、心を壊されてはいない。しかしそれも時間の問題だろうか。そこには累々と撤退の指示を待つ顔だけが立ち並んでいた。

戦士たちの自尊心は指示があるまで撤退を許さない。このままでは皆が壊れてしまう。

—ここはもう戦場じゃない

沙羅も敵わない事を理解したようだ。私に逃げろと言う。一人残って戦う積もりだ。

私が一番恐れていた事だった。

「戦意の無えお前がいても足手纏いなんだよ！ 良いから行け」

—貴方を置いて退く事なんか出来るわけじゃない！

「出来るだけ時間を稼ぐ。みんなを……頼む」

撤退する時間を稼ぐと言うの？ 相手は見逃してくれると言うのに……

違う。

沙羅は衝動が抑えられないだけだ。

戦いたくてしょうがないのでしょうか、貴方は——馬鹿な人。

敵わないと解っていても、自分より強い人に相対するといつもこうだ。

—どうして貴方はいつもいつも……

戦えば沙羅は———これは私情だ。

指揮官が私情に我を忘れて部下を危険に晒してはならない。

「戦士隊、騎兵隊、双方共に我について退け！ 撤退だ！」

「んままままって下せえ、ああ、姉御お、そりゃないぜ」

「す……すおだぜ。おおお、お一頭はどうなるでさあ」

私は指揮官だ。

部下の命は私の行動に懸かっている。

私は指揮官だ。

私は———

「しんぱいない。おかしらはつよい。いまは、おかしらがぞんぶんにたたかえるよう、われわれは、ひいて、みまもるんだ。それとも……おかしらを、おまえたちはしんようできないか」

「司令……」

「姉御……」

「だまってすすめ。てったいだ。てったいするんだ」

『群衆の指導者はいつ如何なる場合においても心穏やかに平静を保たねば成りません』

その通りで御座います。

『指導者が心を乱せば、群衆の心もまた乱れる』

はい。その通りで御座います。

『人を束ねる者は、束ねた人の分だけの責任を背負う。束ねた全ての人が救われる判断が要求されるのです。判断を自分一人の感情に流されてはなりません』

駆暁の言う通りだ。

私情を捨てよ。

大局を見よ。

私は指揮官だ。

判断を誤っては成らない。

「あ……姉御お、俺達あやっぱり戻りますぜ。お頭一人を死なすわけにやあ……ひいいい！」

「わたしはしきかんだ」

「司令……どうかお収め下さい」

「もどることは……ゆるさない」

絶望の地鳴りが嘲笑う。

私の背中に伝わる音の波動が、私を笑っている。

「お……俺達はのこのこ、のこ、残ります一。だからお願いだあ、姉御お。お頭を助けてやって下せえ！」

「お俺からも頼みます！んもう、お頭を救えるのは、姉御しかいねえ。何なら、俺達や姉御の副官に従っても良い。ほんとはこんな、いけ好かねえ女共にやあ……まっぴらだあ。だけどなあ、お頭を助けてくれるってえなら話は別だあ……なあ、みんなあ」

「お……おう」

「お頭を助けて下せえ、姉御」

「姉御お！」

大局を見よ――

私情を捨てよ――

「沙羅様をお救い出来るのは司令しか居りません。ここは我らにお任せ下さい。ですからどうか……」

「だめだ」

「司令！」

「そんなあ！」

「わたしは、指揮官……私情を挟んでは、だめだ」

「このまま愛する人を見殺しに為さってまで貴女は指揮官で在りたいのですか！ 私情の何が悪いのか！ 愛する祖国を離れてまで、この国の司令官になりたくて今ここに居るのか！ 沙羅様を失って尚、貴女は生きて行けるのですか、司令」

「エレナ……」

泣きながら叫ぶエレナに打たれ、私の頭が清々しい衝撃を受けた。それはまるで水を吸って重くなった衣を脱ぎ捨てて、乾衣に着替えた時のような身の軽さだった。

「行きなさい！」

エレナにそう叫ばれた時、既に私は空にいた。

もう何も考えなくて良い。今は自分だけの事を考えよう。

――そう思った。

「相手は私たちと同じ使い手であろうか」

「ちがう。もっと異質な力が働いていた。あれは大気や水を使った雷霆では無い」

大きく地表を抉ったような跡が二ヶ所にある。

—雷霆の爆発で地面を壊す事が出来るのか？

「沙羅！！」

その脇に沙羅が倒れていた———

「沙羅！ 沙羅！」

粉碎された斧の破片が散らばっている。

「ああ……沙羅。お願い、目を開けて。沙羅……沙羅！ いや………ねえお願い」

体中血に染まった沙羅の体は力なく私の腕から滑り落ちた。

—死ん………

「死んではない。安心しろ」

声の方向は右手後方——

沙羅の血のりで剣を持つ手が滑る。

「おいでミカツチ——私の魔導の渾をあげるわ。私の命をあげる。だから——」

—貴方を失ってなお、私は生きていられないもの

「我に従え、天御雷命！ 我が翼、我が刃、我が衣と成るが良い！」

———微塵にしてくれる！

ヴァリアントの魔導侯爵・ウェヌスに生まれ、宗家であるヴィエイラのファラとはよくその腕を競い合ったものだ。

俺よりも三〇年くらい早く生まれているファラには勝った事が無い。

――宗家に勝っても困るけどな

同じ炎の魔導術師だが、風と闇まで使いこなすファラには遠く及ばなかった。

だが、聖導侯爵・ファナティスのイエスパーには負けたくねえ。

奴も俺よりかなり年上だが、あんな馬鹿には負けたくなかった。

カタルシアもいるが……あいつはファラに譲ってやる。

俺もファラもファナティスが嫌いだった。

どうもあの堅苦しい態度がいけ好かねえ。

――あんな馬鹿が自由騎士になれて、なんでこの俺がなれねえんだよ！

「仕方が無いだろう。奴は重騎士、お前は翔騎士。地駆聖獣は最も騎士を認めやすい」

「ちえ、だったら俺も重騎士になれば良かった」

「あんたが欲しいのは肩書きなのか。あたしはそんなものよりも実力が欲しいと思うけどねえ」

「俺だって……」

「重騎士上がりの自由騎士は最も弱い。当然だろう？ 自由騎士と認められれば強いわけじゃない。竜騎士に劣る自由騎士なんて幾らでも居るもんだ。あんたはそんなカスになりたいの」

「んなことねーよ！」

「だったら……あんたは今のままで良い。もっともっと強くなれる」

ファラは俺にとって師匠であり、俺にとって姉さんであり、俺は―――いつも頭を撫でてくれるファラが大好きだった。

昔の話だ。

ファラはもう居ない。

「おお、大きくなったなレイ」

久しぶりに赴いたフラムバーグの魔導殿でリュヌ様に面会した。

師団長に就任し、師団を連れてのこの遠征が初陣である事を告げるととても喜んで下さった。

「魁雷閃か。良い鳥に巡り合えたな」

俺が従う魁雷閃は雷火の鳥。

武器を扱わない純粋な魔導術師との相性は悪くないと言われる。

禽類最速の白紫には敵わないが、戦いにおいて聖獣の強さだけが騎士の強さでは無い。

魁雷閃は自ら俺を選んでくれた。

俺は何よりそれが嬉しかった。

空中での戦い方の殆どは魁雷閃が教えてくれた。

ファラが居なくなって以来、俺は速さと精度を重視した炎術を学んでいる。

俺の魔導は目に見えない炎———額眼と頬眼で感じとる空間の認知を学ぶのはかなり苦痛だったけどな.....

「まだ、戻られないのですか」

ここからはストームランドまで空を移動する長旅になる。

その前に聞いておきたかった。

「あの馬鹿娘はエクサリオに居るわ。ヴィエイラの名を貶めねば良いが.....今は宮廷に召し抱えられて居るようだ。一段落したら立ち寄って見ると良いだろう。あれもお前の事を気に掛けていた。師団長として会いに行けば喜んでくれるだろう」

心残りだったファラの居場所が判った。

胸に溜まった重たい何かが溜め息と共に抜けていくのが解った。

これを「心が晴れる」と言うのだろうな。

話に聞く「身が軽くなるようだ」ってのはこう言う事を言うのだろう。

部下がどんな失態を犯しても、今は何でも許せてしまえた。

そんな自分が少し大人になったみたいで、少し嬉しかった。

長い長い海の旅だ.....もちろん空の上でだけだ。

「まだ見えねえ」

右も左も、前も後ろも海だ。

「おい、これ方向は合っているんだらうな」

一て、聞いても無駄か

「お、恐らく合っています」

一だらうな

判るか、こんなもん。

『心配するな、合っている。間も無くお前の目にも見えてくるだろう』

「もうすぐか」

『もうすぐだが.....どうも様子がおかしい』

暫くすると先の方に何か見えてきた。

それがストームランドだらう事は判る。

しかし魁雷閃が言った通り、確かに様子を変だ。

「なんだありゃあ」

「内紛でしょうか」

王が死んだって言う報せを受けて独立気運でも高まったのか、ストームランドが燃えている。

夜間に煌々と燃え盛る炎だけが見える。

「夜明けまで待ちますか」

『海がおかしい……気を付けろレイ』

「海？ 行って見るか」

『駄目だ。行くべきでは無い』

「やばそうか」

『右手に迂回して上陸するべきだ。海は避けた方が良い』

こんな怯えた様な魁雷閃を見るのは初めてだ。

聖獣には従った方が良い——俺はまだ自由騎士じゃない。

侮るのは弱い奴のする事だ。

マージの女がそう言っていた。

自分が未熟だと言う事を認めないと強くはなれない。

師団を南へ誘導し、ストームランドには裏手側へ回り込むように入国する事にした。

「潜入するような真似をして申し訳ない」

微風城には上空から飛び降りるようにして入城した。

「なるほど。上空からなら入れるね。ヴァリアントの王はこの事態を予測して君らを寄越したのか」

確かにこの状況を考えれば頷ける話だ。しかし——

「それは流石に出来過ぎた話だろう。我々が状況を見て判断したまでだ」

ストームランドの領主、ディトマールイエレミスは城下の惨状を目の当たりにしても落ち着き払った態度だった。

それは、この状況を理解した上で対処可能と判断した余裕なのか、それとも諦めた絶望と脱力なのか——懐の読めない男だ。

「この異変に前兆はまるでなかった。まるで、予定されていたかのように……それはもう当たり前のようにね、この有り様だよ」

眼下に広がる光景を眺めながら、まるで呆れたように力なく話す。

悲しんでいるのか、絶望しているのか、それともこの男はそもそもこう言う男なのか。

どことなくその話しぶりには余裕さえ感じる。

俺達は言葉を失い、ただただ呆然と城下の惨状に為す術も無く見下ろして立ち尽した。

「なぜ僕は領民を助けないのか——そう思っているのだろう」

当たり前だ。

この言葉に部下たちは警戒し、俺とイエレミスの間に入った。

この惨状を引き起こしたのは他でも無い、この男なのでは無いか……そう思ったようだ。

「あっはっは……大丈夫だよ。僕は何もしない。そう、何も出来ないんだ」

手の施しようが無い。

この現状を拒絶しても被害が大きくなるだけで、何の解決にも至らない。

この状況を鎮める手立てが浮かぶでも無く、かと言って慌てても冷静な判断が出来なくては意味が無いのだと言う。

しかしこんな冷静に手を拱ねく奴が居るか？ アニスは奇人変人が多いと聞く。

それは満更でも無いようだ。

「何も分からない以上、分からない事を自覚した上で、状況を受け容れないとね。全ては拒絶ではなく、受容から始めなければ、何も真実は見えてこない。君はアニスの現状を知りたくてここに遣われたのだろうか？ 僕もまた、この状況を把握したくて今ここにいる。結果には必ずの原因が有るものだよ。つまり、今のこの状況を招いた原因が有る筈なんだ。その原因とは何か。それを考える為に、君はここに来たのだろうか。そして僕も考えている。幸いな事に君たちも僕も魔導術師だ。真理を究める者同士、ここは一つ手を貸してはくれないか」

アニスの城は迷宮のようだ。

そこでは案内無しには到底歩き回れそうにない——そんな話も昔聞いたっけ。

普通に造れば良いものを、なぜこの城はこんな無駄尽くしで、やたらと複雑なのか。

「変なお城だろう。僕も初めて来た時はよく迷子になったものだ」

部下たちは依然として警戒したままだ。

「お気を付け下さい。何を企んでいるのか分かりません」

この男は冷静過ぎる。

「気付いているか。誰もいない」

「円陣を組んでお守りします。どうか心をお許しに成られませぬよう」

「分かっている。警戒は怠るな」

城下があれだけ混乱していると言うのに、城の奥に入って見ればそれも嘘のように静まり返っていた。

普通、城砦には従事官や衛兵など、人が沢山居てもおかしくは無いものだ。

なぜこの城にはこの男しか居ないのか。

案内されて俺達は城の中へ入ったが、進めば進むほど罠に掛けられていると言う疑念が強くなった。

俺達が警戒している事には気付いている。

男は何も言わず、距離をとる俺達を気にする事も無く、黙々と先へ進む。

広い部屋に出た時だった。

恐らくこの城の中核か……天井はこれまで通過してきた通路や部屋のような場所に比べて三倍近く高い。

「貴様、何を考えている！」

ここで取り囲まれたら俺達は一網打尽にされ兼ねない。

我慢の限界を来した兵の一人がイエレミースに対して叫んだ。

「ここは僕にしか立ち入る事が出来ない場所なんだ。だから誰もいない。そして、ここはこのお城の司令部——アニスと言う国のお城はね、魔導や聖導でありとあらゆる操作を可能にしているんだ」

「貴様、我らをここに連れて何を為ようと言うのか！」

「何だ、まだ僕を疑っているのか——それとも、怯えているのかな」



「何だと！」

「待て」

「レイ様……」

「そうかも知れない。俺達は怯えている。得体の知れない化け物に取り囲まれた城に入り込み、この広間に通されて……半ば閉じこめられているかのようだ。俺達にとってここは他国の城。警戒もするが、それ以上に理解出来ない事、理解出来ない物、それらに囲まれれば人は常軌を逸脱するだろう。そして何よりも理解出来ないのは、お前のその落ち着き払った態度だ———何故そう落ち着いていられるのか」

「落ち着いている？ 僕が？ ふふっ、それは買いかぶり過ぎだよ。僕だって怖いさ。何も分からないのだからね。僕たち研究者は、知らないものに対して知ろうとする探求心や好奇心、そして知識欲によって心を動かされる。だがしかし、分からないものに僕たちは恐怖するのだよ。知らないものを知りたがるのは、それが何であるのかが分った時の、それが腑に落ちた時の心地よさや快感を覚えているからだよね。もう一度、いいや、何度でもその快楽に浸りたい……そんな願望が僕たちを動かす原動力だ。だがしかしどうだろう。何を為ても、何を試しても、真の理解には辿り着けなかった時、僕たちは絶望する。そう。書いて時の如く、快楽への望みを絶たれた僕たちはその得体の知れないものに、いつしか恐怖を抱くようになる。僕たちは今、正にそんな心境の渦中にあるのだよ。それでも僕にはまだ、捨て切れない望みがある。だからこそ、心を平常に保ち、冷静に分析出来る状態を保たなければ成らない———正直、僕も崖っぷちだよ」

フルクレリアのアニス本土とは違って、ここフルクレストにあるストームランドは本国のような結界が無いのだと言う。

アニスは国内全土を覆い尽くす結界が蔓延っており、その中では魔族達の力を抑え込めるのだそうだが、その結界がストームランドに無いのは、本土に比べて魔族が殆ど居ないからだそうだ。

「結界なんて話は聞いた事が無いな。それにアニスを訪れた事の有る人の話では、アニスの魔族は桁違いに恐ろしいのだとも聞いた。結界が有ると言われているだけで、実際にそんなものは無いのではないか」

今回の調査でアニスへ入国したファナティスやマージの小隊はそんな中へ突入して生存出来るのか。

セイレーンやウィリンドも小隊を出すと言って居られた。

余程の精鋭でもない限り、調査どころでは無いだろう。

そもそも、そんなアニス国内で一体アニス人はどうやって暮らしていると言うのか。

「結界で抑制されているとはいっても、アニスの魔族は強いよ。そしてそれらから民を護る騎士達もまた、強い。アニスの魔族は強いだけじゃないんだ。彼らには僕たち同様に知性がある。それもかなり優秀だ。人に対して襲いかかってくるのは……実はそんなに強くは無い部類なのだよ」

「馬鹿な、俺がその話を聞いたのは先代の師団長だぞ！」

「うん。僕もウィリンドでは国を代表するほどの魔導師だったよ。僕は更なる高みを目指してア

ニスへやって来た。僕ほどの魔導師は草々居ない筈だとね。けれどもアニスに入国すれば一国の筆頭騎士でさえ、ただの一兵卒に過ぎない。メガリアの剣聖・ファーディナンド、ニヴァールの元皇帝守護・ジョルカエフ、そしてヴァリアントの筆頭騎士・ファナティス。国内外に名の知れた武勇を誇る彼らですら、アニス王国に入れば子供にも劣る実力者……アニス王国が恐ろしいのは魔族が沢山居るからだと言われているだろう？ でも実際はそうじゃないんだ。本当に恐ろしいのはアニス王家とその外戚に当る貴族たち、特にレイナ大公とファウラー公、マティス公は恐ろしい程に強いよ」

「その彼らが居て、どうしてアニスが落日を迎えるんだよ」

「大げさ過ぎますな。こんな時に茶番はやめて頂こうか」

「そうだね。実際に見ていなければ信じられないものだ。話が反れてしまったのを戻そう」

「なんだこれは」

奥から光石のような物をもって来ると、それを広場の床に置き始めた。

「何をしている」

「少し離れていると良い」

光石のような置物を床の模様に合わせて等間隔に……置いている。

これは鏤めているんじゃない。

置いている。

聖導法の儀式のようなもので、複数の法師が光石の杖を持ち、等間隔に並んで導法を召喚している所を以前、シルベスタで拝見させてもらった事がある。

「まさか、これで魔導が召喚出来るのか」

「おや、流石はウェヌス様。よくご存じですね」

「レイ様、これは一体……」

「分からない。これと同じようなものをシルベスタで見せてもらった事が有る。でも、あの時は石の置物じゃなくて、石杖を持った法師だった」

「フルクレリアには無い技術だよ。これはフルクレストの南の果てからやって来た魔導師と聖導師によってこの国に齎されたものでね、反応炉と言うんだ。精霊樹が実らせる燐石を樹液で錬成して導術や導法を馴染ませたものだよ」

燐石を布き了えると、イエレミースはその真ん中で導法の詠唱のようなものを唱え始めた。

「我は微風。我が名はデイトマール・イエレミース。親愛なる精霊達に請う。我が魔導に尊大なるお力を、どうか給われませー」

一体何が始まるのか。

兵たちは俺を取り囲み臨戦態勢を整えたが、俺は警戒するよりも寧ろ、今日の前で行われようとしている全てを見ていたかった。

魔導術に詠唱は要らない。

ではこれは魔導術では無いのか。

しかし魔導法や聖導法の詠唱でも無い。

こんな詠唱は初めて聴く。

精霊が集まっている。

こんな現象は初めてだ。

風の精霊だけじゃない。

多くの、数多の精霊がイエレミスや石の置物に集まっている。

――すげえ……

シルベスタで見た物とはまるで違う。

集まってきた精霊達が喜びに溢れている。

この男は……ディトマールイエレミスは精霊に愛されている！

「三点結鎖に和合しよう――そう。ありがとう。ではレニーの風を下手に。時は上手のバイダに結承して、クリスとピオネの結鎖はオルクに和合――繋ぐよ！ 大魔導調輪・天覧」

「おおおおお……」

言葉を失った。

瞬きを忘れた。

石とイエレミスが放った魔導は天井近くに水鏡のようなものを作り、それが何かを映し始めた。

朧げにぼやけていて何が始まるのか、何を映し出そうとしているのかは分からない。ただ、その真下で魔導を使い続けるイエレミスの顔にはこれまでの余裕は無かった。

こんな大魔導術は見た事が無い。

「これは、まさか……城外の怪物か」

青黒い青族のような、魔族のような、見た事も無い化け物が映し出されている。

「彼らが一体何者であるのか僕には解らない。だが拒絶せず、彼らを受け容れ、そして彼らの行動の真意を確かめたい。なぜ今なのか。なぜ此処なのか」

天井を眺めながらそう言うイエレミスはまだ魔導を帰結させていない。

こんな大規模な魔導術を継続させていたら身が持たないだろう。

物凄い力だ。

――これがアニスの魔導か

なるほど確かに恐ろしい。

アニスはこのイエレミスでさえ辺境に追い出すのか。

間違いなくイエレミスはヴィエイラ様と同等の魔導術師だ。

では一体、アニスの本土に居る魔導師は……いや、そんな馬鹿な。

リュヌ様を越える魔導師や聖導師がそうそう居るものか。

「彼らはやはり敵意なのか……なぜだ。紅族も、青族も緑族も水族も、敵意を向けられていない。私たち人族にだけ……なぜ彼らは私たちを、それ程までに憎んでいるのか」

一体何が起きているのか解らない。

イエレミスは魔導を継続しながら天井を眺めて嘆くようにそう言った。

何が聞こえているんだ。

何が見えていると言うんだ。

俺には気味が悪い怪物がただ映し出されているだけにしか見えない。

その直後だった。

あの化け物は魔導術越しに、何と術者であるイエレミースに憑依したのだ。

そんな事が可能なのか。

いや、見たものは疑わない。

しかしただそれを聞いただけでは理解は出来ないだろう。

だがしかし、あの化け物は確かにイエレミースの体を通して宣ったのだ。

『在るべき存在に非。世に在って絶対の不要。排除……絶対の穢れ！ 排除……絶対の穢れ……  
ハイジヨオオオオ』

中空に浮かび上がって痙攣するイエレミースは涎や涙を流しながら、白目を剥いてそう言った。

言い終えたイエレミースの体はそのままドサリと零れ落ち、そのまま骸となった。

俺達は何が何だか解らず、ただただ現状を理解出来ず———逃走した。

無我夢中だった。

逃げ延びる事で頭が一杯だった。

迫り来る恐怖と言う怪物から、ただただ逃れたい一心だった。

あまり覚えていない。

「戻ってきたのはお前一人か」

そう言われて初めて俺の傍に誰もいない事を知った。

—はは……そうか、俺一人か

何とも言えない焦燥感に駆られて舞い戻ってきた俺の頭には、ただ一つの言葉だけが使命感のように駆け巡っていた。

それが何故だかは分らない。

「ああ、ははは、はっはっはっはっはっは……」

だがしかし、これじゃあ一体誰が俺の言葉を証明するんだ。誰も俺の言葉など信じはしないだろう。

どうやって俺はここまで戻ってきたのか、そんな事すら思い出せないほど、俺は目の前しか見ていなかった。

後ろなど振り向いている余裕は無かった。

周りなど気にしている余裕は無かった。

だから「どうやって戻ってきたのか」と問われても答えようが無い。

ただ、戻らなければいけない。そう思って戻ってきたのだ。

俺は絶対の不要なのだから。

存在する事がおかしいのだ。

穢れてしまうんだ。

排除しなければ世界が壊れてしまう。

しかし俺の言葉に耳を貸す奴は居ない。

ならば問答も不要。

「正気か」

俺達は絶対の穢れ。それは正に悪……

「排除する」

世界を正さなければ成らない。

排除すれば世界は安定する。

全ては安定の為。

全ては純潔の為——

「何のつもりだ、レイ！」

それらを統べる王など正に悪の中の悪——

「我らは絶対の穢れ。そこにいるのは穢れの王……排除する」

我ら穢れの根源たる王。王を絶てば国は無くなり、統治を失えば穢れは消化する。

排除せねば世界が歪む——

穢れに満ちた世界を浄化せねば成らない。

「……許す。ヴァリウスの名においてレイヴィナスを処せよ、イエスパーファナティス」

「しかし！」

「反逆のヴィナスに肅正を下せ！」

排除せねば————

王国最高の称号『風姫の翼』を得たのは八十年程前。

彼女がアニスへ渡り、そのまま所属する事となってしまったのが百年ほど前。

私は彼女に会いたかった。

『直ぐに戻れると思うわ』

———やれやれ……どうしてこうなってしまったのか

洞窟の深くに眠る魔女……

溶けない六方結晶に眠るのは荒神に愛された天帝クローディア様であるが、その近くに御座すとされるもう一人の王女イニス様のお姿はどこにもなく、伝承では地の深くに眠られていると言う。

私はよくここに来ていた。

洞窟の奥は光も無く、魔導や聖導がある程度使えなければ、とても容易に出入り出来る場所では無い。

お二方が眠って居られる場所は、洞窟の最奥部と言う訳でもなく、居たって中途半端な位置に大きく開けた一つの間があり、その片隅にクローディア様が眠りについて居られる。

イニス様もこの近くで眠って居られるとされているが、これがどうして……見渡す限り痕跡の一つも見つける事は出来ない。

そもそも大地とは対を成す風の女神に愛された方が、何故このような地中深くに眠られて居られるのか。

伝承では深い悲しみを拭い切れなかった——とされるが、果たして本当にそうなのだろうか。

——本当は眠って居られるのでは無く、眠らされて居られるのではないのか？

王家の秘密には深く踏み込むべきでは無いか。

千年も眠って居られるのなら、最早屍であろう。

しかし是に御座すクローディア様のお姿は、まるで時を止められて居られるかのような、若く美しい御姿のままだ。

このような事が可能なのだろうか。

可能だとして、一体誰がこんな事を行えると言うのか。

隣国ウィリンドにも同じように時を止めて眠る術を持つ方が居られる。

この千年もの間、アイン様は救国の英雄として二度も目覚め、我らセイレーンの槍を阻んで居られる。

しかしクロード様、そしてイニス様のお二方は一度も目覚められては居られない。

眠って居られるのはアイン様だけで、クロード様とイニス様は眠らされて居られるのではないか——考えれば誰でも辿り着く結論では有るが、ではそれは何故なのか。

未だその答えに辿り着いた者は居ない。

イニス様は生前、二人のお児を遺された。

その直系の子孫であるヴァイオラ様は、イニス様の宝具とされるタリスマン、アムレット、セイクリットクェスを持ち出して行方を眩まされた。

魔族の血を持つイニス様に拵えられた、人魔の力を抑え込む宝具だと言われている。

ヴァイオラ様は人魔に覚醒されたのではないか——そんな憶測が噂となるのに時間はかからなかった。

仮に覚醒していようといなかろうと、国宝を無断で持ち出した罪は重い。それが例え王族であったとしても……

現在のセイレーン王家は直系・イニス様の血統では無く、弟君ダニエル様とその娘であるクロード様の血統を受け継いで居られる。

イニス様の母君はアニス王女グラディス様であるが、ダニエル様の母君はセイレーン出身のアリエル様。

アニスの血統を持つイニス様の子孫に王位継承権は無い。

直系王族に強い権限を発動出来るのは純血王家の中でも現国王唯一人。

王陛下はヴァイオラ様を死罪とし、搜索・発見次第処刑せよとの令を下された。

ヴァイオラ様の兄君であられるパルス様は、行方不明となられたアニスへ赴いたが、そのまま戻られなくなってしまった。

聞けば、パルス様の余りに横柄な態度が、アニス王に対する不敬だとし、捕縛されて居られるのだと言う。

如何なアニスの王とは言え、セイレーンの純血王族を捕縛するなど言語道断の極み。

セイレーンに対する宣戦布告かと問えば、アニス王は「先に宣戦布告されたのはパルス殿下の方だ」と宣ったそうだ。

「アニスに対する敵意の顕れだと仰せなら、ウィリンドと手を組んでも良い」

ウィリンドは兎も角、アニスを敵に回すのは得策では無い。

何より王陛下は元々直系を余り良く思われて居られなかった。

陛下はヴァイオラ様の搜索を引き続き行うものとしたが、パルス様に関しては「捨て置け」と仰せられ、件は表向きの落着を得た。

しかし宮中は穏やかでは無い。

これではセイレーンの面目が立たない。

アニスに受けたこの屈辱を、どう晴らしてくれようか……皆そんな話で持ちきりだった。

フルクレリアにおける昨今のアニスの振舞いは目に余るものが有る。

まるでフルクレリアの盟主にでもなったかのようなその態度には、どの国も痺れを切らしているのだと聞く。

フルクレリアで最も魔族の多い国——広大な国土を有するアニス王国だが、そこに暮らす民は少なく、しかし騎士の腕は大陸一を謡う猛者の群れ。

もともと魔族があまりにも多く、人から見放された地域だった場所に国を構え、魔族と共存する道を模索した事も有ったが、それも失敗に終わり……それでも魔族を駆逐しながら今日までの栄華を誇っているのがアニス王国だと言われている。

セイレーンに現れるような魔族とは違い、アニスの魔族は自由騎士とも互角に戦えるほど強いのだとも聞く。

今はセイレーンの面目を考えているような時では無い。

そんな中にパルス様を捨て置く事など出来ないだろう。

「本当に行くのか」

皆に止められたが、それでもアニスへ入国する決意は揺るがなかった。

もちろん、アーデルハイドに会いたいと思う気持ちもある。

だがそれよりも今はパルス様の身が案じられる。

王国最高の称号を持つ私ならば、力こそ権威たるアニスでもそれなりを約束されるだろう自信も有る。

聞けばアニスは実力さえあればどんな国のどんな犯罪者であっても仕官に取り立てられるのだと言う。

王家の不徳を実直に裁いて流罪となった大法官ウェイン・キャンベルは、アニスに渡った後もまた法を司っているのだとも聞いた。

私の実力ならばアニスでも充分通じるであろう————

まさかフルクレストに配属されるとは思わなかった。

まさか私の実力が底辺と評されるとは………セイレーン最高の魔導術師が、アニスでは底辺なのか！？

そんな馬鹿な……

半ば流罪に処されるかのように、アニス王国はこの私をフルクレリアの領土、ストームランドへ配属した。

『——嗚呼、麗しき我がアーデルハイド。君のその美しい歌声が、遠く海の彼方から、潮風に乗って聞こえてきそうだよ。このストームランドに吹く微風は、まるで君の美しさを形容しているかのように、それはそれは麗らかで華やいだ旋律を奏でてくれる。嗚呼、私は想う。全ては君の



美しさがそう思わせているだけの幻想かも知れない。嗚呼、しかし思う。それだけ私の、君に対する思いの強さが大き過ぎるがゆえなのだろうと。ストームランドに吹く微風の全てが君の歌声であり、私は今日もその歌声に耳を傾けながら、風に吹かれるのだ。こんな幸せな事は無い。こんな幸せな事が今まで何処であったであろうか。君の近くにいるだけで、私はとても幸せを感じているよ、アーデルハイド。またいつか君の輝く笑顔を見たいものだね――』

「こんなものを書いている暇があるのならもう少しマシな事をしたらどうだ」

「こんなものとは何ですか、私の心の結晶ですよ」

このストームランドは、手に入れた領地をただ保持するためだけの場所ではなかった。

アニス本土の情報は殆ど入ってこない。

ただ、此処まで隔離されていると、属領でありながら、それはまるで一国であるかのような錯覚さえ抱く。

私は一国一城の主になったのでは無いか……そんな気分になってしまうものだ。

「自惚れるな、馬鹿者めが」

私にそんな声をかけて下さるのは、氷塔主であられるパルス様だ。

パルス様はアニス本土の極東地区、ノージスの領主をされて居られるようだが、領主らしい事は一切為さず、専らこのストームランドの微風城で寛いで居られる。

どうも、今のアニス王は放任主義のようで、任命した後は任命したものがどうにかしろ。それ以上は深く王として関与しないのだと言う。

それは真面目に任務をこなしている者にとっては非常にやりやすい話ではある。

しかし、場合によってはパルス様のように何もしない者にとっても大変都合が良い話でもあった。

「それでノージスは大丈夫なんですか」と尋ねれば、「どうにでもなって、何事も無く丸く収まっておるのだから、それで良いんじゃないか」「他国の事など、どうなろうと知った事ではないわ」と返ってくる。

パルス様らしいお応えだと言えればそれまでか。

「では何故にパルス様はこのような場所にいつまでも御出でなのだ」

「本土ではないからな。城の外に出て話しておれば監視の耳にも入らんだろう――――」

暫く見てなかったが、パルス様がセイレーンに居られた時の顔を為さった。

それはここ暫くの穏やかな顔では無く、貴族、皇族としての威厳のあるものだ。

「風姫・イエレミース、お前の真の目的は何だ」

この方は何処までを存じて御出でなのだろう……ここからは心理戦だ。

「お前は中央で『恋人に会いに来た』『自分の腕なら宮廷魔導師を束ねられる自信が有る』そう言うってアニスに従事する事を望んだな。その裏には私やヴァイオラの事も探りを入れているのだろう。それを見逃すアニスでは無いぞ」

「それは十分に承知致して居ります」

「だが私には府に落ちんのだ……果たして本当にそれだけだろうか」

「――と、仰いますのは？」

「白を切るなよ」

段々言葉が短くなってきた。

「殿下は、私をどのように思って御出でなのでしょうか」

「……………」

言葉無く、私を静かに睨みつけられる。

そんな睨まれた私も言葉を失ってしまう。

「————魔女が目を覚ますのはいつだ」

——！？

私は思わず後ろに退け反った。

心臓が貫かれたかのように痛かった。

呼吸すら出来なくなるほどに……

「そ、そんな……イニス様が、目覚めると言うのですか」

「イニスもクロードィアも目を覚ますだろう……アインもな」

「そのような話は聞き及んではおりません。それはセイレーンからの情報ですか、それとも——」

「アニスだよ。アニスはもうそこまで分かっているんだ」

「なんと……おそろしい。そんな事があって良いのか……国の機密ですよ」

「アニスとはそう言う国だ。情報戦、心理戦を得意とする厄介な奴が居る」

「しかし、アイン様は兎も角、イニス様やクロードィア様は外からの力で眠らされているという見方も出来ます。その二人を、誰が、何の目的で、何故あの場所に、封じたのか……………私はアニスに来れば何らかの手掛りが得られるものと思っておりました」

「セイレーンの涙は何処まで知っている」

「凡、本国で公開されている内容の全ては把握しております」

「当時、同時期にアニスでは何が起きていたか、知っているか」

「アニス……ですか？ いいえ、存じておりません」

「当時、アニスでは王位を巡って第二王子による内乱が起きていた」

「内乱ですか」

「世に言う『人魔大戦』と呼ばれているものだそうだ」

「ウィンディアには全く聞こえていない話ですね」

「当時、我々ウィンディアは、マジークとそれに加担するニヴァールやホンフォンと戦っていた。他国の内乱など気にしている暇は無いわ。だが、高が内乱を大戦と呼ぶには随分な誇張よな」

「そこに、何か裏があると？」

「ヴァリアントが第二王子側の加勢として侵略に加わっていた。その他にもヴァリアントに呼応した中部の小国なども幾つか参戦していたようだ」

「高が一国のクーデターにですか」

「相手が魔族を引き連れた人魔だからな————人魔王イシュメル・ディアック・アニス。最初で最後の魔族の王だ。それに加担する者が現れた。誰だと思う……いや、何処だと思う」

「どこ……国と言う事ですか」

「そうだ。第一王子であり、魔族の王でもあるイシュメルに加担したのが、ニヴァールだと言われている。建国王ルー・ヴァンクール・ホリゾンはイシュメル捕獲用の罠に掛かって封印されてしまったそうだ」

「待って下さい！ ルー・ヴァンクール・ホリゾンと言えば、確かマジークの女神の眷族ではないですか。それがどうしてニヴァール建国の王となるんですか」

「事実彼はニヴァールの英雄だ。紅鳳の英雄、紅龍子が皇帝となっている。ニヴァールは建国の王として紅鳳に倣い、ルーを祭上げたかったのだろうな」

「では女神ラフレッシュはニヴァールの英雄をアニスに派兵したと言う事ですか。我らウィンディアと戦をしていると言うのに」

「そうだ。本来なら神の戦いなど、眷族同士にさせれば良いものだ。しかし——その時既に、女神ラフレッシュに眷族がいなかったんだよ。」

「頷ける話だ……マジークの女神は温厚な方だと伝えられている。それがどうしてヴェンティーン様と争いを起こすような暴挙に出られたのか——眷族を失って自暴自棄になられましたか」

「ヴェンティーン様も大概だが、マジークのラフレッシュも随分子供であったのだろう。神ならば、我ら人よりも優れていて当然——だとするのは迷妄というわけだ。神もまた、人より未熟な時期もあろうか。それを御諫めするべく眷族がどちらも不在と合っては、子供たちの暴走は止められんだろうな」

「しかし、それ程の情報を一体何処で得られましたのか。本国でもなかなかそこまではお調べ出来るものではありませんよ」

「アニス王国には面白いのが一人いてな。その当時の事をよく知っている女がいる——そう、まるでその場にでも居合わせていたかのような」

「彼の有名な神誓官ですか」

「ふん。あの小娘は何も知らんだらう。だが、それに近しい奴だ」

「王妃リリーナ様ですか……いや、まさか」

「それも違う。チェゼレーア公だ。その時代の話になるとやたら詳しい。あいつめ、絶対何か取り憑いておるぞ」

「取り憑いているって……」

「知り過ぎていない所じゃない。あいつはその目で見てきたかの様に、遙か昔の歴史を語り始める。それにな、いつぞやサイモンも言って居ったわ」

「アニス王陛下がですか。一体何を」

「チェゼレーア公爵には何かを取り憑いておるとな。でなければただの弓聖が大聖導師になぞなれるものか。あいつはその聖導法で弓の実力をも上げている。あんな器用な聖導師は見た事が無い」

どうやら手痛い思いをしたのだろう。

パルス様の言葉が言い訳染みて聞こえる。

確かにチェゼレーア公爵に良い噂は聞かない。

私も気を付けよう。

しかし、その方が一番の情報源であるとするのなら、一度は会っておくべきなのだろうか。

「会う必要は無いぞ」

「え？」

「どうせお前の事だ。「会うべきか」と考えていたのだろう。その必要は無い。だが、案外気が合うかも知れんぞ。お前と同じように、ありもしない宮廷魔導師を目指して入国した異国の民がいる。フルクレストの魔導師だが、これが中々どうして。王陛下の目には留まらなかったが、チェゼレーア公にはかなり気に入られているようだぞ。お前も同じように懐柔出来るかも知れんな」

「懐柔って……」

「もしかすると奴め、本当に宮廷魔導師になってしまうかも知れんぞ」

「いや、この国にはそれが無いって……」

「その魔導師の為に、それを創るかも知れない」

「いや、まさか……」

「だから、お前も一度その魔導師に会って見ると良い。まあ、そのついでにチェゼレーア公にも会えるだろう」

「ついでって……」

「私は一度会った事はあるが………よくあの性格でチェゼレーア公に好かれたものよ」

「ええ？ 酷い方なんですか」

「うーん。融通の利かん男だった。だが、お前は比較的誰とでも接する事が出来るような柔軟性があるだろう。だから、お前なら大丈夫だ」

「ほ、本当ですか」

「たぶんな」

それから暫くして、私がいに行こうとするまでも無く、この微風城に一人の魔導師がやってきた。

イマール・フェルナンズ・リュヌー「イマール国の威光」をその名に知らしめた権威の象徴か。

本名をフェルナンド・アルベルダと言ひ、国を離れて以来は本名をよく名乗るようになったと言う。

彼は私の能力を高く評価してくれた。

——素晴らしい方じゃないか

彼は我々魔導師を「探究者」だと言った。

ありとあらゆる可能性を探し、それを求め続けているのだと。

故にこの世界に不可能は無く、故にこの世界は不可解ばかりなのである。

「その不可解を共に解いて行こうでは無いか」

そう言われた時、私は初めて「アニスに来て良かった」と思えた瞬間を得た気がした。

しかし私は彼の技量に驚かされるばかりであった。

確かに教えられて私に出来ない事は殆ど無かった。

しかし、教えられなければ一体、誰がこんな発想で魔導術を展開できるのか。

それは長年の積み重ねた研究の賜物だった。

魔導輪に輪術詠唱があるのは知っている。

しかしそれ以外のあらゆる用途でも詠唱を必要とし、それが導術の骨子となるという話は目から鱗だった。

私たちが普段使っている魔導術は骨抜きになった導術でしかなかったと言う事だ。

「お前達はこれをこのまま使う事が出来るか」

差し出されたのは燐石だった。

普通、燐石と言うのは、樹液加工をしてから使うものだ。そうしなければ導術は馴染まない。

私が首を横に振ると、彼は握り締めた燐石をそのまま砕いて中空へ放り投げた。

鏤められた燐石の欠片に魔導術を施したようにも見えた。

地に落ちた燐石の欠片は導術によって光を放っている。

「これを燐光反応と言う。ここにお前の風魔導を加えれば、ちょっとした旋風を起こせるだろう」

「地に鏤めた燐石にですか」

「導術は空中で馴染ませてある。地に墮ちた後に今一度、別の導術を添加すると、第三の、全く別の魔導を生み出す事が出来る。この国では燐石の樹液加工技術が進んでいるが、それを活用すれば複数の魔導を同時に連続して発動させる事が出来る。その一つ一つを連携させれば、全く新しい魔導の創出も可能になるだろう——どうだ、面白いだろう」

私はその話を聞いた時、頭中に電気が流れた。

瞬きを忘れた私の目は好奇の魅惑に取り憑かれ、身体は興奮の余り震えが止まらない。

そんな私を見透かしたように、彼は嬉しそうに私の手を握った。

私は一際荒い鼻息でそれに応えた。

「我が名はイエレミース。さあ精霊達よ、我が微風と共に舞い踊ろう。上手は下手に向けて跳ね、回転して上手、下手は定義を失う。天を舞う飛沫の舞いは、麗らかな風に運ばれて、数多の虹を描きながら、大地を潤し、大気を潤す———ありがとう。親愛なる精霊達よ、汝らの舞いに感謝する。汝らの助けに感謝する。我が名はディトマール・イエレミース。微風のイエレミース。召喚に感謝する」

午後の少し厳しい日差しに民たちが滅入っているのを見かけ、近くの池でほんの少し涼を執る事にした。

民たちは半信半疑で付いて来てくれたが、私はアルベルグ殿に教わった燐石の技術を使い、私の得意とする風と、水の連携魔導術を組み立てて見た。

語りかける精霊は、これまで以上に私を愛してくれた。

そして私もこれまで以上に彼らに感謝した。

風に舞い踊る水の舞いは、大気を湿らせ、大地を冷ます。

領民達はそれに気付くと、喜んで私の魔導術を受け容れてくれた。

やがていつしか、私がいつでも魔導を使えるようにと、池を改めて、専用の水場を作ってくれていた。

領民達は、いつしか私の詩にも耳を傾けてくれ、「魔導の詠唱も、領主様の詩も、皆、このストームランドの微風で御座います」と言ってくれるようになった。

気分を良くした私は、調子に乗って毎日のように各地を転々としながら魔導や詩を披露して回っていた。

充実した楽しい一時だった。

ストームランドの微風候――

風のイエレミース――――

いつしかそんな風に持て囃されているようだった。

私にとっては、領民達の笑顔が直に見られて、直に不満を聞く事が出来て、またそれを直ぐに改善出来れば素晴らしい事だと思っていた。

そう、海からあの異形たちがストームランドに押し寄せてくる、あの時までは――――

## † Lide Wässe Schnell

---

「い、以上が……報告となります――」

これ以上ない屈辱だった。

皆が口を揃えて「死んで詫びろ」と言う。

ヘルツェレーラにその名を轟かせる大国ヴィリンヒト。その名を貶めた罪は大きい。

陛下謁見の間において、生涯最初で最後の屈辱は終わった。

誰に言われるまでも無く、私は死ぬつもりだ。この失態は万死に値する――

「初陣ご苦労だった。部下を失う事無く生還した事は大儀に値する――よって以下、不問と致す」

――！？

王の言葉に誰もが耳を疑った。

それは私も同じだ。

これほどの国辱を晒して舞い戻った騎士を不問にするなど、有り得ない！

王は「アニスの状況を知ることが出来たのは生還したからだ」とし、受けた国辱もまた「相手が赤の武神ならば仕方がない。彼の前では並の騎士など雑兵に過ぎないだろう」と言って、騒めき立つこの場を鎮めた。

赤の武神――その名を初めて呼んだのはリーフェルン大公だと聞く。

招かれてアニスへ赴いた際、共に居た大公が手合わせを申し入れた相手が、筆頭騎士の称号・赤騎士を得たばかりのレイナ侯爵だったと言う。

先王が亡くなられたばかりで、戴冠する前の王が隠密で赴いていた。

その腕はヴァリアントの筆頭騎士を引きずり出し、彼の槍を全て薙ぎ払い退けたと聞く。

赤の武神から一手を奪い、降参させた事で名実ともにヴィリンヒト最強の騎士と認められたのがリーフェルン大公――国王の側近にして、唯一人の国王守護職に就く方だ。

しかし……

「恐れながら……私に生き恥を晒せと――」

「そうだ」

辛辣な王の言葉が私の言葉を遮るかのように貫いた。

「敢えて罰せられたい――そう願うなら、今一度我が国の槍として誇れるまでその生き恥を晒し続けるが良い」

――残酷な王だ

そう思った。

騎士としての勲位を剥奪され、帰る家を無くした私は一人、王都に駐屯しながら雑兵に堕ちていた。

王都ロイヒテンヒューゲルの警備をする中で出会ったのが、後に私の副官となるマウアーだった。

頼まれればどんな汚れ仕事でも引き受ける――貴族たちの裏社会で暗躍する地下組織。その一つに彼女はいた。

彼女たちにとって私は見知らぬ顔では無い。

「シュネルのお姫さまがこんな所で一体何を為さって居られるのですか」

私は秘密裏に王都の警備兵を探っていると思われていた。

地位も名誉も失ったのだと知った彼女は、そんな私を大きな声で嘲り笑った。

大勢の前で私を罵り、そこへ群がってきた大勢からも罵られた。

裏社会で「シュネル」と言えばお得意様――数あるヴィリンヒトの貴族の中でも特に水面下での暗躍に名高いのだと言う。

そんな事は知らなかった。

確かに私は父や母の、あの欲深い性格が好きでは無かった。

そんな父母に影響されて歪んでゆく弟を見るのも嫌だった。

確かに父上は私の事をあまり良くは思っ居られなかつただろう。

今思えば確かに……そんな事ばかりだった。

「世間知らずも度を越すと酷いものだな。お前は自分の事しか興味が無いのだろう」

「そこは流石シュネルのお嬢様って事か。がっはっは」

悔しかった。

いつまでもこんな場所にはいたくなかつた。

黙ってその場を立ち去ろうとした時、彼女に斧を向けられた。

「天下のシュネル様がここまで愚弄されて黙って帰るのか。そもそも警備兵をこのまま黙って帰すだけでも思ったか」

周りの男達も武器を構えている。

多勢に無勢も良い所だった。

だが、そこまで言われて黙って居られるほど私も淑やかな女じゃない。

目の前の斧を吹き飛ばした後はもう、殆ど覚えていない。

兎に角必死で槍を振り、魔導を放った。

ああ、私は自分の事しか考えていないのだろう。

自分の身を守る事、生き延びる事――ただそれだけを考えて暴れ回っていただけだったのかも知れない。

気が付いた時、私は駐屯所まで戻ってきていた。

傷だらけの満身創痍で戻った私に皆が駆け寄ってきたが、経緯を話すと去って行った。

「地下組織には構うな」



「奴らには奴らの社会が有る。俺達が警備をするのは奴らの社会じゃないからな」

私には理解出来なかった。

騎士の言う言葉じゃない。

「世の中ってのはなあ、目に見えている世界だけが社会って訳じゃねえのよ。今は意味が解らなくとも、その言葉だけは覚えておけ」

兵長からはそう諭された。

警備兵であった時の私は自分が未だ未熟だと言う自覚すら覚えていなかった。

後になって思えば、良い経験だったと思う。

ニヴァールからやって来た魔導師が首都の外れに魔導の研究所を設けると言う噂を聞いたのもそんな頃だった。

赤の武神は私に魔導を究めろと言った。

槍の名門・シュネルの嫡子———その肩書きはもう失った。

私が兵士から魔導師に転身する事に異を唱えるものは居ない。

「じゃあ何、あんた槍はやめちゃうのかい？」

デローベル女史は呆れ顔でそう言った。

「血統として槍の名門に生まれたのなら恵まれたものじゃないか。魔導を修める代りに槍を納めるのは筋違いだろう？ 両方学んでいきな。そして両方で見返してやれば良い」

誰かを見返そうと思って訪れたわけじゃない。

だが、独りで精霊と対話しながら身に付けただけの魔導とは違い、この研究所で先ず教えられたのは、理論だった。

そんなものは法師のする事で、術師がする事じゃないだろうと思っていた。

「ただ何となく感覚で操っているだけの魔導術なんてものはねえ、魔導と呼ぶにも値しない雑なもんさ」

『何も学んでいない事が何よりの問題だ』

デローベル女史にそう言われた時、赤の武神の言葉が脳裏を過った。

ヴァネッサ・ザーク・デローベル———ニヴァールでも筆頭騎士・五本の矢と言われた皇帝守護を務めていたと言う。

私はこの方を師に仰ぎ、この方と共に魔導を研究し、今一度宮廷に返り咲いてやろうと思った。

零落れた貴族、廃業寸前の騎士だった私が地の底から這い上がる決意をしたのはこの時だった。

そんな中、セイレーンが魔女二人の出陣に加えて筆頭騎士を前線に送り込む意向を固め、ヴィ

リンヒトは武帝アイン様自らが出陣の意向を示された。

補佐にホンフォン出身の剣士を連れて行かれるとの事だが、どうやらこの剣士、只者では無いらしい。

ヘルツェレーラは全土を巻き込む戦火の渦に吞まれて行く。

そんな動乱を他所に、時代に埋もれた私は、ただ、足掻く事しか出来ないでいた。

ここはどこだ……

こいつらは一体なんだ……

俺はどこにいても王なのか。そうか、それが俺の器か。

まあいい。

どこで王になろうと、こいつらが何者であろうと、今の俺にはどうでも良い。

ただ俺が知りたいのは、俺の意思とは関係なく俺の体を動かす破壊衝動が一体何であるのかだ

。

—これは俺の体だ

俺の体をよくも俺の意思とは関係なく操ってくれるものだ。

俺が許せないのは……唯それだけだ。

あの後、あれからどうなったのか、気を失っていてあまり記憶に無い。

唯はっきりしている事と言えば、神が一つ消えたのだ。均衡を保てなくなった世界は急速に崩壊に向かっていた筈だ。そこまでは覚えている。

世界が崩壊すれば、もう——生きてはいないだろう。

ラーガが死んだ。

いや、あれはラーガじゃない。だが、あのカ=ティナの力で俺は自分を取り戻す事が出来た。

マユリも、ヤマも……みんな死んだ。

—俺の所為か

カインはそう言った。

あいつはいつから啓示を受けていたのだろうか。

ザ=ルアがカインを選んだと言った。ザ=ルアの意思でカインを選んだのだと——カインはそれを受け容れたのか。

—ゼルフを捨ててまで、力を欲したか

否、カインはそんな奴じゃない。

カ=ティナの力を欲したラーガは完全にカ=ティナに奪われていた。あれはもうラーガでは無かった。

しかしザ=ルアの化身となったカインはそのままだった。何も変わってはいない。カインは自らの意思であの力を行使出来ていた。

俺はカインに悪と定義されたのか。

それとも、定義したのは神々か。

カ=ティナは俺に「この世界の王では無い」と言った。

確かに今思えば、今この現状を見れば……確かに俺はあの世界の王では無く、この世界の王であるようだ。

—しかも属国の王だ

なんとも見窄らしいものだな。

世界の王だった俺が、国を追われて亡命中の暫定王とは片腹痛い。

世界を滅ぼすと言う大罪を犯して尚、人を見下す立場に有るのかと思えば、そんな俺に膝を突くこいつらがただただ滑稽に映る。

俺は一体何をしに生まれ、何をしにあの世界で育ち、何をしに今この世界にいるのだろうか。考えるだけ無駄か。

出来る事なら過去など全て忘れ去りたいものだ。

出来もしない贖罪に頭を悩ませる必要も無いだろう。

償い切れない大罪を犯した王が、一体ここへ来て何を為ろと言うのか。

「ランドン君、王とは一体何だと思う」

「申し訳御座いません。及ばずながら私のような男にはお答え出来る話ではありません。お許し下さい」

—召使いの少年にする質問でも無いか

「恐れながら、殿下……」

「何だ。あまり謙るな。気楽にしておけ」

「いいえ、滅相も御座いません。ですからどうか、私の事も「ランドン」とお呼び捨て下さいませ」

一番近くにいる奴がこれでは俺の気も休まらん。

俺の国はどうやら滅びかけているようだ。

なるほどそれで必死になって俺を迎えに来たわけか。

しかし俺は世界を滅ぼすような男。こいつらは俺を救世主のように思っているのかも知れないが、俺の中には悪魔が潜んでいる。俺の中の悪魔を退けたあの呪術師はもういない。

「彼ほどの魔導術師はそうそう居りません」

ランドン君はそう言っている。

呪術師フェルナドアルベルダは「完全に消し去る事は不可能だ」と言った。「抑制するのが精一杯だ」と——

こんな俺を王に迎えるなど馬鹿げている。

「お初にお目にかかります。我らは先代よりアニス王にお仕えして参りました者に御座います」

仕官長のシンクレアが数人の男を連れてきた。

混乱する国を逃れ、俺に仕えるべくここまで馳せ参じたそうだ。

聖導師テュロンヴィエラ——財務長官をしていた王都の政務官。

魔導師ローズランス——西の守りを任された司令官。

剣士リカルドガビエル——北の守りを任された司令官。

剣士ジェフリーナイトレイ——北の守りを任された将。

剣士カタルシアファナティス——黒騎士の称号を持つ筆頭騎士。

「たったこれだけか」

ここに来る途中、騎士とやらを二人ほど失っているようだ。

それにしても少ない。

ランドン君の話では大国という話しぶりだったから、さぞや大勢が謁見に来るものだと思っていた。

「俺と一緒に戻ってきたと言う男はどうした。ザックと言ったか……」

「イザックフィナンは現在もまだ傷が癒えておりません。片腕を失っておりましたので……院での治療が終わり次第、謁見に参じるでしょう」

少々腹立たしかった。

たったこれだけか、俺の兵は。

聞けば国民は安全な地域へ避難しており、国が正常に戻るまでの間は亡命先で避難生活を強いられるのだと言う。国では何が起きていると言うのか。暫定的とは言え国家元首であるこの俺が、どうして自分の国に戻る事を許されないのか。

「俺の国なのだろう。なぜ俺が戻っては成らんのだ。属国の王だからか。では我が国の宗主とは何を考えて俺達を戻らせないのか！」

見窄らしいものだ。

この程度で俺は王を気取れと言うのか。

これでは隊長にも成らんわ！

「今、我が国は何者かによって侵されているようです。先代亡き後、国家の混乱を突かれ、王都には何者かが潜んで居ります」

剣士ファナティスは一足先に先遣隊として国に戻り、状況を見てきたのだと言う。

「なぜ『何者か』なんだ。貴様はそれを調べもせず何しにここにいる」

「不肖ながら私の敵う相手ではありません——」

「殿下！！」

これが筆頭騎士か。

こんな細い女が筆頭騎士だと言うのか。

—馬鹿にするのも大概にしろ！

「この程度では死なんだろう。なあ黒騎士。俺の腕となりたければ屍となっても敵を殺してこい」

「……………御意」

「これで筆頭騎士か！ こんなものか貴様等！ 兵とも呼べんな。俺は何だ。どこの王子様で、どこの王だと言うんだ。馬鹿げているな——俺は世界の王だぞ！ その俺にはこんな寄せ集めた塵のような弱者しか居らんのか！！」

「威勢よく吠えるものだな、アニスの王子は」

「ふん。そう狼狽えるなよ若輩者めが」

部屋の隅に赤紫の女と男が立っている。

俺の国の宗主と言ったところか。そんな風格はある。

「パルス様……まさか、そのお方は——」

皆が二人に対して膝を突いている。

「どこの誰かは知らないが、黙って勝手に入室しておいて随分な物言いだな」

「で、殿下……どうかお戯れはお辞め下さい」

俺の足下で膝を突きながら涙目で訴えかけるランドン君には申し訳ないが、何処の誰とも判らない奴に謙る理由は無い。

「何処の世界のどんな王様だか知らないが、ここにいる以上、貴様は単なるアニスの王子。そう喚くな。我は姉妹国セイレーンが主、イニスである。お前の国は我がセイレーンとここヴァリアント、そしてこの隣国マージの下に当たる。安心して謙るが良いぞ」

「断る」

「はっはっはっは……面白い。流石はサイモンの息子だけの事はある。実に分不相応な挙動よ」

「ふん、だが……王の器はあるようだ。それで良い。だが改めて言うておく。お前の処遇は我らに委ねられている。国に戻るまでは我らが意に従って貰う。努々忘れるな」

生意気な男の方はすぐにでも殺せた。

女の方は強い。自然体で恐怖を感じる得体の知れない雰囲気醸していた。近寄るべき相手では無かった。だからといって王たる俺が下々の前で無様を見せるわけにはいかん。

どの道、何が何だかさっぱり解らない事だらけだ。今はこの世界を理解する事が先決。上下関係など知った事では無いわ。

使い物にならなくなった黒騎士を下げ、剣士ガビエルとナイトレイを左右に据え、導師の二人とシンクレアにはこの世界のあらゆる知識を請う事にした。

「では私の兵や民はまだ他にも居るのか。なぜそいつらは俺の許に来ない」

俺の許に来た連中は西と北に配備された兵たちばかりで、東と南の兵は何故居ないのかと訊ねると、どうやら軍を二つに分けて、国を取り戻す為の算段を立てているようだった。

南の兵は隣国へ避難した国民の護衛に残してきた為、最低限度の主要人物のみが俺の許に集う形となったらしい。

北の兵は北西に逃れたようで、兵と要人の多くはその北西の陣へ逃れたらしい。そしてその北西には俺の妹がいると言う。

双子として生まれた俺達は生まれてすぐに亜時空を移動し別天地へと降り立った。しかし俺は普通にゼルフとして生まれている。奴らのように呪術で現れたわけでは無い。移動したと言われても信じがたい話だった。作り話にしては手の込んだ事をする。概ね信じてやっても良いが、すんなりと受け容れられる話では無い。

西にいると言う妹も俺と同じ境遇ならば、やはり俺と同じように何処かで何も知らず生まれ育

っているのだろうか。俺の心境を最も理解出来るのはその妹くらいなのだろう。

妹に面会を求めたが、未だ妹が戻ってきていると言う報告は無いらしい。

「北西に逃れた奴らの中に居るんじゃないのか。居場所が判っていて居ないとはどういう事だ」  
どうやら戻って来る為には呪術装置が必要なようで、体に埋め込んだそれが呪術を展開するらしい。

妹の装置を持った男は北西に陣を執っていると言う。

「然らばその男を俺の許に寄越せ。なぜわざわざ離すような真似をする。俺と妹と一緒に居ては拙い事でもあるのか」

その理由を知る者は居なかった。俺達を迎えに来る計画を立てた者がそう計らったのでは無いか……分かっているのはそんな憶測めいた事だけだった。計画者とされるチェゼレーア公爵をはじめ、国の貴族たちの多くは国に残ったまま消息絶っていて、現状ではそれらが生きているのか否かも解っていない。

「王都には何者かが居るのだと分かっているのだろう」

それが『何者か』解らないと言う事はアニス人では無いのだと言う。アニスでは要人全てが監視対象として紐付けられ、それを城が認識する仕組みがあるらしい。

—随分と窮屈な事をするものだ

それ程までに信頼の置けない国だったのか。

滅びかけた国と言うだけの事はある。

元首が臣下に対して信頼が出来ないからこそその仕組みなのだろう。そして、そうまでして臣下を意のままにしたかったと見える。

我が父とされる男は随分愚かな王だったのだろうな。

統率力の無い身の程を弁えず、ただただ王としての権威を振る舞いたいだけの男か。国が滅びるのも無理は無い。大方、クーデターでも起こされたのだろう。名門とされる貴族の当主が揃いも揃って沙汰も無く、俺の許にも来ない所を見ると、どうやら黙ってこいつらに従っているのも馬鹿らしい。

—俺と妹を始末すれば大団円と言うわけか

なるほど面白い。

策に落ちた振りをして暫く様子を見させてもらうとしようか。

「姫が帰還したら即座に我が許へ集えと伝えよ」

どんな娘かは知らんが血を分けた妹だ。俺と同じ境遇だとするのなら、何も知らず、何も解らない筈だ。そのまま殺される前に保護する事も出来るだろうし、何らかの手は打てるだろう。

簡単に殺されてしまうようでは面白くない。

正直、妹が死のうが生きようが知った事では無い。だが、どうせなら楽しませてもらおうじゃないか。こんな下らない世界の馬鹿げた話に、真面目に付き合っ居られるか。

何だこいつは——

「ふむ、貴様が二九代目のダイヤモンドか」

我が国の宗主国、ヴァリアントの王であると言う。

しかしどうやら影武者のようだ。

「誰だ貴様は」

俺は王だ。属国の王とは言え、影武者に謙る愚かなどしない。

「控えよ！ ヴァリウス王の御前であるぞ！」

「ふん、見縊られたものだな。俺が影武者に気付かないとでもお思いか。これは王では無かろう」

騒然とする中で王を取り囲む貴族らしき何人かが「そんな事は無い！」と口々に怒鳴り散らす。

こんな平民を玉座に座らせておいて気が付かないとでも言うのか。

一体何の茶番だ。

「聞けば王子は異国に居られたようだ。我が国々の事を余り存じては居らんようだ……いやしかしアニスも地に墮ちたものよな」

とぼけているのか。

それとも本気なのか。

いや、試しているのか。

俺は愚弄されているのか。それともただの阿呆を相手にしているだけなのか。

「玉座に平民を据える国に言われては、アニスと言う国が落ちた地と言うのもまた、さぞや深いのであろうな。哀れむぞヴァリウス王。そうまでして俺を恐れて御出でなのか。いやいや、小心者を王に据えて居られてはこの国の民もまた哀れ。それとも王を護る戦士が頼りなさ過ぎて俺に恐れ戦いたか……茶番も良い加減しろ！ 平民相手に愚弄されて憤らぬ私では無いぞ！」

「貴様！ 万死に値する！」

どうやら本物の阿呆のようだ。

「俺に剣を向けて生き残れる自信がお有りか……そうか。ならばいつでもかかって来い！ 全て薙ぎ払ってくれるわ！」

相手に力量も読めずに剣を抜くとは笑止千万。阿呆とは正に底の知れぬものよな。

『その辺にしておけ』

—なんだ！？

「はっはっはっは、どうやらアニスの王子は権力欲が旺盛のようだ。だが目の前に有るのはお前の玉座では無いぞ、ダイヤモンド」

セイレーンの女王か。

周りが騒ぎ立てる中、それを鎮めるかのように笑いながらそう言った。

だがその前の頭に響いてきた声は一体何だ……

『お前の目は間違っていない。だが今はそのままその人形を王と言う事にしておけ。今はまだ時期では無い』

明らかに俺に対して、俺を見てそう言った。



だが俺以外の奴には聞こえていないのか、誰もその言葉に反応する者は居なかった。

「双方剣を収めよ。我らセイレーンはこの茶番に与する気は無い。ヴァリアント、アニス二国間の問題であろう。問答で決着をつけられよ」

そもそも何故この場に此程の王が出揃っているのか……

少なく見積もってもこの中に王は三人居る。

その全ての王が女王の言葉に従う意向を示した。確かにこの中で最も権威を感じるのはあの女王だ。

あの重さには俺も敵わない。

「まあいい。今は貴様が王であると言う事にしておいてやろう」

「ダイヤモンドの言葉では無いな」

「これ以上の譲歩は無い」

「戴冠は為ぬと？」

「俺が王になるに当たって貴様に許されなければ成らない言われは無い。俺が王子であろうと王であろうと平民であろうと、従わせれば王なのであろう。それが器だと言うのなら、俺に従いたい奴は俺について来い！ 然らばこの俺が貴様等の君主となろう！」

「慎んで我らが王と成られませ、リンス様」

「従おう」

「従います」

「ああ……喜んで従わせて頂きます！ 我が王よ」

こんなものだ。

これで拒まれるのなら俺は王でも王子でも無い。

場の沈黙は正にこの俺を王と認めた証。

「王権とは天意に在って然るべき。天は俺を王と認めたぞヴァリウス王。これが器だ」

「成程、茶番だな。良いだろう茶番の王・ダイヤモンド。だが国を持たぬでは哀れなり。貴様の国を救ってやっている恩に対しての報いは背負ってもらうぞ」

「ふん、良いだろう。所詮は属国の王か。我が国を救うべく力を借りている以上、それなりに遣うが良い」

一国を取り戻せば真っ先にこの国が亡くなると知れ

『ダイヤモンド王、後で我が許に来られよ』

宮殿からの去り際、またしてもあの女王の声が俺の頭に響いた。

聞けばこれは伝心というものだそうで、強い力を持った奴にしか使えない業だと言う。

「じゃあ角の本数で分かるのか。あのヴァリウスとやらも沢山生えていたが……奴には聞こえていないんじゃないのか」

「個人差があります。ですがヴァリウス王も伝心が出来ると聞いた事があります。しかしイニス様のお力は大陸一ですから、我々とは能力が違うのかも知れません。あの方はもう三千年以上も

前の方ですから」

「化け物か」

「恐れ多くも、決して本人の前では口に為さりませぬよう、お気を付け下さいませ、陛下」

「この世界では普通何年くらいなんだ、寿命は」

「人によりますが、ヴァリウス王は六百歳を超えて居られます。概ね長く生きても八百から九百だと言われています」

歳を何処で区切って数えているのか。考えれば、そんな初歩的な事ですら違うのだ。数字を聴いただけではさっぱり解らないな。

しかも俺はまだ九八歳なのだという。

一二八七歳だったんだがな……若返ったのか？

寧ろ顔は老け込んでいる気がする。

「イニス様はつい先日まで眠りについて居られたのです。歴史に名高い【セイレーンの魔女】と言えば正に、彼女の事です」

「魔女ね……」

「あの方がお生まれになられたのはアニス王が十代目の頃だったと思いますが、詳しくは存じ上げません。あの方の母親がアニス王女である事は有名な話です」

ヴァリアントの王城ヴァレリアから少し離れた場所に有る宮殿、ライドレイ。

他国から集ったものと思われる面々がそこに駐屯する。

我が国も例外なくその宮殿の一間を拠点としている。

戴冠の儀を執り行うとして呼び出され、赴いた王城からの帰り道。博識で知られると言うシンクレアを呼び寄せて話を訊いていた。

国では執務長官をしていたと言うだけあって、他国の事情にも詳しい事は確かなようだ。用兵術の心得は無いようで、軍師には見えそうにも無いが、俺の傍らで面倒な庶務を任せるには良いだろう。

シンクレアは国内の要人の大概を知り尽くしており、今俺の許に居る者共の為人を知る事も出来た。

「ではあの女王の脇にいた生意気な男も我が国に仕えていた男なのか」

「仕えていた——と言うのは語弊が有りますが、彼はご存知の通り他国の皇族に当たります。それは我が国よりも権威のある国の皇族です」

「そう言っていたな」

「はい。先王様に謀られたのだと……殿下は仰せでした」

「この機に元鞘に収まったわけか」

「そのようです。勅令では致し方有りません」

あの女王はどうやら大陸一の権力者と言われるヴァリアントの王よりも上か、同等の権威があると言う。国を建国した歴史が古ければそれで権力があると言うのは何処に行っても同じか。

だが実質、世界を動かすのはそうした上辺だけの権力では無い。理解する事こそが力の奔流。そしてその流れを掴み、その流れに乗る為の理解をするには一にも二にも情報が欠かせない。

俺は知らなければ成らない。

そしてそれを受け容れなければ成らない。

何も解らないままでは憶測と猜疑心に自我を拘束されて身動きが取れなくなる。

愚かな王の末路とは常に己を見失っているものだ。

そんな王を……国を幾度となく見てきた。

俺の全てが正しいのかと問われれば、それは分らない。俺も愚かな王の一人なのかも知れない

—世界を滅びに導いてしまったのだからな……

俺は、先ず何よりも俺自身が何者であるかを知りたかった。

「一人か」

ライドレイに戻ってすぐ、俺はセイレーン王家の居ると言われる迎賓館を訪れた。

シンクレアやガビエルが喚き散らしていたが、断固として誰も連れては来なかった。自分の身を守るのに必要なのは足手纏いでは無い。何より、身の危険などありはしないだろう。

「俺一人で来た方がいい話が聞けそうだなと思ったまでだ」

そこにはやはり女王一人だけしか居なかった。

そんな事はこちらも概ね予測の範囲だ。

「賢い奴よな」

——！？

百歩は有るだろう距離を一瞬で詰め寄ってきた。

「ほう……」

何も持っていなかった筈の女王が俺の目の前で槍を構える。その切っ先は俺の眉間を正確に捕らえていた。

「速いな。流石は魔女と謳われるだけの事は有る」

—呪術の槍か……

俺がそう言うと、女王の槍は煙のよう消えた。

「初見でこれに全く動じなかったのはお前が初めてだ。殺気は消していなかったが？」

「ここで死ぬのならそれが天命なのだろう。俺はどんな死でも受け容れる覚悟はしている」

「そのようだな……知りたくも無いものが勝手に流れてくる。悪く思うなよ、まだ自分でも司れない」

「心を読むのか」

「勝手に見えてしまうのだ。貴様のは……黙っておくには忍びない。悪く思うな」

「そうか。だがそれなら話は早い。盗み聴かれる心配も無さそうだ」

「アニス人が命懸けで連れ戻す理由が解った気がする」

長い間封印されていた女王は、俺と同じく今のこの世界の状況をあまりよく知ってはいなかった。この世界の現状を聞けるだけ訊いておこうと考えていた宛は、どうやら外れたようだ。

今のヴァリエント王・ヴァリウスは王では無い。

だがその所以が判らない以上、確たる証拠も無く詰る事は返って真実を見えなくする。

ヴァリウスの治世になって七代目。ヴァレリアが築かれたのはヴァリウス二世の時代だとシンクレアからは聞いている。ヴァリウスはヴァリアントの分家であり、直系は途絶えている。

現在のセイレーンもまた分家を継いだもので、直系は女王の代で退いていると言う。この世界では特に珍しい事でも無いらしく、我が国・アニス王国の王家も一度分裂していると言う話を聞いた。

分家とは元々直系の血を継ぐ枝に過ぎず、溯れば根源を同じくする者だ。

しかし今のヴァリウスにはヴァリアントの血を感じないのだと言う。

ヴァリアント王家はマジーク王家、アニス王家という分家を持ち、アニス王家の血を継ぐセイレーン女王とその子孫の家系もまた、ヴァリアント王家に溯る事が出来る。

血の継承を絶対の権力とする。

この地域の国々の多くは王者の血族、血縁者が絶対の権力を有する。

馬鹿げた話だ。例えそれがどれだけ無能であっても、その家に生まれれば自動的に王として君臨するのだ。欲を出さずとも権力が手に入る。臣下がその権威を盲信するからこそ成り立つ話だ。

これでは通貨に等しい。

価値を数値化し、数値化された価値を具象化する事で価値の均一化と格差を齎す。いつしかそれは、見えざる価値に盲目となり、目に見える具象化された通貨そのものに価値を見出すようになる。ただの石片を大切に抱え込む姿は正に滑稽なものだ。

見えざる能を見極める術もなく、ただただ血統を権威の代替として象徴する事は、単なる盲信でしかない。王足る能の無い者を玉座に据えて有り難がるなど笑止。

—やはり世界を獲るか、俺は

「そう容易い話では無いぞ」

盲信の権威など絶対では無い。もし仮にそれが絶対の権力であるのなら、その国を滅ぼす事など造作も無い事。それが世界を統べる国と言われるヴァリアントであるのなら、均衡を乱された国々が覇権を求めて争い始める。強い国ほど覇権を望み、やがて疲弊する。

疲弊した強国を黙らせる知恵が最終的に世界を掴み取る。

国などどうでも良い。

国土の広さ、権力の強さ、軍事力の大きさなど、どうでも良い——最終的に全てが掌中に収まるのだからな。

そんな事を考えていると、その心を読んだ女王に釘を刺された。

勿論そんな事は解っている。

未だ俺はこの世界をよく分っていない。今までの常識が何処まで通用するのも判らない。俺の基準では何も押し量れない。

果たして全てを受け容れる事が出来るのか。

しかし信頼こそすれ、信用はしない。

「ならば見聞してくるが良い。どうせ機会を与えられる」

俺を噛ませ犬に使うか……だが確かに良い機会だ。思い知らせるにせよ、羽を伸ばすにせよ、

存分に暴れさせてもらうさ。

女王の話では、この後俺は遠征に向かわされると言う。

小さな国が集まる地域の紛争を鎮める事が狙いだそうだ。その遠征の将として俺を使う事は先の会議で勝手に決めていたらしい。

随分使い勝手の良い属国だ。俺の国はこの国の奴隷か何かだったのか。

何にせよ、いつまでも窮屈に閉じこめられている位なら、見聞がてら羽を伸ばすのも悪くは無かろう。余興として楽しませてもらう積もりで了承すると、女王は大きく笑い声を上げた。

「裏を訊かぬのか」

「訊いてどうする。庶民の謀など気にはせん」

「お前のいない間に国が無くなるやも知れぬぞ」

「ふん。世界は俺の物だ。やがて俺の許に返ってくる物なら、一時的に手放す事を惜しむ必要も無かろう。そもそも今この現状からして、俺の国は既に乗っ取られているでは無いか。取り返す事が可能だと判断しているからの現状であろう。然らば俺の国を乗っ取っている者が何者であるかなど大した問題では無い……終わって見れば世界全てと共に俺の許に降っている事だろう」

—セイレーンは渡さない

何も言わなかったが、女王の目は怒りを顕にそう言った。

短い会談の去り際、思い出したかのように半歩振り返って女王が呟いた。

「お前の妹はフェネルにいるそうだな」

「ふむ。それを使うか」

「お前の赤騎士が使わせてくれればな」

世界に名の知れた将だと言う。

妹の帰還装置はその将が持っている。

利用価値を見出せるのなら有効に活用したいと考えていたが、その前に喰われるか……それは少々惜しい。

「赤騎士はお前が思っているよりも頼りになる男のようだぞ。私を信用しろ」

俺の許に居る兵を見渡して、その「頼りになる」がどれほどか。期待などしないに限る。

女王は一度国に戻ってからフェネルに向かうと言って去って行った。どうやら女王が興味を示しているのは妹の方では無く、その赤騎士とやらのようだった。

ここヴァリアントは南の隣国。フェネルは西の隣国に当る。国境近いブラッディヴァレイと言う場所に陣を構えているとは聞いている。

宮殿に戻ると、ヴァリウスからの命令を携えたシンクレアが俺を待っていた。『中部諸国の紛争に介入し、それを鎮めよ』とする内容は女王から聞いていた通りだった。

妹を連れた赤騎士と会うのはその後になりそうだ。

あの女王に先を越されるかと思えば少々癪に障るな。

どうやら紛争介入の遠征には監視が付くようだ。王と崇める男にあれだけのご無礼をしたのだから当然か。

—そんな事はどうでも良い

さあ、溜まった鬱憤を晴らさせてもらおうか。

戻って以来、ずっと中央塔に閉じこめられている。

この塔はまるで生きているみたい。

外に通じる部屋や壁を目指すと途端にそれを塞いでしまう。

「そんなに私に出て欲しくないかー！」

怒っても返事が無いから余計に苛々するんだよ。

ずっと歩き回っているんだけど、一向に面白そうな物は出て来ない。

面白そうな場所にも辿り着かない。

「うぎゃー！」

あまりにも退屈過ぎて、鬱憤晴らしに叫んだら魔導術が暴発した。

「おおー。びっくりしたー」

—そうか、この手があったか

威力のでっかい強力な魔導の風を思いっきり目の前に放って見た。

すると塔がぱっくりと開いて、魔導をそのまま外に逃がした。

外が丸見えだ———今だ！

開いた穴に向かって飛び込もうとした——ら、足下から塔がにゆるにゆるっと蔭みたいに生えてきて、私の体に絡みついた。

そのまま私は顔から床に落ちた。

穴は見る見る内に閉じてしまう。

「いたあ！ ああ……んもおおお！！ 何なの？ 痛いなー……どうして出ちゃいけないのー！」

絡みついた変な物はそのまま塔の壁や床に戻った。

—いっその事、この塔を壊してやろうか……

でも何をしても塔に勝てないんだよ、これが。

んもう悔しくて、すっごく頭に来て……でもただ鬱憤が溜まるだけだった。

なんか馬鹿にされているみたい。

「この私を馬鹿にするとはい良い度胸だ、このクソったれえ！」

—この世界の人はいクソしないか……

そんな独り突っ込みは良いんだヨ！ 全員集合。ばばんば・ばんばんばーん☆

通じないんだろうな、こんな事言っても。

あーあ。

ずっとそうやって暴れ回っていた。

外に出たい。

外に出て、大空を飛び回って、風に乗って、自由になりたい。

にゃーにゃー。

お外に出たいにゃー。

いつまで私はこんな所に閉じこめられていなければならないの。

むぎゃー。

がるるるる……

カインたちは自由に外に出たり出来るらしいよ。

なのにどうしてわたしだけ出られないの。

意味が解らない。

カインたちに聞いても知らないって言うし。

そもそもあいつらと私はどうみても違う。

私が地球から来たように、カインたちも別の世界から来たんだって。変なの。

この世界じゃこう言う事は珍しくないのかな。

それをカインに聞いても結局は私と同じ身の上な訳で、疑問に思う事は一緒だった。そりゃそーだよ。

むー。

鬱憤が溜まって暴れ続けていたら、レカが私の相手をしてくれるようになった。

なんか犬みたいな足してるんだよねー。

親た目通り、物凄い脚力っていうかジャンプ力。カンガルーもびっくりだ。

カインやマノアは普通っぽい足してるのに、レカだけは犬とか猫みたいな足なんだよ。

レカは自由に空が飛べないんだって。変なのー。

そんなレカのパンチは強力なのだ。

足があんななのに、パンチ力強え！って思った。

よく見たら凄い筋肉で、ムッキムキ。

私が思いっきりパンチしたりキックしたりしても、レカには全然効いてなかった。

ー鼻で笑うな、鼻で……

逆にレカのパンチはすごく痛くって、初めて受けた時は泣いたよ……

ありえないだろー、あの拳の硬さは。

それ以来、手加減してくれるんだけど、それでも痛い。

鈍器で殴られているみたいな硬さなんだよねー。なにあれ。

でも、レカと一緒に暴れる事が出来て、幾らかストレスを発散出来たかなー。

それを見ていたカインも私に剣の使い方を教えてくれるようになった。っていうか、この人めっちゃ器用だわ。

よく見たら親指が二個も有る。



「ずるーい！」

そう言うと、カインは親指が一つしかない私の為の剣の使い方を教えてくれた。

カインは元の世界でも剣を人に教えていた事があるみたいで、私が剣の使い方を覚える度に、優しく教えてくれるようになった。

力のある人の剣の使い方や、力が無い人の使い方、大きい剣、小さい剣の使い分け、相手の動きを読む時にどこを見れば良いのか。そんな細かい事まで教えてくれた。

カッコいい剣の振り回し方も教えてくれたよー☆

カインは意外にも優しくて、面白い人だった。

初めて会った時は無口で怒った顔してて怖かったんだけど、馴れてきたら笑顔で話してくれるようになった。いいひとー。

でもマノアは私に懐いてくれない。

お父さんとお母さんが私の相手ばかりして、自分の相手をしてくれないから拗ねてしまったようだ。

ちびのくせに可愛くない。

そんな頃、イシュメルが中央塔にやってきた。

生身だよ。

生、生。

生イシュメルだよ。

「わー、イシュメルー。イシュメルー。久しぶりー」

飛び込んで抱きついたら、なんか困惑してた。

曇や霞の時とは違うみたい。

何も変わってない気がするんだけどなー。

やっぱり別人みたいになってるのかな？

イシュメルはカインやレカと一緒に『大人の密談』をしに来たようだ。

私は子供なので聞いてはいけないみたい。どっかに行っちゃった。

まーた私は独りぼっちだ。

カインにはレカっていう奥さんとマノアっていう子供がいるけど、イシュメルにはまだ子供がいないみたい。相手もいなさそうだ。

そりゃそうだよね。

地面に潜り続けてたモグラみたいな男だもん。女も寄ってこないか。

くふふー m(Φ■Φ■)

そんな事を思っていると、イシュメルに心を読まれて「酷いなー」って言われた。

ごめんなさい。

チェゼレーアがこの場になくて良かった。

大人の密談を了えて戻ってきたイシュメルが「帰る前に」と言って私を変な場所に案内した。

そこは塔を下に降りてきた場所で、比較的大きな部屋だった。

チェゼレーアが以前私を閉じこめていた場所によく似ている。

違いと言えば、チェゼレーアの作った部屋が白かったのに対して、イシュメルに案内されたここは黒いって事かな。

そこに一人の思念体が現れた。それはまるで私が来るのを待っていたかのように……

「ど、どうしてお母さんが。家に帰って来なかったのはまさか、ここにいたから？」

その問いには首を横に振った。

久しぶりに聞く母さんの声に涙が出た。

堪らずその胸に飛び込むと、私は母さんを擦り抜けて大きく床に滑り込んだ。

……………ノ乙(、ノ)……………

色んな意味で痛いわ、くっそー。

そういえば普通の思念体は物理存在じゃないってミストラルが言ってたわ！ 今思い出した。

—九浄・境抑燐

—九浄・戒星鍵

私を護る二振りの剣。

どちらも太極様のお力から構築されるチェゼレーアの聖導印が名付けられている。

想像に易い話だよ。でも、私は兎も角……

「兄上も人魔なのですか」

どうやらそうではないらしい。

両方とも私を縛る剣なのにどうして片方を兄上に渡すんだろう。

「カインには巡星鍵を与えている。境抑燐はどちらの星も認知するだろう」

イシュメルが私の後ろでそう言った。

—そう言う事か

「二人共、その事は知らないんだね」

そう言うと、二人は静かに笑顔で頷いた。

カインは自分の剣をもう二度と使いたくないって言ってたもんね。ちょうど良いのかも。

でもカインの持っている巡星鍵は私を縛る九浄の剣じゃないみたい。

そこまで雁字搦めに縛られなくなって、私自身も死にたいわけじゃないし、これはある意味、保険みたいなものよね。

骨金の剣も軽かったけど、これもまた見た目以上に軽いなー。

見た感じ、私の境抑燐はエメラルド、兄上の戒星鍵はトルコ石っぽい感じ。境抑燐はそれほど透明度は無いかな。

プラスチックみたいな軽さだけど、感触はガラスっぽい。石と言われれば石なのかなー。

カインの巡星鍵はどんな剣なんだろう。

「変な剣だ……だが面白い。まるで俺の事をよく知っていて造られた物のようだ」

「ふーん。私のはまるで私の事を解っていない物の様だよ」

—無駄にでっかいし……

カインの剣は光沢の有る石灰石とか鍾乳石みたいな材質——セラミックス？

「持つか？ 少し重たいぞ」

—え……

「うわあ！？ な、なんだこれえ」

片手では持てなかった。

湾曲した両刃の真ん中に柄が有る剣だった。

「持ち難い上に重たくて使い難そう……」

「お前の力では難しいだろうな」

「使えるの、こんなの」

何も言わず、ただ白い剣を眺めて満足そうにほくそ笑んだ。

「使わなければそれに越した事は無いだろう」

剣を受け取ると、静かにそう言った。

その通りだと思った。でも、いざと言う時に自分の身をあんなもので守れるのかな。

「相手の武器を壊す事は出来るだろうな」

「あーなるほどー」

武器は戦う為の物だけど、戦いは人を傷つけるだけが戦いじゃない。

でもそれは自分の身が自分で守れるくらい強くないと実現出来ない。

相手よりも自分が強くないとその理想は只の夢。

結局「力は裏切らない」と言うアニスの考え方に間違いは無いのかも。

その力をどう使うのかって事。

考え方は人の数だけあるし。

同じ理念の許に集った人の集まりが国を造るんだけど、時と共にやがて人の考え方は変わるものなんだよね。

困窮している時と平和な時とでは、生きる為の考え方が違う。

景気が良い時と悪い時の犯罪率に似てる。

心の余裕が人の優しさを作るんだよ。

こんな時世に心の余裕を持つには、やっぱりそれなりの力が無いと無理だもん。

理念はその人を映す鏡みたいなものだと思う。

そう考えれば、カインの人の良さが解る。いい人なんだよー、この人は。

それに比べて私はどうなんだろう。

私は死にたくない。

でも私は強くない。

だから私はこんな時世が嫌い。

だって怖いもん。

自分が死ぬのは怖くない。

もちろん、死にたくはないけど。

大切な人が死ぬのは見たくないじゃない。

じゃあ、大切な人じゃなかったら死んでも良いの？

私の命を狙ってくるかも知れない人にも家族や友達がいる。

その人を殺せば、きっとその人の家族や友達は悲しむだろう。

でも、殺さなかったら私が殺される。

私は死にたくない。

私は生きたい。

人間は生きる為に他の命を喰らうと言う生命の循環がある。人の勝手な大義名分だけれども。

食物連鎖が無いこの世界には殺す事を正当化する大義名分が無いんだよね。

生きる為に相手を殺す道理は単なる欲求に過ぎない物でしょ。

それは人間も人族も同じ。

世界が変わっても、結局人は欲求を満たす為に生きてる。変なの。

でも満たされない欲求を満たそうとする努力が人や社会を育むのも確かで、技術の進歩は人殺しの戦争から齎されているのも地球の史実。

戦争があったから、それが大規模になっていったから、科学技術は進歩したんだよね。

平和な時ほど何もしないんだよ。

なーんもしなくなっちゃって生きて行けるんだから、創造性が失われるのも無理は無いよね。

何も考えなくなるからさ。

困った時はその困難を打開しようとして人は頭を使うでしょ。

でも困っていない時は考える必要が無いから頭は使わないのよ。

頭を使った分だけ知恵が閃くのなら、人は常に困っているべきなのかな.....

でも、困り過ぎて心が病んじゃったら死んじゃうよね。

結局はバランスなのかな。

人族は世界を毀しながら生きていると言っていた。

増え過ぎれば世界を構成する精霊も減ってしまうのかも知れない。

でも戦争は人族を減らすけれども、世界も壊すよね。いや.....この場合、壊れるのは人族の社会の方になるのかな。

精霊が人族の戦争を止めないのは、そういう意味なんだろうね。

あの「我・関せず」的な態度は癪だった。

でも人族はそんな精霊がいないと普通に生活が出来ない。全く出来ない訳じゃないけど、不便だろうね。

だから精霊ちゃんは大事。

そう、ある意味これは、地球人たちにとっての食糧みたいなもので、私たちは精霊ちゃんを食べて生きているわけじゃないけれども、食べなくても生きて行けるのは、生きる為のエネルギーや新陳代謝なんかを精霊ちゃんが代替してくれている訳だから、いわば地球人的に言う「水と食糧とエネルギー」なんだよね。

大事、大事。

いいこ、いいこ。

よし、よし。

でもさー、地球の精霊に比べてここの精霊はあーんま可愛くないんだよね。

なんかツンとしてるっていうか。

精霊にもお高く止まっている奴とかいるのかなあ。

人生、いろいろ。男もいろいろ.....精霊ちゃんもいろいろなのか？

よく分らないねー。

そんな事を考えながら過ごしていると、そろそろお別れの時が来たようだ。

カインが小汚い剣を私に差し出して来た。

「ファウラーと言う名家に伝わる剣だそうだ。その血筋はまだ途絶えていない。渡してやってくれ」

バスターズプレッドって言う名前らしい。

カインがここに来る途中、戦った人の剣なんだって。

「良い剣士だった。最後まで誇り高く戦って散った。彼の最期の望みだった。ファウラーにこの剣を遺したいと.....そう言っていた」

西に向かって赤の武神って呼ばれているレイナ侯爵を頼れって言う。

私はここに居ちゃいけないらしい。

「えー、やだー。私もイシュメルたちと一緒にいたい」

どうやら私たちは敵なのだそうだ。

「まじか」

レイナ侯爵と合流してイシュメルたちを殺しに来るんだって。

——ていうか、無理じゃん

「イシュメルもカインもレカも強いしー。私もこっちに居たい」

敵に回ったら絶対返り討ちに会うよね。

意味無いじゃーん。

なんでわざわざ殺されに行かなきゃ往けないの。

「うう.....そんなに私に死んで欲しいのね！ 酷いわ、二人とも！」

——という泣き脅しは軽くスルーして下さる

「赤の武神と謳われる通り、レイナ侯は強い。必ずレイナ侯が姫君をお守りしてくれるさ」

「カインとどっちが強い？」

「カインとは戦わないようにと言って有る。戦えば二人共死ぬだろう。互いに強い。潰し合うのは惜しい戦士だ」

「ふーん。カインと同じくらい強いのか」

「俺もこのままここで目的を果たさず死ぬわけには往かない。遇わないように気を付けよう」

カインは兄上を追ってきている。

イシュメルの許で兄上を迎え討つのだと言う。

「もし、私たちがここまで進軍してきて、カインと戦う事になったら.....私は、カインに殺されちゃうの？」

「君が戦いを望まなければ、レイナ候も戦う事は無いだろう。全ては君次第だよ、ルシファリア」

「俺達がお前と敵対する理由はない。だが、俺の命を狙い、俺達を殺そうと掛かって来るのなら容赦はしない」

「いやだよ」

「俺とお前が剣を交える事は無いだろう」

そう言ってカインは私の頭を撫でてくれた。

その優しい笑顔に、ほんの少しだけ、ちょっとだけドキッとした。微かにね。ちょっとだけね

。

「カインがお兄ちゃんなら良いのに」

歩きながら、そんな話をしながら、中央塔を出ると、二人の女を連れた男がそこにいた。

三人は外国からこの国に亡命してきた王子様御一行なのだという。

「リリーナ様を頼ってここに参じた」

残念ながらお母さんは地球にいる。ここにはもう居ない。

それを告げると三人は絶望したように崩れた。

「お初にお目にかかります。私共はメガリア帝国・皇帝ミシェイルの子。私は第一皇女アイリーン。こちらに御座すのが我が弟にして次期皇帝を継承されたパール様に御座います」

しっかりしたお姉さんに守られた次期皇帝ちゃんは、涙に濡れた顔を隠しもせず晒して黙り込んで。何とも見窄らしい.....としか言いようが無い。

亡命してきたって事は、国が滅ぼされたって事でしょ？

アニスも今同じような状況なのに、こんな所に亡命するなんて見当違いも良い所だよな。

私たち三人は呆気にとられて顔を見合わせた。

「どうか姫様の厚意だけでも給われますまいか」

「一国の主を連れた姫が、他国の姫に物乞いのような見窄らしい真似をするもんじゃないよ、見苦しい。知らないよ、お前達の事なんて」

—悔しがってる、悔しがってる.....

それが当然の反応だよな。侮辱されて尚、落ち込まれるのなら救いようが無いもん。

「おのれ！ 人魔め.....」

他国の姫に敵意剥き出しで見つめられたら、殺しても良いよね。

バカな女.....

「戦えるの？ 見た所、戦士じゃ——」

カインが私を止めた。

「この国も今は荒れている。俺はこの世界の人族という種族では無いが.....俺も国と、生きるべく世界を失ってここに来た。この世界の事はよく知らない。だが、人魔と蔑むそのイシュメルと、人族では無い俺達ならば、この世界、この国の事情を無視してお前達を保護する事は出来るだ

ろう。国を取り戻すもよし、このままここで暮らすのもまた良いだろう。だが今一時はここに身を預けておけ。この国の事態が落ち着くまでは俺達がお前達を守ってやろう」

膝を突く女に手を差し伸べてそう言うと、私をみて「これで良いな」と言ってきた。

今のアニスは王が不在の国。

先王は私の父。その娘である私が暫定的に王権を振る舞う事は、イシュメルが認めてくれた。  
—もう私、ここから離れるんだけど……

「いいよ。面倒くさいから、それはカインにあげる」

私はそのままその場を後にした。

なんか興醒めって感じ。

暫く西に向かって進むと変なオブジェクトが見えてきた。

—でたよ、でたよ……

そう。これが世にも不思議なアニスのお城。

西に来たのは初めてかな。

東方魔導院もあんなだったけど、西方の聖導院もこんなですよ。

これは建造物です。

しかしこれは雨風を凌げなさそうだ。

「あっはっはっはっは……なんだこれ」

もう笑うしかないよね。

そこへ頭巾を被った聖導師らしき男が近寄ってきた。ミストラルの知り合いかな？

『この建造物の主がミストラルと呼ばれていたそうだが、私は関係ない』

髪の色はミストラルやフェルナンドと同じで、群青色なんだよね。

どうやらこの人はイシュメルに頼まれて私を迎えに来たそうだ。

『この先を真っ直ぐ進んで国境門とやらを越えれば、赤の武神が居ると聞いている』

この人はイシュメルの居る王都を西側から守っている人で、軍を率いて私たちがここに来たら、まずこの人が相手になるんだって。

随分と自信はあるようだ。

『赤の武神には敵わないだろう。だが、貴方程度なら私の敵では無い。私の前に現れない事を願う』

そんな言葉を遺して、霧のように消えた。

—あんな事も出来るんだ……

インビジブル的な聖導だろうか。

私もやってみたいと思ったけど、出来ないんだよね。

死にたくないわ。

剣を三つも抱えて、誰もいない薄暗い草原を独りぼっちで歩く。

獣道っぽい道を進むと、また変なものが出てきた。

この城を越えて、もう一つ塔が有って、その向こうに門か。

—かったるーい

よく考えたら、私お姫さまなんだよね。

なんでお姫さまの私がこんな鬱蒼とした雑草を掻き分けて歩かなきゃいけないのよ。

誰か迎えに来い！

ていうか、もう歩くの面倒いし……ああ、今思い出した。

「ふっはっはっはっはっは！」

私は空が飛べるんだった。

「ん～～、気持ち良い☆」

上空で浴びる風は気持ち……いや、ちょっと……待って、あの……寒い！ ていうか、めっちゃ寒い。

なにこれ。

そう言えばリジスの赤い城に行く時も寒かったな。

そもそもあの時とは違って、今私一枚しか着てないし！！

「さっむー」

低空飛行しよう、低空飛行。

ああ、後翼疾走で良いや。

—て思ったけど、疾走すると寒い！

後翼を使わなければいいのか。

—というわけで、背翼と主翼だけで低空飛行♪

思ったより疲れるな……

後翼の羽搏きが無いと、主翼や背翼を羽搏かせなきゃ往けない訳で、これがまたパタパタやっ  
てるだけでも結構しんどい。

「あああー、もうだめ」

塔まで辿り着いて、少し休む事にした。

それにしてもおかしな物で、この世界はまるで人が無い。

前に雲や霞で来た時も、殆ど居なかった。

生き物の気配がまるでしない。

前はこんなに気持ち悪いほど静かじゃなかったような気がするけど……そう言えば精霊もあん  
まいないな。

まるで空間閉鎖だ。

こんな広範囲に空間閉鎖は無いだらう。

でも、本当に人っ子一人居ない。

天気はいつもどんより曇り空。

そもそもこの世界……この星に、太陽とか有るのかな。

面白い話だよね。

太陽が有ったとして、それはつまり地球とは別の太陽系が他に有るって事じゃない。



じゃあこの星も地球と同じように外宇宙のどこかって事？

それがまるで地球と同じような環境なんだよ。

これは一体何処なんだろうねえ。

そんな事が判ったり、言えたりするのは私一人だけなんだから、結局解明しようも無いんだけどさ。

この星から望遠鏡を使って空を見たらどんな外宇宙が見られるんだろう。

そもそもそれ以前に、空は青いんだろうか。

海は青いんだろうか……海が青いとは限らないよね！ ね。

だって草や植物がこんななんだよ？

いやー、海……こわいな。

血の海だったらやだし。

でも泉の水は透明だったっけ。

氷も地球と同じだった。

空が晴れてないから海の色が判らないよね。

色々調べたいなー。

けれども道草食ってる場合じゃないし。

どうせ私は一生この世界で暮らすわけだから、追々見て回れるよね。

さて、そろそろ行くか。

「だーかーらー、面倒くさいからお前達に任せるって言ってるだろう」

一あー、めんどくさっ

何で俺の方にはこんな堅い連中ばかりなんだよ。

ウィンディアの小隊を追い出して暫く、ヴァリアントの使者が何度もこちらに来ては様子を伺っているようだ。使者は次から次へと代わる代わる現れ、交代して帰って行く。

概ね俺達の動きを報告しているのだろう。

奴らへの対応は全てメツエルダーとキャンベルの二人に任せている。

思えば奴らもウィンディア人だ。先遣隊に送られてきた雑兵共と一緒に帰る事も出来ただろう

。

一ま、それなりの理由があるのは解ってるけどな.....

キャンベルはセイレーン王家に対する不敬を問われて流罪となっている。戻る国など有りはしない。

メツエルダーは留学中に王の目に留まり契約させられた。しかし恋人がストームランドの辺境に居ては一人で帰るわけにも行かない——そんな所なのだろう。あいつは時々東の空を見つめてぼーっとしてる。イエレミースとメツエルダーはウィリンド出身だ。

あの後訊ねて見れば、あの女騎士についてよく知っているようだった。

「彼女は武門の名家、シュネル伯爵のご令嬢です。たしか弟君も居られる筈です」

あれで武門の名家とは片腹痛い。

「殿下が以前に剣を交わしたリーフェルン大公の事は余り存じ上げません。ですが、王家の外戚である事は間違い無いかと存じます。私の知る大公閣下は、恐らくその方の父君に当たる方かと——」

ウィリンドの王家は短命である事が専らで、長く生きていても四一〇歳前後だと言う。

普通はその倍を生きるものだ。

ウィリンド人全てが短命なのではなく、王家、特に王となる者は例外なく短命だと言う。

一呪われた王族か

そんな馬鹿げた話を昔どこかで聞いた事がある。

ウィリンドとセイレーンが敵対している原因もそこにあるとかないとか.....

決して和解などしないだろうと言われていたウィンディアの二大国が休戦協定を交した。

そして、魔女が目覚めた————

ウィンディアには眠る英雄が居る。

セイレーンの魔女と謳われるアイニス・アメシステは大昔の皇族で、その母親は王女グラデ

イス。イシュメル様の妹に当る方だ。

アイニスが魔女と謳われる理由はアニス王家との混血にある。

グラディス様は人魔族では無かったと聞くと、その母親たる王妃グロリア様は魔族。その血を継いでいるからこそ、アイニスとその子孫には王位継承権が剥奪されている。

極東・氷塔主を務めて居られたパルス殿下は、まさにそのアイニスの子孫で直系のアメシスト。アイニスの伝承については何度か訊いた事もあった。

中部諸国を制圧した白い槍の魔女の伝説を知らない者は居ない。

ウィリン드의アイン・スマラクトは同じ時代に生きたウィリンド王子で、アイニスの姪、クローディア姫との恋話が有名な英雄だ。

魔女アイニスと共に眠りに就いたアインとクローディアは救国の英雄として讃えられている。

ウィリン드의アイン王子は過去にも何度か目覚めているが、セイレーンのアイニスとクローディア姫が目覚めるのは初めての事だった。

この三人が同時に目を覚ました事が、二国間の休戦協定に繋がったのだろう事は想像に易い。

不可解なのは、それに合わせるかのようにしてウィリンド新王国が公式に発表されている事だ。現国王が戴冠したのは随分前だと思うが、発表されたのはつい先日。先代の王が崩御した事は告げられていなかった。では崩御もしていない内からあのリーフェルン大公は国王守護を名乗ったというのか。その王の名は正に現国王エーデルン・スマラクト。

サイモン様のご乱心と時を同じくしてセイレーンでは魔女が目覚め、ウィリンドでは王が変わっている。話が出来過ぎている。

永く軋轢のあったセイレーンとの和議をどうして成せた。その意図は何だ。

ウィンディアがヴァリウスに加担するとは考え難い。

恐らく眠りから目覚めた魔女は俺と同様にヴァリウスには気付くだろう。では何故の参戦か...

...

ウィンディアが果たしてどう動いてくるか。

—そんな事が起こるなどとは聞いていない

「そちらの伝令はそちらで用意してもらいたいものですな」

ヴァリアントの遣いがアニスの急使として伝令と称した書簡を携えてきた。

書いたのはキリコシンクレアかテュロンヴィエラか。

国内でも行政仕官のみにしか解読出来ない暗号文書だった。

—なるほど、それで行政官を分けられたか.....

書簡にはルシファリア殿下がご帰還され次第、即刻ヴァリアントのランドレイへ連れて来るように書かれているようで、その役目には俺が指名されていた。

リンス様と共に戻ったのはフィナンだけで、ファウラーとフェルナンドは戻らなかつたらしい。

「アシュリーが継承したスプレッドはフィナンが持ち帰っているのか」

残念ながら書簡にはそこまでは書かれていないらしい。

スプレッドが失われると言う話は聞いていない。

それよりも不可解なのはフェルナンドも戻っていないと言う事だ。

フェルナンドがいなければ亜時空間結路を閉じる事は出来ない。それをどうやって閉じたのかも書かれていないと言う。

向こう側から閉ざしたか……一体何が有った――――

詳しい事情はフィナンの治療が済み次第、聞き取りを行う旨が記されていた。

フィナンが隻腕で戻ってきた話から考えても、恐らくフェルナンドは二人を帰らせる事が精一杯だったのだろう。

――アシュリーを失ったか、それとも退路を断たれたか……

自由騎士二人が居てこの様なのか。

アシュリーもアイザックも決して弱い騎士じゃない。四元帥に並ぶ実力者だ。次代の青と白の候補には調度良い騎士だと思っていた。

恐らく片腕を失って足手纏いになったアイザックをリンス様と共に逃がすのが精一杯だった……と考えるのが妥当か。アシュリーが時間を稼いでいる間に亜時空間結路を開いたのだろう。

――死ぬなよ、アイザック……

でなきゃ何しに俺が黒塔からわざわざあいつの斧を持ってきたんだか解らない。

ハーフ様は「アイザックに継がせろ」と仰せだった。

ヴォルテージは奴に継承されて残るものだと思っていたが……違うのか？

こちらにはセントラルとディメンジョン。

あちらにはヴォルテージとスプレッド。

そう言う振り分けだと思っていた。

ルシファリア様の奉迎に行ったのはフュリーとファだぞ。親父とヴァージルではない。

こんな事なら親父たちが向かった方がマシだったんじゃないか。

どうせ死ぬのなら……いや、どちらにしてもアシュリーとフュリーが生き残れる保証は無いか

。

ミストラルの助手とは言え、フュリーと共に向かったのがファでは心許ないにも程がある。

これでミストラルとフュリーを失って、ファだけがルシファリア様と帰還するなんて事にならなけりゃあ良いが……

穏やかな気分にはなれなかった。

苛立っても仕方がない。

解読した書簡の報告を聞き了えて、暫く一人でブラッディヴァレイの遺跡を彷徨い歩いていた

。

陣と言っても建物らしいものは何も無く、せいぜい有るのは大昔の遺跡だけ。

フェネルがアニスからの独立で勝ち取った場所だ。ここで激戦が繰り広げられ、多くの兵が散ったと言う。

――鎮魂の地・ブラッディヴァレイ

余り居心地の良い場所では無かった。

民間人は安堵を求め、西に有る港町ノーザングレイへ去って行った。

ここに残っているのは僅かばかりの雑兵とそれを纏める中央の仕官だけ。

俺達はただ、何をするでも無く、ただ、ただ待つ事しか出来ない――――

ここで俺はただ一人取り残され、ただ一人戦場に向かうのか。

剣を並べられる奴はいない。

俺一人に、数人の雑兵を連れて何が出来ると言うのか。

剣士唯一人。

仕えるべく君主も無く、統べる民も大地も無く、何を誇って騎士なのか。

誰がための剣か。

誰がための力か。

ここに居る俺は一体何なのだろう。

ここはレイナじゃない。

ここはアニスじゃない。

ただの剣士、ただの人族、ただの男だ。

――嫌な風が吹く

辛辣に突き刺さる冷たい風は、まるで俺を笑っているように思えて成らない。

孤立無援の四面楚歌でも生き残る自信は有る。

だが、生き延びてどうしろと言うのか。

俺一人生き残る事に、一体何の利が有ると言うのか。

俺は一体ここで何をしているのだろうか……

「将が惑えば軍が乱れますよ」

「ウェイン……」

後ろにいるのは判っていた。

でも話しかけられるとは思わなかった。

「そう意外な顔を為さいますな。ルシファリア殿下がお戻りに成られない事への焦りはお察ししておりますよ」

同情されて喜ぶような気分じゃない。

キャンベルは黙ってそのまま近くの瓦礫に腰掛けた。

「騎士とは、統べる誰かに仕えて初めて誇られる者。仕えるべき主を持たない騎士とは、差し詰め放浪者のようなものではないでしょうか。哀れなものですな」

「俺を前にしてそんな事が言える仕官はお前くらいだろうな」

「はい。ですから私はアニスの国民なのです」

「俺もまた奇人と言う事か」

「ええ。貴方にもサイモン様と同じ血が流れて居られる」

肝の据わった男だ。

「今こうして私が貴方に話しかけられるのも、貴方が奇人故に御座いましょう」

「なぜお前は自分の死を恐れない」

「ふふ、よく問われる質問だ。死とは終焉——それは全ての終わりを意味します」

「うん？ どういう意味だ」

「生きている内がその者の生涯だと言う事です。生きていれば死にます。生まれる事でその生涯が始まるのなら、生涯とは死ぬ事で終わる。たったそれだけの事なんですよ」

「うん……」

言っている事は、何となく解る。

こいつの言いたい事が解らない。

「生きている者は必ず死にます。死なない者は居りません。つまり生まれる事によって始まった生涯は、どんな結末で終わろうとも、死んだ時、その時が生涯の終わりなのです。ですから、私はいつ殺されたとしても、それが私の生涯であると受け容れています。また、殺されるべき場所で殺されなかった——と言う事は、まだ私の生涯が終わっていないのですから、私の生涯には未だ何かやり残している事が有るのだろう。そう考えています」

「じゃあ、俺が今お前を殺さなかったのは、お前の運が良かったんじゃなくて、天命がそうさせているとでも言うのか」

「はっはっは……天命ですか。そんな大層なものじゃないですよ。確かに運でもない。私は死ぬも生きるも必然と考えているだけです。死ななければならぬのなら、私は殺されているのでしょ。しかし私は殺されていない——ということは、私はまだ生きるべきなのです」

——さっぱりわからん

「姫様が帰還なされないのも、まだその時では無いのかも知れない。しかし、いずれその時は訪れる事になっています。御子様方がお戻りなられる事は先見で知れておりますから」

「それは分っている」

「戦には勢いと流れが有ると聞きます。突撃するのも、撤退するのも、その流れの中で機会を待たねばなりません」

なるほどね。

キャンベルは「今は動くべき時では無い」と言う。

そう言う時にどれだけ心を鎮められるか。

『将足る者は、心・穏やかに熱く、頭・凜然と俯瞰せよ』

親父がそう言っていた。

キャンベルは俺に大局を見失っていると聞いたかったのだろうか。

確かにこれではいざと言う時に戦えない。

—我ながら不覚

俺はやっぱりまだまだ未熟だ。

「セイレーンでは采司でもやっていたのか」

「いいえ。私はセイレーンでも、アニスでも、変わらず法の番人です」

「セイレーン王の罪を裁いたと聞いた——一体何を裁いたんだ」

「それは他国の機密で御座います」

「アニスに来てもか」

「アニスに来ても、です」

「お前はもうセイレーンには戻れないのだろう」

「ええ。私は生涯、セイレーンに戻る事は許されておりません」

「戻りたいとは思わないのか」

「思わない——と言えば、嘘になります。ですが、私にはもう、帰る家も家族も居りません。しかし私の生涯がこのままアニスの国民で終わるのか。それも判らなくなってきました」

「なるほどな。行く先々で国の機密を漏らすような男では法の番人も務まらないか」

「ありがとうございます」

「ヴァイオラ様が行方を眩ました事には関係していないのか」

「それは私も寝耳に水で、パルス殿下には本当に酷く尋問されました」

騙されてアニスに縛られたのだから、その鬱憤晴らしもあったんだろうな.....

「恐らくパルス様はもう居ないだろう。フェネル経由でフルクレストに向かうと聞いていたが、残念ながら殿下はマジークに向かわれている。魔女が目覚めたのだとしたら、早急にフルクレストへ逃げるだろうな」

「貴方は何処まで存じて居られるのですか.....それは、セイレーンの機密ですよ」

「パルス殿下の経緯と、ヴァイオラ様については聞いている。俺を駒として探したかったのだろう。あの方はハーフ様と一緒にだ」

「チェゼレーア公？」

「使える物は何でも使う。あの方々にとって俺は都合の良い手足なのだろう」

「それはそれは.....」

セイレーンの大罪人としてアニスに入国したウェイン・キャンベルは騎士では無い。その護衛としてヴァイオラ様が共に入国された。

ヴァリアント国境門から西塔を経由して中央に赴かれる予定だったが、ヴァイオラ様はその西塔で行方を眩ました。

「暫く塔の外に居ると言われて出ていかれたのが最後です。私が入国の手続きをしている間の事ですので、最後にヴァイオラ様を見たと言う西の民の言葉では、時雨の方に歩いて行かれた様でした」

恐らくフェネルを経由してフルクレストに渡れたのだろう。

ヴァイオラ様はセイレーンの至宝を持ち出している。

正確には魔女アイニスの所有物だそうだが、それがどういう物かまでは聞いていない。

ヴァイオラ様が国を出て直ぐにそれが発覚し、兄であるパルス様はその捜索に当たられてアニスに入国した。

しかしそこで王に謀られた。

王は恐らくウィンディアの動きを封じる目的でパルス様を懐に抱えたのだろうと言われている。

隷縛から逃れたパルス様がいつまでもアニス人として留まる理由は無い。

魔女の至宝を持ち出した妹を捜索し、取り戻さなければ殿下の身も危うい。

一となれば、この辺りに御出でになられるか……

面倒事は御免だな。

それで魔女がここまで追って来ようものなら、また余計な事に巻き込まれ兼ねない。

そんな事を考えていた時だった。

何の前触れも無く、突然『道』が開いた。

「うを……おー。びっくりしたあ。いきなり帰ってきたか」

零れ落ちるように三人が帰ってきた。

一びちゃ。って、おいおい……

「しっかりしろ！ ファ！」

「おおー、お帰りフェリー」

帰ってくるなり忙しいな。

「――我が聖導は浄来の鐘

周に来る万籟の唱

奏でられたる和合の旋律は絆に依りて

我が聖導の結びに謝辞を以て紡ぎ給え

天佳玉来！ 大聖導光輪 癒来」

相変わらず凄いな、ミストラルの聖導は。

瞬時に詠唱し、瞬時に精霊の恩恵を此程まで集めるとは……まだまだだな、俺は。

ハーフ様のあれは別格として、普通の人族でここまでの能力が得られるものなのか――――フェルナンドもミストラルも……敵じゃなくて本当に良かった。

もしミストラルがアニスに来ていなかったら、フェルナンドが来ていなかったら、今の俺はこんなに強くなれただろうか。

「おいおい。大事なお姫さまは何処だ」

「うるさい！ 今はそれどころじゃないだろう！」

一ええ……

いや、お姫さまの方が大事でしょうが。

アニスの姫とマティスの姫を両天秤にかけて、どうしてマティスが重くなる……

「それどころだろうが！ ルシファリア様はどこだ！ なぜ連れて来なかった！」

騒ぎを聞きつけて皆が近くに集まってきている。

「ご安心下さい。ウキファーリャ様は我々とは標が異なる。彼らは直接中央塔に紡がれていた。チェセライール公と共に中央に居られるだろう」

一なんだとお……

そんな話は聞いていない。

ハーフ様は俺を信じてくれないのか……聞かされていない事が多すぎる。

「リンス様が先に帰還されている。ルシファリア様を連れてヴァリアントへ来るよう命じられた。お前達が戻って、ルシファリア様が戻られないと俺の立場が悪くなる」



「そんな事は知っている。こっちも話したい事が有る。後にしろ」

な一んか頭に来るな。

「おい」

「なんだ」

「誰に向かって物を言っているんだ、レイナ伯……………その死に損ないとルシファリア様のどっちが大事なのかくらい分からないのか」

ここは公だ。二人きりの場所では無い。

「ルシファリア様を差し置いて生かすほどの者でも無いだろう。死んでしまうのなら捨て置け。その程度の代りなら幾らでも居る」

あっちはリンス様が戻られた代りにフェルナンドとアシュリーを失っている。

それでこちらはルシファリア様を失っている……と言う話ではないようだが、もしそうだったら俺の首一つでは済まされない所だった。

恐ろしい……

角が引っ込みそうだったぜ、全く。

あの時、中央塔に妙な雰囲気漂っていたのはハーフ様だったのか？

仮にそうだとしても、随分嫌な感じがした。

嫌な予感がして成らない。

やはりあの時、あの男を殺してでも中央まで行くべきだったのだろうか。

なぜだ——なぜハーフ様は俺にそれを教えて下さらなかった！

俺が待っていたのはこいつらじゃない！

「落ち着かれよ、レイナ候」

憤る俺の肩に軽く手を添えたのはキャンベルだった。

——凜然と俯瞰せよ

俺はその場を離れた。

その場はキャンベルに任せ、落ち着くまでの間、俺は奥で待機する事にした。

「何事ですか」

奥から小走りで様子を伺いに来たメツツエルダーはそのまま連れて行く。

「では王女殿下はどう為さるお積もりですか。もう一度中央を目指して出陣されますか」

「落ち着け」

—俺もな……

まずは落ち着いて考えよう。

その為にメツツエルダーを引き止めたのだから。

キャンベルと共に奴らが戻り、その報告を聴くまでは動くべきでは無いのだろう。

突然の出来事に当惑しては駄目だ。

将足る者、凜然と……しないとな。

暫くしてミストラルとフュリーを連れたキャンベルがやってきた。

右にメツツエルダー、左にキャンベルを置いて、俺が話を聞く。

場にはミストラルとフェリーを入れて五人のみ。

陰鬱な空気の中でミストラルが奉迎の報告を始めた。

魔族のようなニンゲンという種族として亜時空に潜んで居られたルシファリア様は、自己否定の末にその御姿を二つに分ち、方や我らを受け容れつつも、方や我らを受け容れられず、酷く抵抗成されたのだと言う。

分かれたままの殿下は中央塔で待つチェゼレーア公の許へ紡がれ、そこでルシファリア様へとお戻りになられる手筈となっていたようだ。

—そんな話は聞いていない

恐らくキャンベルやメツエルダーの手前、言えない事は隠しているのだろう。

ハーフ様はミストラルとフェルナンドの二人を懐に抱えている……そんな事を仰せだった。あの方の手足となっていたのは俺達だけじゃない筈だ。

奉迎に関わった六人全員と見てもおかしくないだろう。

報告の後、俺はミストラルを残して他を下げた。

「じゃあファが負傷したのはルシファリア様が抵抗されたからでは無いのか」

「はい。あれは反導印加の衝撃に耐えられなかっただけです。もちろん、あんな大規模な雅楽詠唱など行わなくても帰還は出来たのですが……殿下がそれをお望みになられた。寧ろ、抵抗に遭って負傷しているのは伯爵の方だ」

「ああ、あの負傷はそれか」

「お気づきであったのか」

「妙に左脇腹を庇っていたからな」

「概ね傷は塞がっている筈ですが……」

「見れば解るさ。昔からずっと見てきた。少しの異変でも気付くさ」

「なるほど」

「ルシファリア様が今中央にいる事は間違いないんだな」

「恐らく……としか言えません。ですが、私たちがこうして無事に帰還出来た事を考えれば、概ね問題なく中央に紡がれている筈だ。あちらは大姫が直々に紡いで居られる。私のそれよりも信頼性は有るだろう」

「帰還されたリンス様が俺と共にルシファリア様の謁見をお望みだ。出来ればあまりお待たせしたくない」

「大姫との連絡は取れないのか」

「ここに来て以来、全く音沙汰は無い。ここに向かえと言う指示を下さった時、閣下は「これが最後だ」と言われた」

「そうか……」

「よくぞ三人で帰ってきてくれた……お前には礼を言わなければならないな」

ミストラルが表情を落した。

—知っているのか？

「フェルナンドは帰還しなかった」

「存じております。我々の下には大姫が直接介入下さった。そこで全ての事情は聞いている」

「な、なんだと……」

「あの方は断空の禁忌を侵してまで我々とルシファリア様、そしてリンス様を御護り下さった…  
…ファウラー殿下には、お悔やみを申し上げる」

「やはりファウラーが死んでフェルナンドが残ったのか」

「……聞いて居られないのか？ 死んだのはフェルナンドだ。フェルナンドが緊急信号をファナティス様に発進された。それを受けて大姫が断空を侵されて奉迎に向かわれたのだ。大姫が向かわれた時はもう、フェルナンドが亜時空間結路を開いたまま死んでいたそうさ。その亜時空間結路を閉ざす為に、ファウラー殿下は一人残られた——閉ざすには反応炉を壊すしかないからだ」

一人残るなど、よく決断出来たものだ。

「大姫が一人で行けるのなら、お前達が行く必要も無かっただろうに……」

「実体の無い思念だけの状態ではどうする事も出来ないだろう。事実、ファウラー殿下には指示を出す事しか出来なかったと言って居られた」

「アシュリーのスプレッドはフィナンが持ち帰っているのか」

「そこまでは聞き及んでいない」

「そうか」

ハーフ様は一体どう成されると言うのか。

口振りから察してあの方も亡くなられる筈……しかしまだ生きて居られた。

チェゼレーア、レイナ、ファウラー、そしてマティスまでのダイヤは死んだ。レジスのアニー様や母上の消息は掴めていないが、テンペストロードのメリッサ様は討たれた。

行方自在の槍であるテンペストが失われる事は無いだろう。

インパクトは人知れず封印されたと聞いている。

メオラのフリーダムは言われた通り破碎した。

残るバスターはレイナのディメンジョン、ファウラーのスプレッド、マティスのセントラル、レーザー口のヴォルテージ。この四つだけだ。

俺の手元にはその内の三つが有る。

ハーフ様は四つを全て継承させろと仰せだった。

—スプレッドは何処だ！

そもそも継承者であるアシュリーに子はいない。妹のミラも討たれていた。他の誰がスプレッドを継………——まさか。

母上は先代のロード、ヘンリー殿の姉に当るファウラー宗家の嫡子——ばかな！

母上がスプレッドを継承なされるわけが無い。

そもそも、もしフィナンがスプレッドを持ち帰っていなかったら、その時は一体……いや、先見が違える事は無い。

こうなれば一刻も早くルシファリア様と共にヴァリアントへ赴いてフィナンに会わなければ。  
気が急いで仕方がない。

「フュリーはどうした」

居ても立ってもいられず、ファの様子を見に来ると、そこにフュリーの姿は無かった。

瀕死の重傷もミストラルのお陰で随分回復に向かっている。

—ここまで早く回復すると恐ろしいな……

「フュリー様はカプラーの所に向かわれました」

起き上がろうとするファを軽く制してそのままにさせた。

セントラルの継承はファの回復を待ってからにするか。

この状態のファにヴァージルの事を伝えるのは酷だろう。何より、使い物にならなくなって  
もらっては困る。貧弱とは言え他国の兵に比べればまだ信頼出来る騎士だ。

場合によってはカプラーの後釜として騎士団を束ねさせる事も出来るだろう。軍を束ねる指揮  
能力の高さは聞いている。ミストラルと共にこちら側の采司にはなれるだろう。

将は俺とフュリーで充分だ。

問題はこの先をどうやって逃げ切るか——だな。

ニヴァールまでが参戦する。

恐らく中部諸国の多くはヴァリアントやマージの指揮下に入るだろう。

メガリアとホンフォン、カノンがどう動いてくるのか……それら全てを敵に回して耐え凌げる  
のか？

—フルクレリアの全てを敵に回したか

俺は本当にこちら側で良かったのか？

「うげっ……」

人が真面目に国の事を考えていると言うのに！

いやー、実におぞましい。

一体何だあれは。

気色悪い事に、そこには何と女がいた。

勝手に立ち向かって、勝手に負傷したカプラーを蹴り飛ばしつつ、フュリーからも話を聞こう  
と思ったが……いや、これは近寄れる状況じゃねーな。

「暫く二人きりにさせてやろう」

「ミストラル……」

俺に悟られず背後に居やがった——と思ったら思念体か。

随分神妙な面持ちで俺を見る。

黙ってミストラルに促されるまま移動した。

「もし許されるならば、もう少し先に行きたい。出来れば、あの海岸辺りはどうか」

人の目を嫌うか……内密な話と言えれば思い当たるものが有り過ぎて見当がつかない。

「良いだろう」

面倒くさいからミストラルを抱えて全力で後翼疾翔して見た。

つかれた。

「だあっは、あー、だるっ！」

「な、何をされるのかと思ったぞ。一言くらい言ってくれ……びっくりする」

「あー、悪い。人目を気にしてたんだらう？ これなら気付かれても早々追いつかれはしないし、既にもう見失っているだらう。辺りに人の気配は無い」

「これが世に言う赤の武神の全力か……それとも——」

「全力だよ。人を抱えた上でのな。それで、何の話だ」

「あの将軍は誰にやられた」

—ああーあ、そういえば……

ナイリス人だったな。

「やっぱりお前の知り合いなのか」

「アニスの者では無いのだな」

違うのか？

「お前と同じ髪の色だ。喉と目を失っている。言葉は一方向的な伝心を使っていた。お前と同じ位の力はあるだろうな。外套の奥に小さな反応炉を隠し持っていた。あの時同時に召喚していた聖導は三つだったか……」

「名は、聞いていないのか」

「興味が無かったからな。それに特徴的だったから。あれだけの特徴があれば思い当たるだろうと思ってさ」

どうやら宛が外れたらしい。

「目と声を失った聖導師を知らないのか。お前よりも小柄で若い男だ。似たような首輪も付けていた」

「そんな男は知らない。恐らく私が離国して以降に勲位を得た聖導師なのだろう」

「追っ手か」

「私は追っ手を向けられるような事はしていない。確かにアニスに来てからはフェルナンドと共に共同研究を重ねてきたが、それとネージュは関係ない。もしそれを咎められると言うのなら、イムアレーからもフェルナンドに追っ手が来ている筈だ」

「その二人がアニスに居れば……」

「定石だろうな。相手方に与している者とは考え難い」

恐らくあの男はリヒター公と同じくイシュメル様に従っているのだらう。俺と戦う事を禁じられていると言っていた。そうなると追っ手じゃないか……

「レイナ候は中央で何が起きているのか、本当は存じて居られるのだらう」

「さあな」

「私は大姫から貴方に従えと言われた。王子や姫様では無く、貴方にだ……何が起きている。私たちも現状が知りたい」

「カプラーからは何処まで聞いている」

「話にならない。彼は命じられるまま動いていたらいつの間にか亡命していた——と」

「ふん。まあそうだろうな」

「アニスは滅ぼされたのか」

「王が崩御された。人魔に覚醒して自滅した——と言うのが正解かな。そのあと侵入者によってロード・ダイヤモンドの暗殺が起きた。それは既に片づいているが、その混乱の隙を突いて何者かが王都・中央を占拠し、その進入を拒んでいる。それが今のところの現状だ」

「……………」

黙って俺を見つめている。

まあ概ね俺の言っている事は理解しているだろう。

「王が人魔に覚醒したのと同時に魔族がわらわらと湧いて出てきてな。国中は大混乱だった。俺は東から北を經由して北と西の民を連れてここに来た。俺と一緒に東にいたランスにはパルス様の護衛と共にマージに向かわせた。南のカタルシアには国に戻って現状を報告してもらった——のは良いが、余計な事に救援を要請したようだ。そのせいでウィンディアが休戦協定までして関わりを持ってきた。これは想定外だ」

「フェネル、マージ、ヴァリアントの三国に分かたれたか……」

「いや、マージに逃げた連中はヴァリアントで合流したようだ」

「なるほど。ランス様はヴァレーリャで帰還成されたとか大姫が言っていたな……それに集ったわけか。我々も集うべきなのでは無いのか」

「だからルシファリア様を待っているんだ」

「……そうだったな。すまない。候が苛立って居られる理由を理解した」

「それで……ルシファリア様は黒き来訪者のあれなのか」

「二人に分かたれて居られた内の一人がミゾレだ。もう一人、アスカと共にチェセライル公の許へ向かわれた。分かたれた経緯も、再び一人の姫君として戻られる方法も、訊く事は出来なかった」

「じゃあ、あの姿じゃないんだな」

「雄を姫とは呼ばないだろう」

「ああ、そりゃあそうだよなあ……」

「レイナ候、王妃様はどうなされた。光の巫女と白い亡霊、青の剣聖も……この混乱は彼女たちの不在と関係があるのでは無いか」

—鋭いな……

「私は信用出来ないか」

「いや、そう言うわけじゃない。俺も大姫からは聞かされていない事が多いんだ」

「王の覚醒に合わせて魔族が湧いたのではなく、光の巫女の不在を発端にそうなったのでは無いかと思うが——違うか」

「いや、王の覚醒が先だった。あの時はまだ何事も無かった。その後暫くして城砦伝達網が途絶えた。光塔でカーンに何かがあったのだろうというのは理解出来た。結界が消えたからな。魔族

が湧いて出てきたのはその後だから、それはもう疑う余地も無い——ティスカーンが死ぬのは大姫から聞いて知っていた」

「フィスト様やヴォイス様と、王妃様は……」

「フィスト様も死んだ」

「ばかな！」

「そう言っていた。俺の目で見ただけじゃない。ただ、大姫が最後の伝達でそう言っていたんだ。王妃様はヴォイス様と共に聖門に向かわれた」

「聖門？」

「そこだよ。その真ん中辺りを聖門って言うんだ」

別に何も無いけどな……

「さっきから気になっていた。この海は一体何だ」

「聖門なんだろうな。詳しい事は知らない。俺が生まれる前からこの海だけはこんな感じなんだ。陸のように渡ってフェネルやウィンディアに行ける」

「氷では無いようだが……」

「ああ、溶ける事も砕ける事もない。まるで進入を拒んでいるかのようだ」

「その聖門には何が有るんだ」

「さあ。俺も何度か行って見た事はあるが何も無いぞ」

「そんな所へ王妃様がヴォイス様と共に赴かれて何を為て御出でなのだ」

「わからん。大姫の言う事だ。何か意味が有るのだろう。一応大姫の側近が待ち合わせているらしい」

「側近？ あのゼロという男か」

「そそ。あの嫌な奴。ああ見えてあの男、結構強いんだよ。心配は無いだろう。何か有れば近くにいる俺達がすぐにでも向かえる距離だ」

海を見て黙り込んでいる。

学聖の性とでもいうのか。気になる物をいつまでも眺めてはそれを知ろうとする。

「行って見るか」

微動だにしないミストラルを見ているのも飽きる。

「おい、どうする」

「そうだな……私が一人で行こう。直ぐに戻る。候は一度陣へ戻られよ」

—なんか様子がおかしいな

「どうした。この先に何か有るのか」

「いや、妙な胸騒ぎがする。この海は普通じゃない。少し確かめておきたい事が有る。何か解れば戻ってから報告しよう。先に戻って居てくれないか」

どうやら俺は邪魔の様だ。俺が居ては気が散って考え事も捗らないのだろう。

「わかった。だけどあまり長くなるなよ。お前の力が借りられるのならいつでも借りたい状況なんだ」

「了解した」

陣に戻るとルシファリア様がフュリーと共にそこにいた。

何と、スプレッドはルシファリア様が持って居られた。

—どういふ事だ！？

ミストラルは戻ってこなかった。



未熟な私には不相応な褒賜だった。

私は剣聖号を得て、ケードの霊剣・雷霆を賜った。

喜びに浮かれても良い褒賜だが、私は自分が携える剣が何であろうと構わないと思っている。

腕が立てば鈍らでも十分な戦果を挙げる事が出来るものだ。

扱う剣が素晴らしくても、半端な腕では大した戦功も得られはしない。

剣は所詮道具に過ぎない。

要は己がその剣に相応しい剣士であるか否かだ。

私にとって、剣など.....マータ以外の剣など、戦果を齎す為の道具に過ぎない。

マータは私を選ばなかった。

マータは兄上を継承者に選んだ。

だからマータは兄上が受け継がれるもの。

私は.....選ばれなかった私は、望む事さえ許されない。

玉座に就こうなどと恐れ多い事は心に無い。

でも、私はマータに魅せられていた。

いや、尊大なる父上様に、その父上様が振るわれるマータに、私は心を奪われていた。

インペリアル・マータ・メガリア-----それが私の生まれた国。

魔剣と剣聖の国メガリア。

黒紫の至宝と謳われる唯一無二の極燐剣は歴代皇帝がその命を捧げ、剣魔将となって君臨する事を許される国璽。

その剣には歴代の皇帝が宿ると言われている。故にマータは皇帝専用の剣なのだ。

メガリアはマータが主と認めた者だけが君臨を許される国。

私は選ばれなかった。いや、選ばれる筈は無かった。そんな事は初めから解っている。

巫女様から賜った雷霆も決して鈍らでは無い。

何処で知ったのか、私が苦手とする魔導や聖導を弾く霊剣だ。

反鏡環という全く同じ能をもった装身具まで賜った。

一相手は魔導や聖導だと言うのか

だとしたら、その名に覚えの在るマジークか。

マジークは最近中部諸国を手中に収めようとしているのでは無いか.....そんな噂を耳にする。

カルマ王は聡明な方だと聞いた。

敵に回せば悔る事など到底出来ない方なのだそうだ。

腕の立つ騎士でも、名の知れた導師でもない。

戦士として名を轟かせる英雄王ではなかった。

本当に恐ろしいのはヴァリアントやセイレーンの軍事力よりも、マジーク王の頭脳だと父上が仰せだった。

フルクレイリア中部の要は西のメガリア、ホンフォンと、東のニヴァール、カノンだ。それより内は小国ばかりが犇めいている。概ね東の半分はトキワやライセーから独立した国ばかり。

ヴァリアントやマジークの手にかかれば容易く落ちるだろう。

だが我らメガリアがそう易々とヴァリアントやマジークの手に落ちてなるものか。

メガリアは二四代、国内外で様々な戦の経験をしてきたが、これまで一度として関わった戦に負けた事は無い。

メガリアは無駄に国土を求めて戦はしない。

他国からの要請で戦の支援を行う事はある。

だからメガリアは平時でも軍事力を損なわず、国力の低下には至らない。

他国からも一目置かれる軍事強国だ。

確かに大国じゃない。

けれども、国土が小さいからと言って弱小国というわけじゃない。

それは東のニヴァールもそうだ。

アニスやセイレーンのように国土が大きければ良いと言うものじゃない。

――そんなメガリアが落ちると言うのだ

これほど現実味の無い話は今まで聞いた事が無い。馬鹿げた話だ。

今、私たちは東の要、カノン王国の聖地・神威に居る。

神威の巫女は中部諸国の壊滅を予見した。

これで二度目だ。

一度目はウィンディアの魔女が大陸中部を跨いでマジークと大戦を繰り広げた時に起こった。

マジークに加勢した中部諸国の国土は蹂躪され、マジークは中部諸国を盾にしてウィンディアに勝ったのだと聞く。

その時の戦で生き残った国が、今のメガリア、ホンフォン、カノン、ニヴァールだ。

四国とも全て建国間も無い頃だ。

メガリアは二代目だったが、ホンフォンとニヴァールは初代皇帝。

不死鳥の軍勢を率いる双剣の炎帝、ホン・ロンツが西の英雄として語られている。鳳の軍勢を率いる紅の王と言え、ホンフォンの国名の由来ともなった有名な話だ。

ニヴァールは神眼の魔導師、ルー・ヴァンクール・ホリゾンが帝国を築き上げて挑んだ。故にニヴァールは建国以来、守る為の軍事力しか持たないと言われ、今も『神威の剣』と言われて

いる。

東西の英雄が嵐の魔女に立ちはだかり、マジークの女神を守った戦いは中部地方を壊滅的に滅ぼして終わった。

たった一人の魔女の槍が大陸中部を蹂躪したその伝説は誰もが知っている。

先日、その魔女が目を覚ました。

魔女を永い眠りの底に就かせたのはマジークの女神だと言われているが、その時力を使い果たした女神はマジークでその生涯を了えている。

神威ではその伝説を『神々の戯れ』と呼んでいた。

ウィンディアを南北に分断する大国、セイレーンとウィリンド。

魔女が眠りに就いた原因はウィリンドの裏切りとも言われている。

同盟国としてセイレーンと共に戦ったウィリンドとの仲は、魔女が眠りに就くのと前後して一転し、長く敵対関係に在った。

その両国が再び和平を結び、ヴァリアントに呼応して戦支度を始めていると言う。

魔女が目を覚ました事に前後して、両国の関係が改善したと言うのは話が出来過ぎている。魔女が関わっている事は私にでも理解出来る話だった。

しかし今回手を結んだヴァリアントが戦を起こしている相手はアニスだ。

アニスが滅ぼされ、宗主国であるヴァリアントに救援を願い出た事から始まった戦だと聞いている。

我々中部諸国には一切関係の無い話だ。

アニスと同じくヴァリアントを宗主国とするマジークも当然、この戦には加わっている。

表向きはアニスへの救済だが、このフルクレイリアの何処を探せばアニスを救ってやろうと思う国が在ると言うのか。

アニスの滅亡は我々フルクレイリアの諸国にとっては大願の成就にも等しい話。それをわざわざ救ってやろうなどと、誰が思うものか。

これまでの横暴を精算する時が来たのだ。

おそらくアニスは解体され、多くはヴァリアントやウィンディアの支配下に置かれる事になるであろう。

この戦は滅ぼされたアニスの国土を奪い合うための侵略戦争だ。

我々メガリアの出る幕では無い。

寧ろあのアニスの残党を相手に消耗し、疲弊してくれた方が世の為だ。

メガリアの兵は愛する国土を護る為の力。

メガリアの全ての剣は、尊大なるマータの為にこそ振るわれる力。

アニスなどに構う力など端から持ち合わせてはいない。

しかし神威の巫女は、この戦がフルクレイリア全土を巻き込むものになるのだと言う。

どう考えたらそんな話になるのか。

北と南の欲望に巻き込まれ、いつも割を食うのは我々中部諸国ではないか！

――我々は動かない

そんな無益な戦いに興じる暇は無い。

だが、もし我らが愛するメガリアの国土が蹂躪されると言うのなら、それを黙って見過ごす我らでは無い。メガリアへの敵意はメガリアの剣の錆にして返してくれる。

尊大なる我が父、エドワードと母ミシエルの第四子、三人目の娘として私は生まれた。

末子だが、だからといって寵愛されているとは思っていない。

父上も姉上も、私に厳しくして下さる。

兄上だけは私に優しくして下さるが、私はそんな兄上の優しさが嫌いだ。

アイリーン様は武に疎んじて居られるが、聡明なお方だ。姉上だが、姉上とはお呼びしていない。

ステフ姉様は剣では無いが、魔導に長けて居られる。皆は姉様の事をストームとお呼びしている。よく稽古の相手をして下さるが、いつもあの魔導にやられる。

自由騎士勲章・剣聖を受勲しても未だ、ステフ姉様に近付けた事は無い。

ホンフォンの皇帝には遠く及ばない――――

隣国・ホンフォンのリン様は刹那でその間合いを詰められる。

一度だけ手合わせを頂いた皇太子ミンユエ様も素晴らしい剣士だった。迅速な居合術では無かったが、振り下ろされる斬撃はまるで槍や斧のようだった。

私は剣の事しか分からない。

幼い頃に見た父上の演舞が脳裏に焼き付いて離れないのだ。

私は父上のような剣士になりたかった。

私は……あの時の父上になりたかった。

だからこそ私は、剣では誰にも負けたくないのだ。

剣聖の国の皇女として、剣魔将メガリアの末娘として、国に、そして民に恥じぬ剣士でありたい。

――剣こそ我が全て！

「もうすこし皇女らしくしてても良いんじゃないか、エレン」

嫌いだ、この男は。

「だまれ！次代の剣魔将である貴様にだけは言われたく無い」

「だったらお前が継げば良いさ……正直、僕には荷が重過ぎる」

嫌いだ！ お前は――

嫉妬だと解っている。

私は兄上に嫉妬しているのだと……解っている、そんな事は。

私が欲しくても決して手に入れられないものを、マータを軽々しくも手放そうとする！

なぜこいつにはマータの威厳が解らないのか。

尊大で、雄大で、神聖なる我らがメガリアの至宝――――剣魔将に選ばれて……何故だ！

悔しい。

悔しい！

「そんな力任せに剣を振り回したら隙だらけだ」

「うるさい！」

剣聖号も持たない未熟なこいつに……どうしてこいつからは一本が取れない！

「雑念だらけだ」

「うるさい！ うるさい！」

涙で前が見えない。

悲しいんじゃない。

悔しいんだ！

「エレン……お前は姉上やステファニーよりも綺麗なんだから、もう少しステファニーみたいに華美な装いでもすれば良いのに。もったいないよ」

「何処までも私を侮辱してくれる！」

「侮辱じゃないだろう。お前は剣を振り回すよりも舞いを踊っている方が似合うって言ってるんだ」

「だまれ！」

「なあエレン」

「黙れ黙れ黙れ！」

「何をそんなに死に急ぐ——」

「な……なんだと」

「お前には幸せになって欲しいだけだよ、僕は」

あの時言った兄上の言葉だけが、不可解にも胸に残っている。

私は死に急いでなど居ない……はずだ。

意味が解らなかった。

「兄上に弄ばれたか」

ステフ姉様はそう言って私を笑う。

「兄上は私たち三人が持っていないものを持って居られる」

私には理解出来ない。それは私が未だ子供だからだろうか。

でも剣聖号は得た。私は剣士の頂点たる称号を得た。

「姉上も私も、そしてお前も。私たちには兄上のようなお優しい心が無いのだそうだ」

ステフ姉様はそう言っていつも母上にお叱りを受けるのだと言った。

確かに私も母上はあまり好きではない。

ホンフォンのシンリ様やオースのシラン様はその名を剣で知らしめるというのに、母上はただの聖導師だ。そのお力は凄いのだと聞くが、聖導師が戦の何に役立つのか。

父上様はどうしてあんな気持ち悪い女を伴侶になど為さったのか。

「父上様、父上様だな、お前は。そうか、お前は母上に妬いておるのか……何なら父上の妾にでもなるか、エレン」

「な、何を馬鹿な！ 戯れるにも過ぎますぞ、姉様」

「すまない。そう怒るな。戯れるのは私の得意だからな。私は姉上やお前ほどお堅くはなれん」  
アイリーン様とステフ姉様は仲が悪い。それは人柄が真逆だからだとアイリーン様は仰せだった。

ステフ姉様は不真面目で粗野な面がある。私もそれには時々我慢出来ない事があった。  
しかし姉様はお優しい方だ。母上が優しくないと言うのは間違っている。何も分っていない。  
姉様は戦場を広く見渡して戦況を把握し、適時行動を変えられる。ただ攻めるだけではなく、状況によっては兵たちを守り、退く時も兵たちに被害が出ないように、敵を圧倒する。

私には兵たちの事まで考えて動けるような視野は無い。

私はただ、目の前の敵を消す事だけしか考えられない。

自分の事は自分で何とかすればいい。自分で何とか出来なければ命を落すだけだ。人の事など構ってやるほど、私は優しくない。

しかし、だからといって我が身可愛さに他人を盾にして逃げ惑うような卑怯者では在りたくない。

自分の科を他人のせいにするなど言語道断・万死に値する。

ステフ姉様は時々自分の失敗を私たちに押し付けて逃げる事がある。それに対して剣を抜いた事までは無いが.....そんな姉様が時々嫌いだ。

でも、姉様の兵士を思う気持ちは解らなくは無い。

私は剣の事しか知らない。

難しい事は何も学んでいない。

だから、国の事は全く分らない。

時々、アイリーン様とステフ姉様が喧嘩を為さっているが、私にはどちらが正しいのか分らない。

「厳密に何もかもを縛りつけてやることはないだろう。何事も遊びは必要だ。そんなに雁字搦めじゃ臆病にもなるさ。それが結果として失敗を生む事にもなるだろう」

「無責任な振舞いを巧く飾り立てて美化しないで」

「責任を負う事は大事だけどねえ、私たちだって完璧じゃない。失敗は誰だってするものだ。それをいちいち細かく指摘されたら嫌にもなるわ」

「その失敗でどれだけの損害が出ているのか。それはしっかり割り出した上で正当な責任を果たしてもらわないと割に合わないわ」

「一つ良い事を教えてやろう。そんなに失敗を恐れているのなら、確実に失敗しない方法があるよ」

「何もしない事.....と、言いたいのでしょうか」

「ご名答」

「ふざけないで！何も為なければそれだけでも損害だわ」

「話にならないな。姉上にとって私たち兵士はさぞ無益な害獣に見えるのでしょうか。こちとら命懸けてるんだよ！お前が安心して暮らせる環境を守る為にな。大層な物言いで偉そうな事が言えるのも命あっての物種だろうが！」

「だからといって、民が齎してくれる財は無限じゃないわ。貴女達兵士はそれを何食わぬ顔でただ消費しているけれども、一体その一つ一つにどれだけの民の労力が係っていると思っているの。本当にそれに見合うだけの戦果を挙げられているのかしら。そこはしっかり把握してもらいたいわね」

ステフ姉様の言う事はよく分る。

私たち兵は、民が安心して暮らせる環境を守る為に存在する。時としてそれは命懸けだ。それ故に、それなりの優遇は認められている。

私たちの使う剣や甲冑、服に至るまで。それは全て無条件で国から支給される。

都で暮らす民たちは自分の着る服や住まう家などは自分で作らなければならない。

私たち兵はそれらを国から無償で受け取っているが、それらは全て民が作ってくれたものだ。

アイリーン様が仰って居られるのは、そうした支給物をもっと大切に扱って欲しいと言う事だろうか。

しかし、戦とはそんな事を考えていられるほど甘いものではない。ステフ姉様が言うように、戦っている我々は、正に命を懸けている。相手を殺さなければ自分が死ぬのだ。そんな状況で備品を大切に扱おうなどと悠長な事は考えられない。

我々は民から齎されたそれらによって生かされている国の盾なのだとアイリーン様は言う。

剣を使い始めて間も無い頃、鍛練と演習で一日に二振りの剣を折った事があった。アイリーン様には酷くお叱りを受けた。

その翌日、付き添いを命じられてアイリーン様と共に城下へ降った。民がどのようにして剣を拵えているのか——それを私に見せたかったようだ。

「お前が簡単に壊した剣は、民がこんなに精を出して拵えた物なのだ。民たちへの労いはお前達兵士の戦果で報いてもらっているが、ろくな戦果も挙げられないで無闇矢鱈に壊しては、彼らにも顔が向けられまい」

私は民たちの労を知らなかった。

「折れるような剣を拵えた私たちが悪い」

民たちはそう言うが、罪悪感を感じずにはいられなかった。

この世に壊れない物はないだろう。だが、それをどのように扱うか——そう考えるだけで無駄に壊れる物は無くなるのだと教えられた。

作られた物には、それを作った者たちへの感謝をしなければならない事——

壊してしまったのなら、その行いを恥じる事——

資材は有限である事——

享受する側はそう言った事を知っておかなければならない。

「与えられる事を当たり前だと感じたら国は滅びてしまうのよ」

私は感銘を受けた。アイリーン様が神々しくも見えた。

しかし、壊れる事を恐れて剣は扱えない。

相手の武具を壊す事も戦術の一つだ。

戦場では容赦なく襲いかかってくるそれらを躲し続ける事は不可能だ。

「物に頼る事なく、鍛練を怠らず、己自身を磨くのだ」

本当の兵ならば、己自身の強さで武具の脆さを補えるのだと父上は仰った。

「例え自分の剣が鈍らであっても、名剣を叩き壊してしまえる程の強さを身に付けよ」

真の剣聖ならどんな剣を使っても決して負けない——私もいつかはそんな境地に辿り着きたい

。

「それは極論だ」

ステフ姉様はそう言った。

「ならばナイフでマータを破壊して見ろ。出来ないだろう？ 何事にも限界はある。作られた物は、それを使う限り、必ず消耗し、疲弊し、いつかは壊れるものだ。もちろん、大切に扱う為に様々な努力は怠らない。毀れた刃は研げば良いだろう。だが折れてしまっただけでは直しようが無い。壊れないものは無いんだ。いつかは壊れる」

「でも父上様は、強くなれば壊さないと仰って居られた」

「それは壊れ難いと仰せなのだ。何でも直ぐに壊れてしまうようには作られていない。しかし使う物は必ず使った分だけ脆くなって行くのだ。生きている全ての命が、生まれてから成長し、そして老いて朽ち果てるのと同じだ。剣であろうが槍であろうが、使った分だけ朽ちる。それを朽ちないように扱うにはそれなりの修練が必要なのだろう。陛下はそう仰せなんだ」

ステフ姉様の言う事は難しく分らなかった。

姉様は剣が生きていると思って御出でなのだろうか。剣も歳を取るのだと……成長して老いるものだとお考えなのか。

私には理解出来なかった。

神音から帰国して暫く、神威で言われたような惨事が起こるなど微塵も感じない平穏が続いた

。

兵たちには臨戦態勢を整えさせ、それが民草に不安を与えていたのは確かだ。

でも、何事も無かった……

「お前に魔剣は使えまい。これを持って行け。私には不要だ」

剣聖となった私には剣など何でも良かった。

「アイリーン様をこれで守れ。姉上の煉獄と合わせればお前でも大聖導が扱えるだろう」

アクランドの無駄な努力はこの時のためだったのだろうか……

マータが眠りに就いた。

それは何の前触れも無かった。

何が起きたのか、一瞬では理解出来なかった。

しかし母上や兄上、アイリーン様はずっとずっと以前から、存じて居られたようだった。

メガリアの国璽、魔剣マータは眠りに就いた。



玉座に御座す剣帝陛下は崩御された。

まるでそれを知っていたかのように、大規模な侵略がメガリアの大地を穢す。

それはまるで予め決まっていた事のように、崩御されたその日に、我がメガリアは穢された。

アイリーン様と新たな剣帝には亡命して頂く。

まるで侵略される事が予め分かっていたかのように、準備は整えられていた。

それはまるで、我がメガリアが侵略に屈する事が決まっているかのように――――

マータに選ばれた剣帝こそがメガリアの主君である限り、メガリアは決して滅びはしない。

不滅の国――人はメガリアをそう呼ぶ。

魔剣マータは眠りに就いた。

第二五代・継承者、バールクリスティはその命をマータに捧げなかった……

魔剣は父、エドワードの治世に終焉を告げた。

だが、新たに継承する筈のバールには治世を認めなかった。

それが一体、何を意味するのか解らない。

だが、マータに認められなかった主君を皇帝陛下と呼ぶには能わない。

マータはこのメガリアの治世に終焉を告げたのだ。

この国に主君は要らない……まるでそう告げるかのように。

民を統べる者がいなければ、それは最早国では無い。

最終皇帝となられた父上様は崩御された。

――私は全てを失った――――

惑う事など何も無い。

失う物などもう何も無い。

恐れる事も、喜べる事も、もう、何もかも無くなった。

私は剣魔将メガリアの末娘。

私は最期の騎士となり、最後の人柱となろう。

アイリーン様と剣帝の亡命する時間を稼がねばならない。

私は国と共に在り、国と共に滅ぶ。

最期までこの国の剣士として、この国の為に戦う。

麗しき我がサイレンスに阿鼻叫喚が木霊する。

愛おしき我がメガリアの大地が血塗られてゆく。

須く排除しよう。

蹂躪される我が国土をこれ以上黙って見ている事など出来ない。

それは私の身体を無下に傷つけられているようで堪らなかった。

我が剣と我が命はメガリアのもの。

私はこの国に全てを捧げた。

滅ぶのなら共に逝こう……

『何をそんなに死に急ぐ』

ああ、私は死のう。

この国は私の全て。

この国は私の命も同然だ。

共に逝こう。

お前一人を死なせはしないぞ、メガリア————

生き延びたい奴は勝手に生き延びれば良い。

だが、私はここまで侮辱されて生き恥を晒したいとは思わない。

美しい我が国に、愛おしい我が国土に、あんな粗野な蛮人が蔓延って良いわけが無い。

「蹂躪された分を倍にして蹂躪仕返してやるぞ！ 私に続け！ 相手が子供であろうと容赦なく  
消し飛ばせ！ 一塊の肉片も、一滴の血飛沫も遺さず我が国から消し飛ばしてくれるぞ！！」

我が大地に足を踏み入れた事を後悔させてやる！

我がメガリアに刃を向けた国がどういう末路を辿るのか。思い知るが良い。

ミンファ如きが分際を弁えずによくも……よくも我が国に刃を向けられたものだ。

一人たりとも私の後ろには立たせん！

メガリアの陥落は確かに神威の巫女の言う通り訪れる結果になった。

だが、それがミンファのような浅ましい国によってなど有り得るか！

我らが麗しき帝都サイレンスに、こんな土臭い泥細工のような鈍らが存在されて堪るか！

「どうだ、プリンセス・エレン。気持ち良いだろう」

剣が私の胸を貫いている……………きもち……いい……………

我がメガリアが終わる。

父上が崩御される事は初めから知っていたのだろう。

亡命する兄上と姉上の手筈が整い過ぎだ。

「これを持って行け、アクランド。能力を底上げ出来る。これで兄上や姉上を守れ。良いな」

アニスは魔族が多い国だと聞いた。魔族は魔導の能力が高い。

私の煉獄環は魔導も聖導も増幅させる。

エレンが持たせた反鏡環と共に用いれば、未熟なアクランドでもそれなりの対応が出来る筈だ

。

兄上専従の下女がどうして母上から聖導の施しを受けていたのか――これで腑に落ちた。

聖導の見込みがあったアクランドが兄上の専従として現れたのは、まだ幼い頃だった。エレンよりも幼い子供をなぜ兄上に就けるのか――それも疑問だったが、アクランドはただの下女だ。貴族仕官の娘ならともかく、聖導を扱う能に長けていたと言うだけで、どうしてここまで厚遇されているのか……

――全てはこの時のためか！

母上は全て知って居られたと言う事か。

屍と共に横たわる母上が玉座の陸に鮮血を滴らせる。

姉上も兄上も、エレンもまだこの事は知らない。ここには私だけしか居ない。

私は玉座の間を後にして固くその扉を閉ざした。魔導結界と空間閉鎖を合わせて使っておけば誰も立ち入る事は無いだろう。

私が最後の将となろう。

「インペリアルガードはこれより私の下に就け！ 全軍、総指揮は私が執る。玉座を守れ！」

帝の居ない玉座など守っても仕方がない。

この扉の奥に居られるのは只の屍……マータは兄上に継承された。

だがそれで良い――敵は堅く守られたこの玉座を狙って進軍してくる筈だ。

アクランドが碎間を構築するまでの間で良い。その時間を稼がねばならない。

崇高な父上と偉大なる母上。聡明な姉上の下に兄上と私は生まれた。

眩しかった。

見上げてても手の届く所には居られなかった。

そんな眩い光の下で、輝けない私と兄上は埋もれるしかなかった。

そんな私に兄上は手を差し伸べてくれた。

兄上の未熟な振りは私にとって都合が良かった。

剣術の才では末のエレンに抜かれ、学識において姉上には決して及びはしない。

それでも剣を捨てて魔導に逃げた私とは違い、兄上は剣を握り続けた。

兄上は初めから継承者だったのだろうか。

歴代皇帝が全て男帝だったわけじゃない。そしてそれは嫡子でも無かった。

全てはマータが決める事……マータの主である父上は何かを感じ取って居られたのかも知れない。

国と共に死ぬ事を選んだ私とエレンに、兄上は最後まで泣き叫んで居られた。

兄上を選んだマータは一体、何処の何になろうと言うのだろうか……

魔剣マータが歴代の皇帝を見定める国。それがメガリアだ。

メガリアは魔剣に君臨する事を許された者しか治められない国。

マータは兄上を選んだが、君臨は認めなかった。

君臨を許された皇帝はマータにその命を捧げる。

マータの意に背けば皇帝は即座に屍となる。

歴代皇帝はマータの傀儡として生かされた、皇帝と言う名の器に過ぎない。

しかし今、マータは父上を屍に帰し、兄上に継承されはしたが、兄上の命を奪わなかった。

兄上がマータに選ばれた継承者であり、次期皇帝である事は揺るがない。

ではなぜマータは兄上を皇帝としなかったのか……

ああ、メガリアは滅びるのだろう。

滅びとは即ち築き上げた全てが失われる事。

マータが君臨を許す筈の国土が失われる……マータの意思はそれを示唆しているのだろう。

では兄上を継承者としたマータは何を考えているのか。

もしメガリアが滅び、父上を最終皇帝とされるのなら、兄上に継承される必要は無かった筈だ。

それがどうして継承されたのか。

我がメガリアと共に、今正に滅びようとしているアニスに亡命する事で、マータは新天地を得るつもりなのか。

亡命とは本来、敵国に逃げるものだ。

ではアニス是我らの敵の敵なのか？

アニスの滅びとメガリアの滅びは連動しているのか？

神音の巫は「大陸全土を巻き込む」と仰せだった。

アニスに亡命するのは母上の計らいであると聞いた。

大陸にも名高い白はアニス王妃リリーナ・チェゼレーアと神音の巫、キリノ＝コウハウイン・ミズノミナトヒメ。あとはテラーの現国王オリヴァー・フェラーと、我が母ミシェル・クリステ

ィの四名。

母上は何度かアニスの光塔に赴いている。

護衛として私も何度か行った事がある。残念ながら塔の中に入る事は出来なかったが.....

母上を待つ間、精霊族のフィスト様には色々と手解きを受けた。

赤の武神をこの目で見た時は恐怖すら覚えた。彼には私の事など映ってはいないようだったが.....アニス王国が噂以上の国である事は、知っているつもりだ。

あんな場所に、しかも滅びて混乱の渦中にあると言うあの国に亡命するのだ。

煉獄環は私の護身よりも兄上や姉上を守る為にアクランドに使わせるべきだ。私の判断は、間違っていない筈だ。

「逃げろ、ストーム。あれに乱されたお前は見たくない」

エレンが討たれた。

敵はミンファであると判明した。

兵を無力化する魔導を使うと言う。厄介な事に女は発情までしてしまうようだ。

最近抑制したのはいつだったか.....もう暫くは施していなかった。

神音の巫から賜った反鏡環と雷霆は、この魔導に抵抗させる為の物であったのだろうか.....では私の煉獄環は一体何をさせる為の物であったのか。

――吹き飛ばせたのか

ではミンファが使ってくると言う妙な魔導は火術か風術、もしくはその合成術かだ。

皆が命の華を散らせる中、私一人がおめおめと逃げられるものか。

エレンは立派に人柱として散った。

私も人柱になろう。

だが、私も馬鹿じゃない。

玉座は死守させてもらう。

そして、我がメガリアを穢した者共にも、相応の報いは受けてもらおうか。

唯では死なんぞ！

フィスト様には感謝する。

煉獄環を手放して後悔する所であった。

――これで良い

化け物共の巣窟.....アニス王国で学んだ英知、試させてもらうぞ！

「我が名はストーム。真なる名はステファニー・クリスティ。

我が親愛なる精霊達に請う。

我が魔導の渾を捧げ、我が命を捧ぐ。

永遠の時を大地に捧げ、永久の眠りを大地に捧ぐ。

代償は我が渾。

補い得る渾を以て恒常の舞いを吹き曝せ。我に仇成す全てを大地へ帰す――」

天から降る嵐舞を召すが良い。

フィナの燐石から作り上げたワイザーの増幅反応炉。その範囲は城一つを覆い尽くせるまでに

修練した。

だが、もうそんな広範囲は要らない。

私の背後——この一室を護る事が出来れば良い。

フィナの求める代償に自分の身体と命を使う事は予め想定していた通りだ。

「風戈招来——」

槍に串刺しにされた裸のエレンが居る。

然も手柄だと言わんばかりに、それを掲げる。

思い知れ。

これがメガリア最後の怒り————

「——複合大魔導輪・降天」

不可解な事は随分前から起き始めていた。

沿岸の民の様子がおかしいのだと言う。

暮れ時になると山からの吹き下ろしで強い西風が吹く。この時期は暖かくなり始める頃合いから、花の魁と呼ばれる突風がしばしば吹き荒ぶ。

花の咲き始める季節を告げる、先駆けの風。民たちには一つの風物詩だ。

宴の季節に羽目を外す事も多少は見過ごそう。しかし今年のそれは様子がおかしい。

沿岸の民とは野山の繊維から織物を拵える事に長けて居り、潮風を利用した干し染めの鮮やかさは他国にも讃えられる逸品である。

玉璽の仕官も好んでそれらを羽織るものだ。

私は川梳きの織物が好きで干し染めの下には川梳きだと思っている。夏の暑い時期には川梳きに限る。

繊細で肌触りの良い梳き織物に比べて、生地が強く寒さを凌ぐ事が出来る干し織物は多様に染め上がり、一つとして同じ物は無いが、物によっては大変美しい色合いに仕上がる。

華美な暮らしをする玉璽の者共は、買い付けによく訪れるのだと言う。

騒がしくなったのは、そんな魁の折――

「一度ご見聞なさいませ」

民は口々にそう言うが、側近たちは断固としてそれを退けている。

憤る周辺の民からの苦情で出向いた衛士の報告は二通り。

一つは「何とも面妖な民草の戯れ」だと罵り、一つは「楽土なる愉悅の境地」だと讃える。

前者は「退墮に劣る愚民の群れ」「二度と見たくは無い」のだと言うが、後者は戻る事もなく、そのまま沙汰が切れている。

出向いた衛士は三度にわたり、数十名が赴いているそうだが、例外なくそのどちらかになるのだと言うからおかしい話だ。

「確かに一度この目で確かめておいた方が良いのかも知れぬ」

私がそう言えば「なりませぬ！」と憤怒の面で四方八方から責め立てられた。

「もしそれで澄麗様までお戻りになられぬ様な事態になりましたら、我ら全員刎頸に処されます」

だが、恐らく戻らぬ事態にはならないだろう。

よくよく報告に目を通し、それらを見比べてみれば、自ずと見えてくるもう一つの特異点が見つかる。

一男は戻るが、女は戻らない……

沙汰無く、行方を眩ました衛士の全てが女だった。そしてそれらを「楽土」だとする男も一人としていない事に気が付くだろう。

そうと解れば恐るるに足らず――――

「そりゃあ駄目で御座いましょう……」

「お前にまで反対されるとは思わなかったぞ」

「誰でも反対するわな」

「何故だ」

「あのなあ……お前も少しは自分の立場ってものを自覚しろよ。皇太子だぜ？ お前より強い者が皇后陛下をおいて他にはいないと言うのに、誰がお前の護衛をするんだよ」

「自分の身は自分で守れるさ」

「もしお前より強い奴が現れて、お前の命を狙ってきたらどうする。何千人の衛士を犠牲に守られる気だ？」

「そんな犠牲を出すのなら俺一人が討たれば良からう。それで数千人の民の命が救えるのなら本望では無いか」

「はあ……馬鹿野郎。それは衛士が口にする言葉だ。皇族たるお前が言って良い言葉じゃない」

「そうか……」

「そうだ。ここまで説明しなくても解ってくれよ……」

「解った。お忍びで行けば良いのだな」

「だあー、何言ってやがる！」

「いてっ――何も頭を打つ事は無いだろう」

「だめだっつーの！」

「駄目なのか？」

「お前なあ、自分が皇太子だって言う自覚が無さ過ぎなんだよ」

「自覚しているつもりだがな……」

「いいか。絶対に一人では行くなよ」

「そうか……そう言う事か」

「ん？」

「一緒に行きたいのなら素直にそう言ってくれば良いでは無いか、響雲」

「へ……」

「私たちはいつでも一緒だと約束したものな」

「いやいやいやいや、まてまてまてまて……」

結局あの時は止められて見聞するには至らなかったが、その後久しぶりに再会すると、どうやら私に代わって沿岸の村々を見聞していたようだった。

しかし私にはその言葉が信じられなかった。

「今すぐ玉璽殿へお帰り下さい。そして今すぐにでも戦の準備を整えて下さい。敵が攻めてきます……いや、もう戦は始まっているのかも知れない。もうここに来るのもこれで最後に為さいませ」



何者かも解らない異国の民が沿岸から北上し、岩水、岐山、そしてこの尾台までの侵入を許しているのだと言う。

侵入を許した岩水や岐山の一部では既に民が毒や病に冒されており、平常な人族は存在しない。

それは全て異国の異人の仕業で、煙を使った妙な術法を用いて人心を惑わせているのでは無いかと言うのだ。

ここに来るまでこれと言って何事も無く、いつも通り賑やかで穏やかな町を散策してきた。

特に変わった様子など微塵も感じられないし、そんな噂も一切聞こえては来なかった。

響雲は下町で出会った私の師範のような男だ。剣の腕もそれなりに有り、身のこなしも私より身軽で、樹木生い茂る深い森の中でさえ自由闊達に動き回れる凄い男だ。

一人の護衛も付けず、お忍びで玉璽殿を離れていた時に声をかけられた。

「そんな振舞いでは皇族か、それに近い貴族にしか見えませんよ」

響雲は尾台の民で、通り名を知恵蔵と言う。

名の通り、民に知恵を授け、助ける代りに褒美を貰い受け、それを生業にしている。

私はお忍びを気付かれないように行う為の知恵を幾らか授かり、その褒美として宮廷抜刀術を教えた。

無論、極意や秘伝とされる技は伝授しない。

だが彼の恐ろしい所は、一度教えただけでその弱点を見抜き、更にその対応法まで編み出した事だ。これには私も敬服した。

「私の剣術指南役として玉璽に来ないか」

褒美のつもりだったがそれは断られた。その代わりとして無礼講を許している。

だが今にして思えば、この男こそが本当の友と呼べるべき存在なのだろう。

私がそう思ってしまうのも、彼の知恵によって、ただそう思わされているだけなのだろうか。

彼を信じている積もりだ。

だがしかしどうして、彼の言う言葉の危機感だけは私には信じられなかった。

友として信頼を寄せている筈の彼の言葉を、私は疑ってしまった――

あれから暫く、玉璽の外へは出ていない。

だが仕官達から話を聞く限り、特に変わった様子は無いと言うのだ。私もそれを疑わなかった。

沿岸部の様子もあれ以来酷くなるような事態にはなっていないようで、玉璽を囲む澄原、台山、尾台、森宮の様子は常に報告を求めているが、民からの苦情も特に無いらしい。

しかし沿岸部からの織物はすっかり見なくなった。

暖かくなってきたとは言え、明け方や暮れ時はまだまだ冷える。

皆それなりに羽織ってはいるが、新しい干染を自慢する者はいなかった。

もう少しそれに違和感を覚えるべきだった……

何事も無く、平穏な毎日が過ぎ去って行く。

戦の火種など欠片も感じなかった。

日差しが強く、風が乾く暑い時期にもなれば、皆の服装も薄く軽い北部の川梳き織物ばかりだ

。

この頃既に南部では衛士たちが異変に気づき始めていたのだと言う。

そんな報告は届いていない。

久しぶりにお忍びで外に出てやろうと思っていた矢先、衛士たちが話し込んでいるのを聞いて初めて知った事だった。

「貴方様がそれを知れば、またご見聞に出向かれようと為さるでしょう。ですから先ずは我々が調査を重ね、しっかりと現状を把握した上で報告させて頂こうと思うて居りました」

駆暁はそう言った。

定期的に受けていた報告は全て、こうして調査を重ねた結果なのだと言う。

我ら王族に通される情報は大事無い事が確認出来た物だけだった。

—それでは報告を求めた意味が無いでは無いか！

今この国の現状は一体何が起こっているのか—それを常に把握為ねば、大事の前の小事にさえ気付く事が出来ない。大事になってからでは遅いのだ。

私は父上に響雲の事を話し、彼の言葉を伝える事にした。

彼を信じなかった事、彼の言葉を疑ってしまった事の責任は強く感じた。

後悔している。

だが今、後悔しても状況が変わるわけでは無い。

今出来る事は、一刻も早く警戒し、臨戦態勢を整え、然るべき対応を即座に執れるよう構えておかねばならない事だ。

「その民の言葉を信ぜよと言うのか、お前は」

「響雲は信頼に足る男です」

「では何故その男の話は今更になって我に通すのか」

言葉が出なかった。

「お前自身でさえ疑うて居ったその言葉を、我らに信ずる事が出来ようか」

父上は耳を貸しては下さらなかった。

父上の判断がなければ誰も動こうとはしまい。

「戦う準備なら常に出来ている。それが剣士足る者の構え。お前は出来て居らんのか。不意を突かれて狼狽えて居るようでは未熟よの」

母上も執り合っては下さらなかった。

衛士の長たる何人かには「警戒を怠るな」と厳しく言い聞かせた。

「戦が始まるのですか」

答えようが無かった。

戦の準備など全く出来ていない。そもそも敵がいないのだ。何も被害が無いのだ。

戦の準備など必要では無かった。

しかし、その時既に玉璽は包囲されていた。

玉璽殿を囲む、東の澄原、西の台山、南の尾台、北の森宮。その全ての地域で奇妙な病が流行っているのだと言う。

玉璽は封鎖され、出入りは厳重に管理された。

これではまるで籠城だ――

病の原因は分かっていないが、魁の折に沿岸部の報告に有ったものと同じ症状であるらしく、恐らくは沿岸部から北上したのだろうと言う。

その後の沿岸部での混乱は無く、やがて北上し切れればそれも収まりを見るだろう。

通り雨ならぬ、通り病に違いない――仕官たちはそう言った。

私は響雲を疑ってしまった。しかし今は信じる。

私は仕官たちの報告を信じ込んでいた。しかし今はもう、それを信じる事が出来なくなってしまった。

大事とは、必ずの小事が先に有るもの。

それを見逃せば取り返しの付かない事になる。

―そうってからでは遅いのだ！

やがて病は風に乗れり、玉璽の中までも侵食し始めた。

周辺地域の民からは玉璽に対する謀反とも言える反乱が起き始めていた。

鎮庄に向かう衛士たちに覇気は無く、民に同情して鎮庄に向かわない者まで居る。

これは戦では無い。

しかし国としては危機的な状況だ。

五代続いた国が今、存亡の危機に立たされている。

玉璽の中でそんな雰囲気は微塵も感じない。

―おかしい……

まるでそういった雰囲気を醸さぬよう、取り繕っているかのようにも見える。

危機の認識に違いが見られるのだ。

ことの発端となった沿岸部の怠慢についての報告も二つに分かたれた。

そして今もまた、この危機感を理解する者としめない者に分かたれている。

宮中を疑心暗鬼の渦巻く嫌な雰囲気が満ちていた。

「一刻も早くこの事態を收拾せねばなりません。仰る通り、これは一大事で御座いますぞ」

「何を狼狽えて御出でか。突発的な出来事に、都度惑わされておるようでは……まだまだですなあ、殿下も」

どちらも言い得て妙――私は謀られているのか？

何を信じれば良いのか――――自分を見失いそうになる。

国を挙げて戦を仕掛けられていると言う状況では無い。

我々が武装して戦おうとしている相手は、我々の民なのだ。

しかしこれは内部紛争などでは無い。

明らかに外からの力が働いている。

仕官の中にはそれに頷く者もいた。

ではそれは一体誰なのか——結局はそれが判らず、ただただ狼狽しているだけだと諭される。誰が一体何の目的でこのような事をするのか。

混乱は表面だけを鎮めても深く燻る火種を断たねば鎮圧には至らない。

しかしその根源が余りにも深く、複雑を窮めていて掴み切れない事が実に歯痒い。

静かにゆっくりと、玉璽は蝕まれていた。いや、我が国自体がじわじわと蝕まれていたのだ。長い時間をかけて、ゆっくりと、少しずつ、我々は敵の術中に嵌められているのだ。直感だ。

そんなものに根拠などは無い。

しかし、肌で感じるこの違和感は危機感なのだ。

これをどう説明して良いのか。

これを皆にどう理解させれば良いと言うのか。

民によって包囲された玉璽の門は次々と破られ、民衆は城下にまで押し寄せてきた。

——国中に奇っ怪な病が蔓延したのは皇帝陛下のせいである

——苦しむ民を救おうとも為ず、涼しい顔で何事も無く宮殿の奥で笑って居られる口々にそう叫ぶ民の声が聞こえる。

父上は民の前での弁解を望んだが、仕官たちはそれを止めた。

「病の影響で錯乱しているだけの民にそのお姿を晒すなど、死にに行くようなもので御座います」

錯乱しているだけの民に郡を成して押し寄せるほどの団結力があるだろうか。

——人心を惑わす者が居る

それは玉璽殿の仕官の中だけじゃない。

恐らくは民を煽動している者がいる。

玉璽は完全に包囲され、我々は退路すら断たれていた。

このまま玉璽殿に籠城し続ける以外に道は無い。

父上は覚悟を決めて玉座に籠り、母上は武装して衛士たちの指揮を最前列で執り始めた。

私には解せなかった。

仕官たちは何を考えている……

何故、父上が玉座に籠らねばならない。

何故、母上が武装してまで衛士たちを束ねられるのか。

そのどちらも腑に落ちなかった。

「もう、お分かりですね」

——馬鹿な事を……

駆暁に呼び出され、玉璽の北口、皇城門の手前で錬気と闇装束を渡された。

夜闇に紛れて城を抜けろと言うのだ。

「こちらで御座います。どうか、殿下だけでも……」

父上は捷丸では無い。

天剣を護身として霧衣に持たせてしまっている。

せめて私の錬気を受け取って頂けたなら幾らか安心も出来ようものを……

「錬気は殿下の技量や特性に合わせて打たれた刀。それは殿下の刀であって、殿下以外が振るえる長物ではありません。ですがこの捷丸は違います。専用に打たれた刀ではありませんが、強いと言うなれば、国の璽となる刀。陛下以外で振るう事を許されるのは、澄麗様と霧衣様だけでありましょう。天剣は既に霧衣様の許に有る。だからこそ魔璽国へ渡り、霧衣様にこれを授けよとお命じになられたのでしょうか」

父上は私に亡命を命じた。

霧衣を頼り魔璽国へ亡命せよと言うのだ。

二振り一対の剣は、その双方が揃って初めて意味を成す。

霧衣は一刀の竜剣士。二刀は扱えない。

だからこそ、単なる護身刀だった。

片剣を預かり受ける事は安泰を意味する。

心置きなく道を求めよと門出に渡したものだだった。

そんな霧衣にこの地剣を渡せるものか！

一どの面を下げて霧衣に会えば良いと言うのだ……

母上の許に戻り、共に国を護る為に戦おうと言えば酷く抵抗された。このまま母上一人を戦わせ、私一人が負け犬のようにおめおめと逃げ延びる事など出来ようか。

そんな兄を霧衣は侮蔑するであろう。

剣士足る者が戦場を離れ、安全な場所に身を隠すなどと、どうして出来る。

私の腕は鈍らか！

私の剣は信用ならんか！

幾ら勅令とは言え、何たる屈辱……

駆暁は私に紅鳳の嶺帝様に合力を願えと言う。

なぜそんな事を私が為ねばならぬのか。

なぜこうなる前に予め約定を結ぶなり、急使を送るなり出来なかったのか。

これではまるで一国の恥を全て私が背負っておるようでは無いか！

不可思議な話だった。

「この捷丸は我が命に代えても必ずや霧衣様にお届け致します」

退路は断たれていて玉璽から外へは逃げられない———そう聞いていた。

だが、私たちは玉璽を離れて北上し、駆暁と別れるまでの間、誰一人として追っ手に追われるような事は無かった。

駆暁はそのまま北上し、海を越えて霧衣の居る魔璽国へと向かう。

私は紅鳳の首都、長海へ向かうべく西に走った。

駆暁と別れてそれ程時は経っていない。

数は一〇……いや、二〇は居るだろうか。

完全に囲まれている。

巧く気配を消しているが、その気配の消し方は響雲ほどでは無い。

残念だがその動きの覚り方は響雲から教わっていてよく知っている……これは明華の一部族が得意としている群れの動きだと聞いた。

そうか。

私は謀られたか……

駆暁ほどの男が間者であったとは思いたくない。

しかしこのまま紅鳳にこの者たちを引き連れて行けば、請うものも請えなくなる。

「我は中央帝国が皇帝・瑠鏡が一子。佳の六代、澄麗である！ いざー」

決死の覚悟で名乗りを上げて飛び込もうとした刹那、私を囲む者たちの一部が木の上から零れ落ちてきた。

一人、また一人と零れ落ちてくる死体を見て、周りの気配に動揺が感じられる。

私の左手より左回りに零れ落ちている。

私の抜刀が右手寄り・前方に特化している事を知っている者の手助けか——この機を逃す手は無いな。

我が錬気の抜刀、とくと見やれ！

「やれやれ……全く。危なっかしくて見てられないな、本当に」

一通り片づいた後、森の奥から現れたのは響雲だった。

私が玉璽を出した後からずっと追っていたのだと言う。

—相変わらず気配は全く感じなかったが……

駆暁は明華の間者。

私の側近として仕えるようになった頃に前後して、明華の者たちとの接触を何度かしていたようだ。

霧衣の剣術指南役として玉璽に仕え、霧衣が国を離れて以来、俺の側近としてよく仕えてくれていた。信頼に足る人物だった。

—その駆暁が何故……

「奴はまだマシな方だ。裏切る事への後ろめたさは有ったのだろうな。事切れる間際に迷った末、俺にこれを託してくれた」

「地播……駆暁を殺したのか」

「奴は魔璽国には行かないからな。霧衣様には渡らない手筈だった。だが、結局は国を裏切り切れなかったのだろうな。裏切った報いとして俺に討たれた。「殿下に怨みは無い」「陛下にこの剣が戻らぬのなら……」そう言い残したよ。陛下には何か特別な怨みでもあったんだろうな」

そんな様子は感じなかった。

そもそも駆暁は父上とそれほど面識は無い。

霧衣の剣術指南役として玉璽に仕えるまでは、母上の下で衛士の連隊長をしていた。

霧衣がよく懐いていた。

戦いを好まず、相手を傷つけず、しかし自分も負傷しない。そんな矛盾した霧衣の良き理解者でもあった。

—それがどうして！

「絶望に暮れている暇は無いぞ。戻ろう。紅鳳には行かなくても良い」

「どういう事だ」

「紅鳳は既に明華の手の内に堕ちている。お前は長海で待ち伏せされているよ」

響雲を疑う気は無い。だが——

「お前は一体何者だ。なぜ私が謀られていると分かる」

「知恵蔵を嘗めてもらっちゃあ困るね。俺はこれで生きているんだぜ」

「本当にそれだけなのか。私は本当にお前を信じて良いのか……もう、誰を信じて良いのか私には判らなくなってきた」

そういうと、響雲は立ち止まって、懐から白い小剣を取り出した。

「魔璽国の月光様、正確には先代だが、俺は神音の巫女様と月光様の勅令で動いている。佳・澄麗殿下……貴方様をお守りする為に」

「神音の紋……」

差し出されたそれには確かに神音の、神威の璽が刻まれている。

これと同じものを見た事がある。

母上が霧衣に授けた小太刀・懐王にも、これと全く同じ白い璽が刻まれていた。

小剣を返して、玉璽の方へ歩を急ぎつつ、響雲は話し続ける。

「紅鳳の飛剣、衛玖叉国の微風、来聖の隠密、大峰の水月と共に、私は央州の皇族を亡命させるよう手を尽くして参りました。帝羅国は王陛下、芽狩亜国は皇后陛下が瑞湊姫様よりその命を受けて居られる」

「では霧衣が明月殿、夏風殿と共に国を出たのは……」

「魔璽国にて紅鳳の飛剣がついて居ります」

玉璽近くまで戻ると、響雲は玉璽の東、澄原へと向かった。

「澄原を経由するのか」

「玉璽には戻らない」

「何！？ 何故だ！」

「この辺りで良いか……お前と霧衣様だけしか知らないような場所は有るか」

「私と霧衣だけ？」

「思い出のある場所なら霧衣様は必ず訪れて下さるだろう」

響雲はこれ以上北上はしない——つまり魔璽国には行く事が出来ないのだと言う。預かり受けた地剣が誰にも渡らず、何れ必ず霧衣に渡るように封じるには、私と霧衣しか知らないような場所が望ましいのだと言う。

それはつまり、私も霧衣には会えないと言う……

「この剣は国の璽。これから先、若しもの事が有っても霧衣様だけは生き延びられるだろう。もし、私が貴方様をお護り出来なかったとしても、何れ霧衣様がこの剣と共に再び玉璽の、央州の民を導く事が出来るだろう。策は常に先を見越して手を打っておいた方が良い。もちろん、このまま果てるつもりは毛頭ないが……」

この先、私が生き延びられる保証はない。

この先、響雲が私を守り切れる自信が無い。

そう言っているようにも聞こえた。

玉璽の中では恐らく——

私は澄原を流れる大河の源流を辿った山中の洞穴に捷丸の地剣、地摺を収めた。

流石の知恵蔵もこの場所には驚いていた。

それもそのはずだ。ここは霧衣が大河の主選ばれた場所なのだから……

——天御雷命。

伝承でしか聞いた事が無かった。

まさか実在するとは思わなかった。

霧衣は命様に鍾愛されていた。

命様は霧衣を伴侶に選び、霧衣はそれを受け容れたのだ。

ここはその約束の場所——霧衣に誘われ、一度だけ私も幻竜を目にした。

この場所なら、誰も霧衣の剣を持ち去れまい。

知らなければ入る事が出来ない場所だ。

目的がなければ、今でさえ入る事は出来なかつただろう。

洞穴を出て一息付くと、改めて現状を整理したくなった。

「一体何が起きていると言うのだ。さっぱり解らない」

これからどうするか。全ては現状をしっかりと把握しなければ何も始まらない。

「俺も全てを知っているわけじゃない。だが動いているのは明華と紅鳳だ。もつとも、既にかつての紅鳳ではないが……残念ながらこんな所で立ち話をしている暇は、無さそうだな」

既に私たちは包囲されていた。

一体何が起きているのか。

何故、私は逃げているのか。

落ち着いて考えている暇が無い。

少なくとも、現状は四面楚歌。これをどう切り抜けるか……

「背後はお任せ下さい」

「お前を信じるぞ、響雲」

「御意」

今は唯、生きる事……

今は唯、殺す事……

襲いかかってくる刃と言う刃、敵意と言う敵意全てを薙ぎ払う……私の思考は唯、それだけに集中した。



明鏡止水に零れる滴———

私と言う自我は敵意と言う滴を払い、止水の思考は研ぎ澄まされる。

深く……

どこまでも、深く。

私は空となり、空は私となり、私は宇宙で在るが故、宇宙なる私が刃であった。

不思議な感覚だった。

「お見事です」

響雲にそう言われるまで、私は覚めなかった。

気が付けばもう、そこは戦場では無かった。

我に返ればこれまでの、自分がまるで自分では無いかのように思えた。

「生きているか、響雲」

「何とか……」

利き腕に突き刺さった剣を引き抜いてそう言う。

私よりも身のこなしが良い響雲の方が手傷を負っている……未熟！

恐らく響雲は私を庇いながら戦っていたのだろう。

我が未熟を恨めしく思う。

「敵の剣を、受けてはおりませんか、殿下」

「心配ない、かすり傷だ」

足を少々掠められたか、既に止血しているが、受けた傷はそれくらいだろう。

私が足を指してそう言うと、響雲が慌てて駆け寄った。

「駄目だ……毒が！」

彼らの剣には毒が塗られていた。

ほんの僅かであっても、その傷から入り込む毒に罹れば意識を奪われるのだと言う。

我が国に蔓延した病はこの毒を風に乗せて散布し、皆、気付かぬまま毒に冒されていたらしい

。

毒はやがて自我を奪い、やがて知性を無くした獣同然に成り下がるのだと言う。

解毒は難しく、敵から奪った石のようなものから魔導法を用いて打ち消す事が出来るらしい。

「このまま川を下れば海に抜ける。紅鳳へ北上した筈の皇太子が、まさか南の海に逃げているとは思いませんまい」

私は死ぬのだろうか……

響雲が私に魔導法を施している。

しかし私よりも響雲の方が重症な筈だ。

「俺はこの毒に罹り難い体質でね。大丈夫だ。お前を死なせはしない」

嘘だと判る。

そんな必死で、そんな虚ろで、そんなに汗を滴らせるお前を、私は見た事が無い。

「私は、お前に謝らなければならない」

「どうか安静になさいませ」

「私はお前を疑ってしまった」

私はもう、死ぬのかも知れない。

もう自分が何を言っているのか、今、自分はどこにいて、何をしているのか、よく分らない。

「許せ響雲。許せ……」

死ぬ前にどうしても言っておきたかった。

私が生涯で唯一人、友と認めた男だ……………

「この命に代えても必ずや……貴方様を、お守り——」